

2021（令和3）年度

表出困難な人の意思の尊重における「推察」の研究
～家族介護者と施設職員へのインタビューから～

指導教授 安部 計彦
人間科学研究科 人間科学専攻
18DH001
夏秋 圭助

目次

第1章 研究の背景	1
1. 高齢者の意思の尊重をめぐる政策の経緯	1
2. 社会保障における意思の尊重の位置づけ	3
3. 意思を明確に確認できない状況の拡大	4
4. 表出困難な意思の確認に関する動向	5
5. 終末期の高齢者に対する意思の確認に関する動向	7
第2章 先行研究	8
1. 表出困難な意思の尊重	8
(1) 社会福祉における意思の尊重の経緯	8
(2) 「意思」をめぐる論点	9
(3) 表出困難な意思を捉える視点	10
2. 意思の尊重の臨床	11
(1) WELL-BEING をめぐる意思の尊重の位置づけ	11
(2) 専門性によるケアが重視される経緯	12
(3) 意思の尊重への転換	13
(4) 意思の尊重をめぐる専門性の課題	14
3. 意思の尊重をめぐる専門性の在り所	15
(1) 意思の尊重に関する社会福祉の専門性	15
(2) 表出困難な意思の推察	17
(3) 関係性による推察の負担感	19
4. 意思の尊重に関する課題	20
(1) 意思の尊重をめぐる特性の課題	20
(2) 施設職員による推察の課題	20
(3) 家族介護者による推察の課題	20
第3章 研究の目的	21
1. 研究の目的	21
2. 研究の意義	21
3. 研究の枠組み	22
4. 研究の構成	24
5. 用語の定義	25
6. 研究方法の検討	26

(1) 表出困難な人の意思に関する研究方法	26
(2) 本研究における質的研究の視点	26
(3) SCAT の特徴	29
(4) 本研究の対象と調査の内容	31
(5) 倫理的配慮	34
第4章 家族介護者による意思の尊重に関する調査（第1研究）	36
1. 調査の目的と概要	36
(1) 調査の目的と概要	36
(2) 倫理的配慮	37
(3) SCAT のエビデンスの見方	37
2. 家族介護者による意思の尊重に関する調査結果（第1調査）	38
(1) A の調査結果	38
(2) B の調査結果	40
(3) D の調査結果	42
(4) E の調査結果	44
3. 第1調査の小括	46
(1) 関係性の再構築	46
(2) 表出困難な意思への気づき	46
(3) 推察をめぐる解釈への不安	46
(4) 推察した意志の評価	47
4. 家族介護者の負担や葛藤に関する調査結果（第2調査）	48
(1) A の調査結果	48
(2) B の調査結果	50
(3) C の調査結果	52
(4) D の調査結果	54
(5) E の調査結果	55
5. 第2調査の小括	56
(1) 推察による負担の内容	56
(2) 対等な関係による支援	56
6. 第1研究の考察	58
(1) 推察の循環的成熟	58
(2) 家族介護者の負担に対する支援の視点	59
(3) 家族介護者の推察による意思の尊重への示唆	60

第5章 施設職員による意思の尊重に関する調査（第2研究）	62
1. 調査の目的と概要	62
(1) 調査の目的と概要	62
(2) 倫理的配慮	63
(3) SCATのエビデンスの見方	63
2. 施設職員による意思の尊重に関する調査結果（第3調査）	64
(1) J氏の調査結果	64
(2) K氏の調査結果	66
(3) L氏の調査結果	68
(4) M氏の調査結果	70
(5) N氏の調査結果	72
3. 小括	74
(1) 事前の関係性の構築	74
(2) 生の履歴からの気づき	74
(3) 専門性による解釈の冷静さ	75
(4) 推察した意思の評価	75
4. 施設職員の負担や葛藤に関する調査結果（第4調査）	76
(1) J氏の調査結果	76
(2) K氏の調査結果	78
(3) M氏の調査結果	80
(4) N氏の調査結果	82
5. 小括	84
(1) 推察がもたらす感情的な負担	84
(2) 推察の負担に対する支援の関係性	84
6. 第2研究の考察	85
(1) 直感的に捉えた意思と専門性の接点	85
(2) 施設職員に蓄積される専門性	87
(3) 施設職員の推察の負担軽減	87
第6章 総合考察	89
1. 研究目的への応答	89
2. 表出困難な意思の推察の特性	90
(1) 推察の循環	90
(3) 意思の尊重をめぐる推察の特性	92
3. 推察の循環の類型に関する専門性	95
(1) 施設職員による推察の起点	95

(2) 推察に関する専門性の位置づけ	96
(3) 推察が WELL-BEING に資する専門性の構造	97
4. 推察の負担に関する考察	99
(1) 家族介護者による推察の特徴	99
(2) 推察において生じやすい負担	99
(3) 推察を促す環境への示唆	100
第7章 結論	102
1. 各章の結論	102
2. 本研究の結論	106
3. テーマに対する見解	106
(1) 意思を推察し続ける親身性	106
(2) 社会福祉の専門性として	106
(3) 推察における個別性と専門性の相互理解	107
第8章 残された課題	109
1. 質的研究としての課題	109
2. 職務として理解できる範囲の課題	109
謝辞	110
参考文献	111

第1章 研究の背景

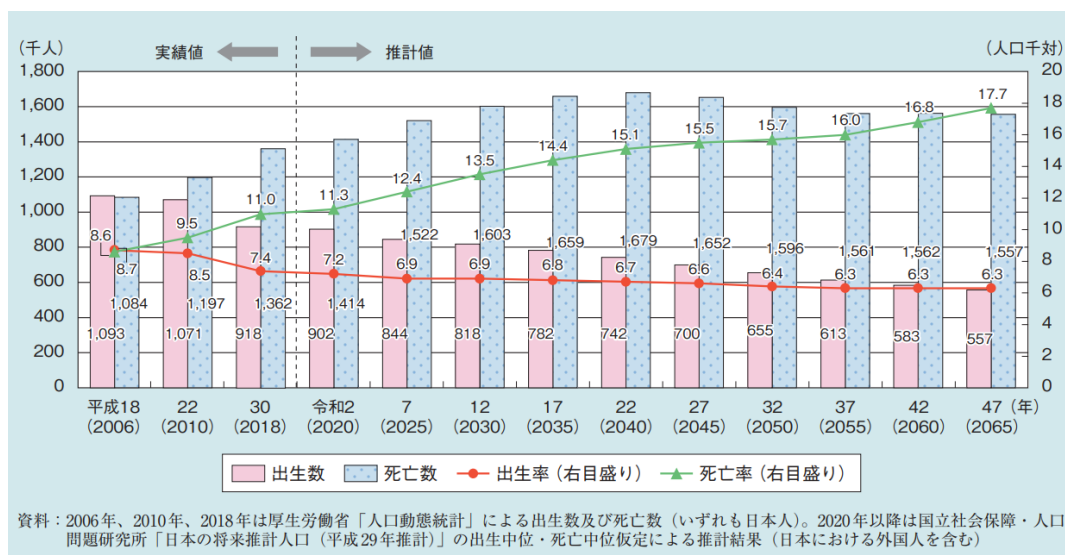
1. 高齢者の意思の尊重をめぐる政策の経緯

わが国の65歳以上の高齢者人口は、3589万人となり、総人口1億2617万人に占める割合（高齢化率）は28.4%で、今後も高まることが推計されている（高齢社会白書 2020:2-3）。さらに、高齢化率の増加によって、将来の死亡数の推計も急速に増加している（高齢社会白書 2020:5）。

少子高齢社会という人口構造とともに、高齢化後の死亡数が増加し人口減少が加速する多死社会において、死にゆく過程をどのように暮らし、どこで死を迎えるかということ、年々重大な関心事となっている。

高齢期の老いゆく過程、死にゆく過程の生活をめぐって、住み慣れた地域での在宅生活を継続したいというニーズは根強い。「平成19年度 高齢者の健康に関する意識調査」の「介護を受けたい場所」に関する項目においても、「自宅で介護してほしい」が41.7%で最も高く、「介護老人福祉施設に入所したい」（18.6%）、「病院などの医療機関に入院したい」（17.1%）、「介護老人保健施設を利用したい」（11.5%）などの順となっている。「平成24年度 高齢者の健康に関する意識調査」の「介護を受けたい場所」に関する項目においても、「自宅」を希望する割合が最も高い。近年の厚生労働白書では、この多くの人の在宅生活継続の意思に基づき、地域包括ケアシステムの構築が進められている。

図1-1 「出生数及び死亡数の将来推計」 引用：令和2年版高齢社会白書 p5

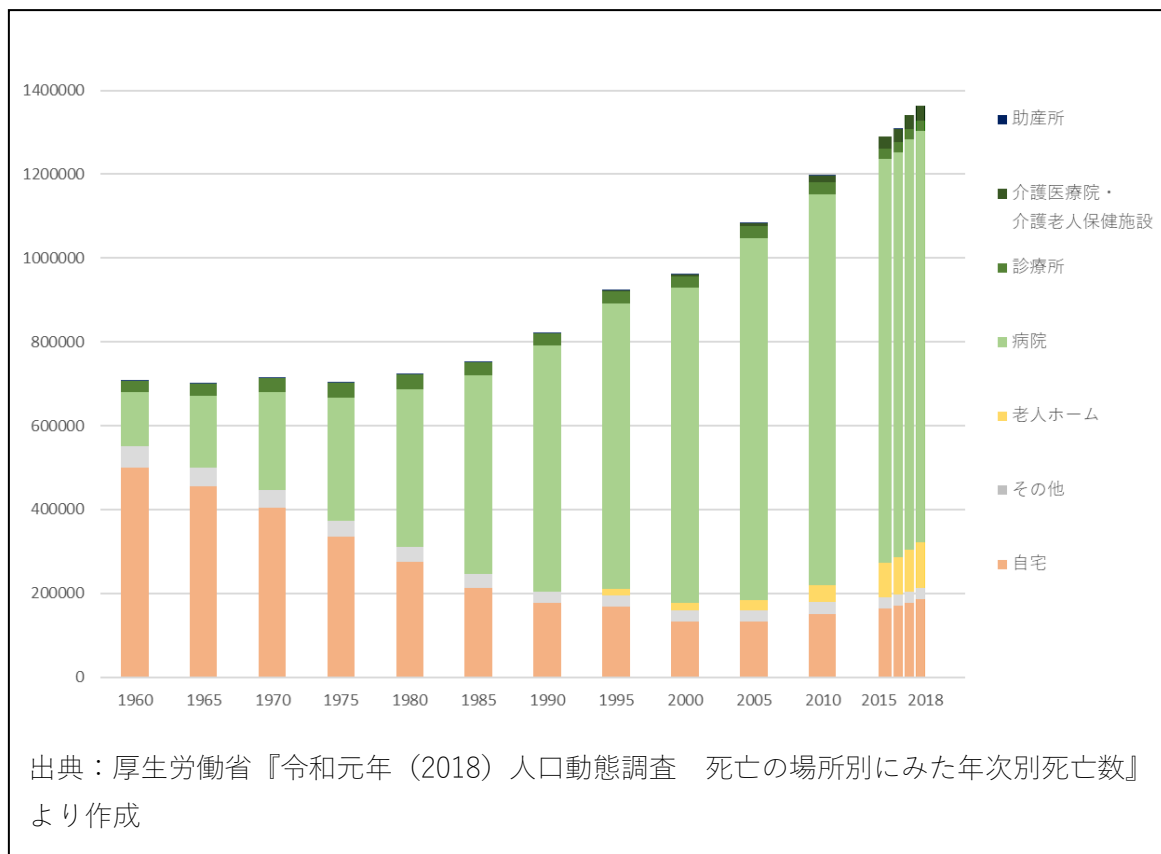


一方、厚生労働省がまとめた2018年の人口動態統計（確定数）によれば、全死亡者は136万2470人であった。しかし、自宅で亡くなった人の割合は13.6%（18万6205人）で、2006年が12.1%（13万1854人）となった以降は緩やかな増加の傾向にあるものの低迷している。これに対して、医療機関で亡くなった人の割合76.3%（104万516人）と、高い水準を推移している（2018年の人口動態統計 5-5 死亡の場所別にみた年次別死亡数）。

この数値は、最後の急変で救急車を呼び、病院で亡くなるケースも含まれるため、必ずしも死にゆく過程のあり方を直接的に示しているとは言えないが、救命の末に望まぬ延命も繰り返されてきた経緯からも、繰り返し参考とされている。

病院死の増加傾向について、厚生労働省は2012年度診療報酬改定の資料において、死亡場所別死亡者数の年次推移と将来推計から、2030年には47万人の死に場所がないという推計を示し、看取り難民という言葉で注目をあつめた。2020年現在、「看取り難民」という言葉が与えた衝撃的な状況には至っていないが、当時から歯止めをかけようとしていた社会保障費は近年も伸び続けており、2019年度の社会保障給付費は予算ベースで約123.7兆円まで膨らんでいる。そのため、在宅生活継続は、高齢期や終末期を支える介護や医療を焦点に、社会保障費をめぐる財政的な課題も背景にある。

図 1-2 2018年までの死亡場所別、死亡者数の年次推移の実績



2. 社会保障における意思の尊重の位置づけ

2012年の社会保障制度改革推進法では、「この法律は、近年の急速な少子高齢化の進展等による社会保障給付に要する費用の増大及び生産年齢人口の減少に伴い、社会保険料に係る国民の負担が増大するとともに、国及び地方公共団体の財政状況が社会保障制度に係る負担の増大により悪化していること等に鑑み・・・」と、財政的な限界という背景を前提に掲げている。そして、追従して、保健医療・福祉の範囲の適正化、介護サービスの効率化などを課題としてあげており、その上で、家族相互及び国民相互の助け合いを求めている。財政上の理由に続くものとして、在宅ケアや在宅死を明言しないまでも、家族や地域の役割を位置づけている。

2013年の社会保障制度改革国民会議報告書では財政的な背景とともに、「Ⅱ医療・介護分野の改革」において、慢性疾患という疾病構造の変化を背景に加えている。「平均寿命60歳代の社会で、主に青壮年期の患者を対象とした医療は、救命・延命、治癒、社会復帰を前提とした『病院完結型』の医療であった。しかしながら、平均寿命が男性でも80歳近くとなり、女性では86歳を超えている社会では、慢性疾患による受療が多い、複数の疾病を抱えるなどの特徴を持つ高齢期の患者が中心となる。そうした時代の医療は、病気と共存しながらQOL(Quality of Life)の維持・向上を目指す医療となる。すなわち、医療はかつての『病院完結型』から、患者の住み慣れた地域や自宅での生活のための医療、地域全体で治し、支える『地域完結型』の医療、実のところ医療と介護、さらには住まいや自立した生活の支援までもが切れ目なくつながる医療に変わらざるを得ない。」(社会保障制度改革国民会議 2013:21)として、高齢者の老・病・死について、慢性疾患との共存やQOLなどをあげることで、医療による延命や治癒から、介護との連携、自宅や地域へと課題の中心を移している。ここでは、住み慣れた地域や自宅での生活の維持を、本人のQOLに直結する目的として位置づけた上で、疾病構造の変化に対応するための地域医療の推進を求めている。

また、2014年(平成26年版)の厚生労働白書では、「社会構造の変化や高齢者のニーズに応えるために『地域包括ケアシステム』の実現を目指している。『地域包括ケアシステム』とは、地域の事情に応じて高齢者が、可能な限り、住み慣れた地域でその有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう、医療、介護、介護予防、住まい及び自立した日常生活の支援が包括的に確保される体制のことをいう。高齢化の進展のスピードや地域資源の状況などは地域によって異なるため、それぞれの地域の実情に応じた地域包括ケアシステムの構築を可能とすることが重要である。」(厚生労働省 2014:397)として、本人が可能な限り住み慣れた地域で生活を営むことを目指し、地域によって異なる社会構造や実情に応じた地域包括ケアシステム構築の必要性を述べている。特に、「多くの国民が自宅など住み慣れた環境での療養を望んでおり、高齢になっても病気になっても自分らしい生活を送ることができるように支援する在宅医療・介護の環境整備が望まれている。」(厚生労働省 2014:386)など、本人の望みを明確に位置づけたものへと変化している。

このように、在宅生活継続を位置づける文脈は、「ひっ迫する社会保障財政を改善するため」という位置づけから、「本人の望みやQOLを尊重するため」へと位置づけを変化させてきた。この変化において、老いゆく場所を病院から在宅へと変えることを一貫して目指しながらも、位置づけが高齢者本人の意思の尊重へと変化することによって、中核とするケアの価値は、「客観的な必要性」から「本人の望み」という意思の尊重へと緩やかな変化をもたらしている。

3. 意思を明確に確認できない状況の拡大

社会保障における意思の尊重の位置づけは、近年において、さらに死にゆく本人の意思を尊重するものとして位置づけられている。2015年（平成27年版）の厚生労働白書では、介護を受けたい場所として在宅を挙げ、在宅生活を中心とした地域包括ケアシステムを図示して構想を強調している。

また、2016年（平成28年版）の厚生労働白書では、「高齢社会に関する意識調査」（2016年）や「人生の最終段階における医療に関する意識調査」（2014年）の結果を挙げて、死ぬまで暮らせる仕組み作りを求めている。

2019年（令和元年版）の高齢社会白書においても、「(1) 高齢者が現在住んでいる地域に安心して住み続けるために」として、「60歳以上の人のうち9割近くが持家に居住しており、持家居住者を中心に、ほとんどの人が現在住んでいる地域に住み続けたいと考えている。そして、約半数が、最期を自宅で迎えたいと考えている。」と、在宅生活継続のニーズを示したうえで、認知症を始めとした病気や要介護をリスクとして、個人の努力のみでは解決が困難であるという限界において、地域住民の努力をはじめ、多様な取り組みを求めている。

しかしながら、こうした意思の尊重において、認知症などによって明確に意思表出ができない状態となる人は少なくない。認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）では2025年には認知症患者数が約700万人になると推計されており、また、高齢者の単身世帯が増加する傾向にあることをかんがみれば、この明確な意思が確認できない場合への想定はより重要なものとなる。2007年の要介護認定調査検討会による高齢者介護実態調査では、本人の要介護度別に身体や生活に関する統計がまとめられている。意思の尊重に関わりの深い項目として、「11-1 独自の表現方法の使用」として、「独自の方法によらず意思表示ができる」は要介護度4で60%、要介護度5では21%程度となっている。また、介護者からの説明の理解も同程度に低い状況が示されており、多くの場合、独自の表現方法を用いても意思表出が困難な状況となっている。

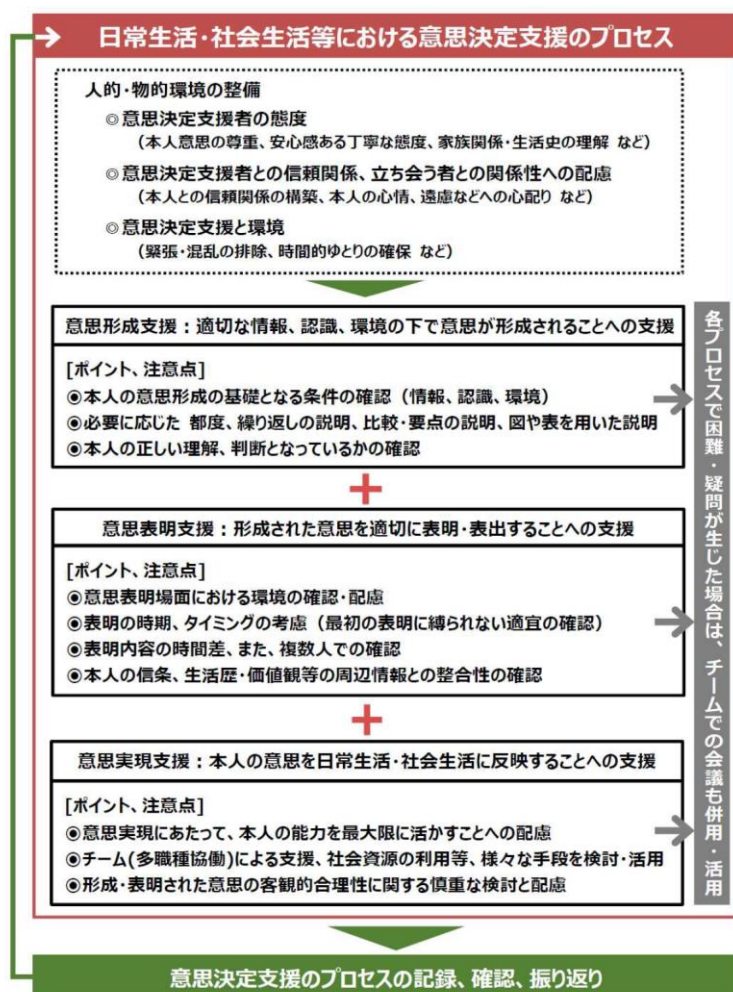
4. 表出困難な意思の確認に関する動向

表出困難な高齢者の意思について、近年では成年後見制度として尊重が図られてきた。成年後見制度は、認知症、知的障害、精神障害などの理由で判断能力の不十分な人々を対象として、法律行為をひとりで行うのが難しい場合において、法的に保護し、支援する制度である。

2017年3月に閣議決定された「成年後見制度利用促進基本計画」内において、成年後見制度利用促進委員会は「障害者や認知症の人の特性に応じた適切な配慮を行うことができるよう、意思決定の支援の在り方についての指針の策定に向けた検討等が進められるべき」と指摘している。これを受けて、厚生労働省は、2018年に「認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン」をまとめている。

このガイドラインは、認知症の人という対象の定義を「認知症と診断された場合に限らず、認知機能の低下が疑われ、意思決定能力が不十分な人を含む。」（厚生労働省2019:2）として、原因となる疾患や症状ではなく、結果としての意思表示の行為の困難さを焦点としている。そのうえで、「本人の意思の尊重」が「尊厳をもって暮らしていく」ため重要であることを基本原則に掲げ、(1)本人が意思を形成することの支援（意思形成支援）、(2)本人が意思を表明することの支援（意思表明支援）、(3)本人が意思を実現するための支援（意思実現支援）の3つのプロセスを示している。

図 1-3 日常生活・社会生活等における意思決定支援のプロセス(出典：認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定ガイドラインについて p8)



本研究においては、認知症の人という言葉が、一般に認知症と診断された人を想定するため、「表出困難な高齢者」という表現を用いることとする。

そのうえで、表出困難な高齢者を想定すれば、ガイドラインの3つのプロセスの(1)では、意思形成支援において、重度に表出困難な高齢者にとって「意思」とはどのようなものであるか、(2)では、明確に表明することが困難な高齢者の意思を「尊重」するにあたって、どのように「把握」する方法があるかなどを検討する必要がある。

5. 終末期の高齢者に対する意思の確認に関する動向

高齢者の意志の形成、または表出が困難になった場合への備えとして、事前指示書などのアプローチが存在する。こうしたアプローチは「Advance Directives (以下、ADs) は事前指示といわれ、判断能力のある成人が将来自分（本人）の判断能力が低下した、または消失した時に備えて、自らに施される医療に関する希望や拒否などの意向を指示しておくものである。」(西川 2016:5) と言われる。

近年の医療では、主観を含む長期的な文脈の中から推定する Advance Care Planning (以下、ACP) が試みられている。ACP は、「将来の意思決定能力の低下に備えて、今後の治療・ケア、生活について、本人・家族などの大切な人そして医療者が話し合うプロセスである。話し合う内容は、現在の病状と今後の見通しのみならず本人の価値観や希望、人生や生活の意向を含む。それらの内容は心身状態の悪化など病状が経過する中で変化することを前提として、さまざまな局面で繰り返し行なわれるものである」と定義されている(西川 2016:3)。

一方で、ACP の倫理的課題として、「ACP は ADs 以上に意思決定過程に代理人や家族を含めた患者をとりまく関係者が関わることになり、患者の意思の共有化が図られるため、逆に関係者が患者の意思決定に影響を及ぼす機会が増える危険性を指摘したい。…このように話し合いを推進し、意思の共有化を推進する ACP の過程には、家族などの関係者への過剰な配慮の結果、患者本人の意思を抑圧する形で意思決定が行なわれる危険性にも十分留意する必要があるだろう。」(西川 2016:31) ことが挙げられているように、そのアプローチは可能な限り率直な表出を妨げない自然な関わりであることが求められる。

このように ADs や ACP では、表出困難となる事前に、意思を形成し、表明するという方法が取り組まれている。しかし、意思の内容が具体的になるほど、疾病や介護の状況だけでなく、家族の状況や経済的状況など、様々な要因が複合して判断される。詳細に想定した上で、未来における意思を事前書き起こすことは必ずしも容易ではない。そのため、表出困難な状態となった後の、状況、環境、考え方などの変化によって、意思が最後に確認できた内容から変化している可能性への配慮が必要となる。

第2章 先行研究

1. 表出困難な意思の尊重

(1) 社会福祉における意思の尊重の経緯

社会福祉において「意思を尊重する」ことは、カント派のテーマである「自己決定を行う存在としての個人の尊重」という基本的原理として、1960年代より、ソーシャルワークの重要な原則とされてきた (Banks 2016:54)。

バイスティックの原則「利用者の自己決定」が、「利用者をありのままに受け入れる」という事は、利用者をステレオタイプ化ないしカテゴリー化するというよりも、明らかにすべての人間が生まれながらにもつ、価値や尊厳を尊重する」(Banks 2016:54)ように、「意思の尊重」は「人間の尊重」と矛盾しない道徳的な原則であった。しかし、ケースワークやソーシャルワークの原則としては具体的な示唆が不完全であり、またさまざまな解釈を許すものであることが、極端なリバタリアンや「自律性」を取り出して再生させる危険性として指摘された (Banks 2016:57)。

意思の尊重は多様な倫理的課題を含んでおり、意思を有しているか否かを前提とする視点は、パーソン論として批判の対象となることも多い。パーソン論は、シンガーが『人間』という語の意味を、『ホモ・サピエンスという種の構成員』という生物学的意味と『理性的で自己意識のある存在』という人格の意味とに区別」(陀安 2004:1)した倫理であり、「自己意識を基準として、二分法的な人間の線引きが厳密にできるのかという点、また自己意識や理性といった知的側面を存在価値の基準とした点への批判」(藤井 2018:49)である。また、「人格の尊厳の根拠を理性や自由意志といった特定の能力に求める」危険性については、「優生政策・優生思想との近接性を浮かび上がらせる」(児島 2020:87)と指摘される。

意思の尊重は、今日においても未だ尊厳を尊重するための重要な要素であり (Deborah Cairns 2013:4)、意思決定への参加は根本原理の一つとされる。その場合、適用範囲の広い原理をいかに履行するかという課題に対して、「人間 (ヒューマンビーイング) の意味の解釈にかかっている」(Banks 2016:71-72)と述べられるように、「意思」の解釈を、「人間」や「存在」に関わる道徳的な視点から、あらためて捉えることが必要となっている。

藤井は、パーソン論や功利主義などの社会福祉の価値をめぐる経緯を踏まえ、尊重されるべき根拠として、「人間が何において同じなのかといえば、それは、人間の根源的な存在意味にあるとしかいえない。それぞれが同じく尊いという普遍性を語ろうとすれば、スピリチュアリティ抜きに語る (身体的・心理的・社会的側面のみで語る) ことの方が、不自然であると筆者は考える」(藤井 2018:51)と述べ、さらに根源的領域への視点を求めている。スピリチュアリティ、パーソンセンタードなど、人間の尊厳を尊重するための視点が多様な言葉や概念で繰り返し求められるように、道徳的次元における意思を実践的次元における意思につなぐことが必要とされている。

(2) 「意思」をめぐる論点

「意思」を社会福祉における尊重の対象として、人間の根源的な価値を見出そうとするならば、「意思」をめぐる視点を整理する必要がある。「意思」について、広辞苑第七版では「考え。おもい。→意志」と短く示し、「意志」へと説明を導いている。意志は「ア〔哲〕 道徳的価値評価を担う主体。理性による思慮・選択を決心して実行する能力。知識・感情と対立するものとされ、併せて知・情・意という。」「イ〔心〕 物事をなしとげようとする、積極的な心の状態。」と2例を示しているように、一般的に「意思」と「意志」は、おおよそ同義の概念とされる。

これに対して、川崎は「意思」と「意志」の異同について、「1つの概念は、今ある『内心の意思』をもとにこれから表示していく場合であり、この場合は『様々にある意思をとりまとめて一つに絞って表示する』ことを指す。もう一つの概念は、これから表示される『意思』の存在をもとに、この語を未来先取りの用いる場合であり、この場合は『常々行為としてあらわしてきた意志を改めて明確に表示する』ことを指す。前者の場合は未確定の『意思』すなわち『オモイ』を対象にしており、後者の場合はあるべき確定した『意志』すなわち『ココロザシ』を対象とする。」(川崎 2012:47)と説明し、「もともと意思は『オモイ』を当てた漢語であり、この『オモイ』が生じる理由もまたそれが変わる理由も必要としない。これに対して『意志』は、ベクトルの(始点と終点と方向性と距離と到達とを併せ持つ)概念を持ち、それゆえに『意志』が生じた理由や変化した理由を本人が明確に認識するという違いがある」(川崎 2012:47)と、「思」と「志」の漢字の持つ意味から、法学や倫理学における視点から異同を説明している。

一方、哲学的な視点を概観すれば、「意志」という言葉は、カントにおける実践理性としての自律的な自由意志ととらえるか、ニーチェやショーペンハウアーにおける存在の根本的な性質としてとらえるかによって、視点は大きく異なる(山本 2008:4-6)。例えば、ショーペンハウアーは、「現実の世界の一々の現象は、根本的にはいかなる根拠/底も無い仕方では生成するということ、そしてそれがあらわになることは、我々の自己の意志が元来それであるところの底なき意志としてそのあるがままに働くことであるという洞察である。意志とは、我々が直接にそれであり、それを生き抜いているところの、いかなる『根拠/底』も無くして働く活動の名である」(板橋 2016:207)として、「意志」は「根拠」により生じるものではなく、始点や終点を有する「ベクトルの」な意味を前提とせず、生きる存在の根源的なあり様までをも示している。

このように、「意志」の意味や、「意思」との異同について、未だ複雑な視点が存在している。本研究で「イシ」を扱うにあたっては、表出困難な高齢者を含むすべての人を対象とする必要がある。そのため一般に、より広義に捉えうる「意思」という表現が適しており、また、ベクトル的な意味や根拠などを前提とせず、すべての人が根源的に有するものと捉えて扱う必要がある。

(3) 表出困難な意思を捉える視点

意思をすべての人が根源的に有するものとして捉えると、その表出が困難な高齢者を尊重するためには、他者から捉えられる視点が必要となる。意思を存在の根源的なあり様まで含んだ哲学的な視点と、その意思や苦悩を他者が感取する道徳的な原理や倫理思想の視点、そして他者がどのように捉えうるかという具体的な視点の間にはいくつかの接合点がある（林 2016:102-103）（太田 2018:90）。この点に深く触れることは避けるが、「超越論哲学として共苦論を捉える妥当性を論じ、表象が『根拠律の根』と呼ばれる主観と客観の相関関係に基づいていることから、根源的な意識の形式において、自他の同一性がア・プリオリに基礎付けられるという答えを導き出した」（林 2016:111）と述べるように、表出困難な他者の意思については、根拠を必要とせず、あらゆる経験的認識に先立って直感的に捉える視点から検討することが妥当であると考えられる。

意思を他者が直感的に捉える視点については、ショーペンハウアーの「共苦」という倫理思想に示されている。共苦という認識には直感的な性格があり、「具体的な経験を通じて『直感的』な仕方で獲得される認識と、『理性』を通じた『概念』による『抽象的な認識』の間に、明確な区別を設ける」（太田 2018:91）と述べられている。直感的に捉える視点は、フッサールやハイデガーの現象学における本質直感や本質観取などにも通底する視点であり（小林 2015:38, 43）、表出困難な人についても、臨床で関わる人にもみ捉えうる意思の側面があることを示唆している。

この表出困難な意思の尊重が重要となるケースは、老いと死の間に生じやすく、おのずと終末期ケアの臨床において問われることが多い。ターミナルケア、ホスピスケア、認知症ケア、高齢者ケアなどの臨床において、寄り添い、受容、感情労働、パーソンセンタード、ユニット、スピリチュアリティなどの多様な理論が実践され、直感的に捉える視点の重要性が示されることも少なくない。一方で、陳が、認知症高齢者ケアをめぐる、「『本人のうれしさ、喜びを共有する』、『本人の生き生きすることを尊重し見守る』などのパーソンセンタードケアで重視しているその他の内容については、重要と感じていても、適切に実施できていないと考えられている。これは、従来のアセスメント項目の中にチェック項目が不足している部分があるためと考えられる。」（陳 2016:102）と述べるように、特に専門職において、表出困難な高齢者の意思を直感的に捉えるには、まだ課題が残されている。

このように、意思を、表出困難な高齢者を含むすべての人が有する、生きる存在や活動などを含んだ視点である場合、他者は根拠なく直感的に捉えることが必要となってくる。しかし、専門職がこれを担うには課題が残されており、先立って職務としての位置づけを確認しながら課題を整理していく必要がある。

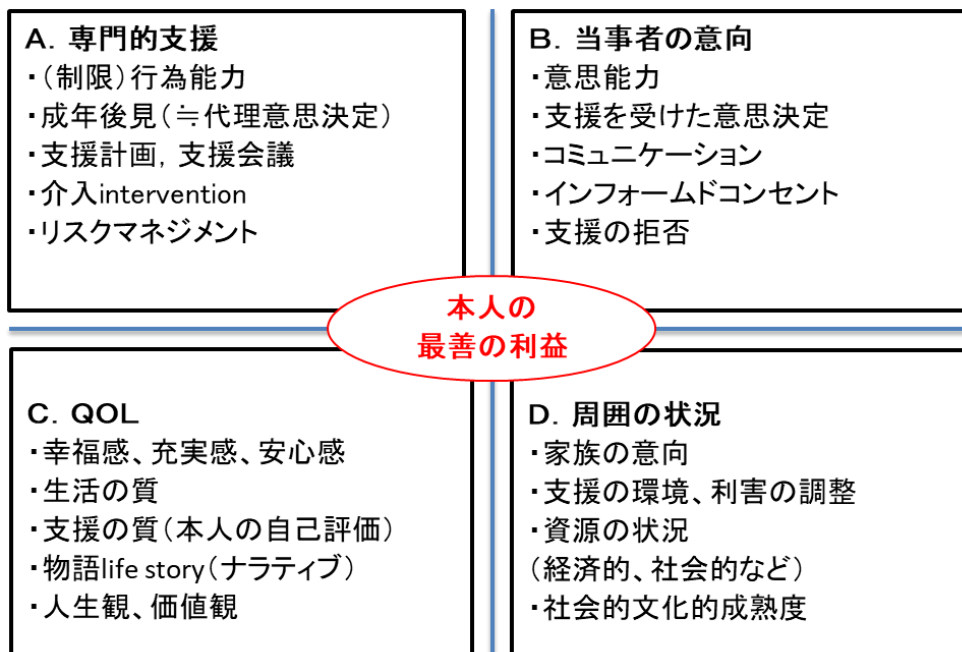
2. 意思の尊重の臨床

(1) Well-Being をめぐる意思の尊重の位置づけ

以上のように、Well-Being をめぐる研究は、学際的に多面性を有するが、ジョンセンのは本人の最善の利益を焦点に「医学的適応」、「患者の意向」、「QOL (quality of life)」、「周囲の状況」の4つの領域に整理している (Jonsen 2006:13)。増田は、ジョンセンの4分割法から表出困難な人の意思決定支援の構成や課題を分析し、代理意思決定者が判断する過程や意思決定支援においては、「医学的適応」や「周囲の状況」がより客観的で根拠たりえると判断されることを危惧し、「〈意思決定〉とは、もっとも人称的な世界の働きである。きわめてプライベートな生活世界(一人称)で行われる行為であると同時に、他者との関係(二人称)のなかで形をなしていくことである。」と文脈の中で理解されることの重要性を述べている(増田 2018:7)。

表出困難な意思の尊重において、成年後見制度が本人の意思を軽視する風潮について、「本人は、常に事理弁識能力(判断能力)のない状態、つまり、何も分からない状態だということになり、後見人は、本人のことについて何かを決めるときも、本人には聞いても意味がない、仕方がない、ということになるのである。」(日本弁護士連合会 2015:22)と、問題意識が示されている。

図 2-1 <意思決定支援>の構成



出典：『障害者の「意思決定支援」の臨界をめぐる考察 (I)』P4 より引用

(2) 専門性によるケアが重視される経緯

表出困難な高齢者の意思について、直感的に捉える視点が重要であることが示されているが、客観的な専門性が求められるケアの臨床において、両立することは容易ではない。そのため、表出困難な高齢者に対するケアの経緯から位置づけを確認し、臨床における意思の尊重の課題を整理していく必要がある。

高齢期の意思の表出困難な状況は老いと死の間にあることも多く、その尊重やケアのより良さは、QOLやQOD (quality of death, 死の質)として、老年学や死生学と隣接している。死に関する研究は、1971年のE. キューブラーロスの「死ぬ瞬間—死にゆく人々との対話」以降盛んとなり、終末期ケア、死の自己決定、孤独死、日本の死生観などの多様な側面からQODに示唆を与えている(柴田 2015:11-18)

わが国において、死の臨床が専門職に委ねられるようになった経緯には、1960年代から2000年における、世帯構造の変化、疾病構造の変化、医療技術の躍進、経済社会の変化など、多様な背景がある。主要な一因として、清水は「実現不可能と考えられていた治療が医療技術の革新とともに現実のものとなっていった時代であった。一例をあげれば、日本人は長い間、結核と肺炎に苦しめられてきたが、抗生物質の登場で『不治の病』が治療可能なものになった。」(清水 2009:15)ことを述べている。そして、新村は「少し歴史を振り返ってみればわかるように、数十年前までは家で最後を迎える人は多く、家族は親族や地域の人たちの協力を得ながら死を看取っていた。・・・病院や施設での死が増えるにしたがい、当然のことながら看取するための知識や技術が家や地域から失われてゆくことになる。いわゆる看取りの文化の消失である。」(新村 2001:8-9)と、在宅生活継続の文化の消失に触れ、「死が近づけば、家にいたいという病人の意思に反して救急車を呼んでしまい、病院へ送り込むのが一般的である。」(新村 2001:8-9)など、病院死率が高止まりしている要因を示している。

このように、医療に対して治療のみならず、介護生活や意思の尊重などをも一律に委任したことが、病院死を一般の死生観にまで引き上げてきた。委任される医療側も「20世紀的状况において、医療供給システムが効果的な治療システムであることを要請されるようになった」(猪飼 2010:3)ため、より客観的で、エビデンスに基づく医療(evidence-based medicine、EBM)が求められるようになった。そのため、ケアの専門性に委任されてきた経緯から、本人の意思の尊重などは背景へと秘められていったと考えられる。

(3) 意思の尊重への転換

専門性によるケアが重視されてきた経緯において、長い闘病生活や過剰医療などの治療の限界における問題は、病院死の死生観に疑念を与えてきた（猪飼 2010:7）。そのため、避けられない死の多面的な痛みを緩和し、より穏やかな最後を迎えようとしたのが緩和ケアである。しかしながら、緩和ケアは制度化によって、がんやエイズという疾患に医学的に余命が予測される人を対象とする専門的なケアであり続けることとなった。また、意思の尊重についても、がん終末期という想定においては、多様な「痛み」という概念によって、治療の対象へと内包された。

痛みを焦点とすることによって、田代が「もともとその患者にとっての『良さ』を包含するものとして認識されていた『良い死』という目標は、ホスピスの制度化に伴い、いつの間にか特定の『良さ』へと収斂するようになったのである」（田代 2016:46）と指摘するように、「良い死」は「穏やかな死」等の特定の良さへと収斂され、疼痛管理という専門性で応じられるようになった。

この特定の良さへの管理意識について、田代はトニー・ウォルターの2つの志向性を挙げて、「医療者などの専門家がそれとなく『良い死』の実現へと患者とその家族を導くという『洗練された管理システム』による死と、何が『良い死』であるかを決定するのは患者・家族であり、専門家はその実現を手伝うだけであるという患者中心の死である。」（田代 2016:47）と整理して述べている。

すなわち、1つ目の志向性は、「痛み」の少なさを追求する「穏やかな死」という管理意識、すなわち、治療・緩和の志向性であり、病院死を支える強固な死生観といえる。特にがん等の痛烈な痛みをともなう死にあつて、重要な志向性でもある。2つ目の志向性は、「患者中心の死」である。この志向性と向き合うにあたっては、本人や家族が一人ひとりの命や心について、個別的な『良い死』への意思と向き合う必要が生じる。終末期ケアにおける本人の意思や個別性への回帰は、本人の意思が一層に尊重されるようになった近年の動向に先立つ志向性と位置づけることができる。

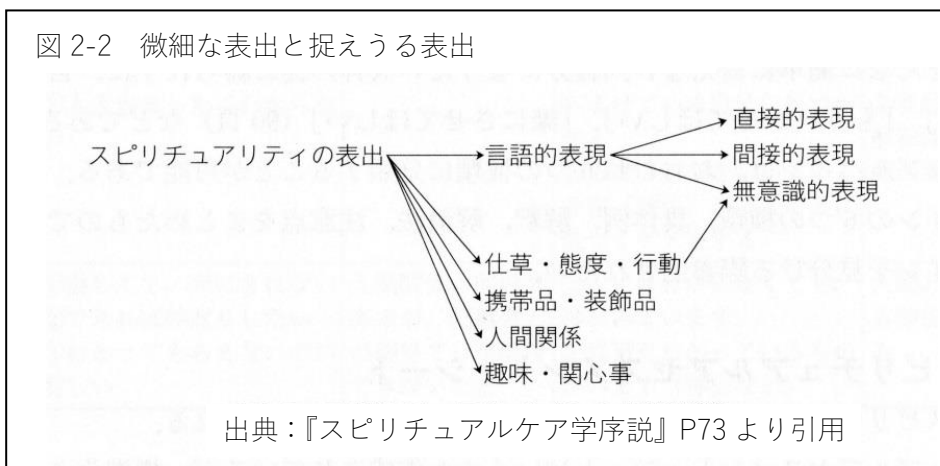
このように、身体的、心理的な痛みの解決や規範的なより良さ、およびその専門性を中心としてきた治療の志向性では解決できない側面に対し、本人中心の志向性への転換は、一人一人の個別的なより良さや意思を尊重する視点として、多様なケアの理論に通底して位置づけられている。

(4) 意思の尊重をめぐる専門性の課題

個別的な意思、特に表出困難な意思を直感的に捉えようとする視点は、一般化された知識に基づく専門性では説明が困難であるため、認知症ケアや在宅ケアなどを中心に多様な概念で捉えなおしながら取り組まれている。そのため、一意の概念やキーワードとして整理されがたく、ケアをめぐる倫理的な視点が中心となりやすい。村田は、「望ましい結果・目的・・・それは、患者・クライアントおよび援助者がともにそれぞれの人間存在の『本来性』への方向をたどるということである。ケア（care）が気懸り、不安、憂慮であるかぎり、それを担うということは、その人間存在の本来性へのプロセスを踏むことであり、また同時にそれは『憂いを払う』ことでなければならない」（村田 1994:95）と述べ、目的論として「本来的な生」を据えている。一方、その方法論としては「憂いを払う」ために、「傾聴と察知」、「ニーズの明確化」、「ケア」などを挙げている。

傾聴、察知、あるいは、受容など、介護においても用いられる多様な概念は、広義に捉えなおしながら意思の尊重を図ろうと試みる側面がある。三好は「その訴えに同調し共感し（それがたとえどんなに突拍子ないことであろうとも）、できれば行動をもとにすること」（三好 2009:145）を求め、豊かな関係をもつことの重要性を示している（三好 2009:169）。

一方で、「間接的表現の中に、死に直面した人のスピリチュアルニーズを見つけ出すことは簡単なことではない。まして無意識の世界に抑圧されたスピリチュアルペインは、本人にはまったく認識がない。したがって、ケア・プロヴァイダーにもほとんど認識できない。」（窪寺 2004:73）と窪寺が図表 2-1 で示すように、十分な関係をもつ余裕のなさなどにも課題が残されている。



以上の経緯ように、臨床の専門職は、おのずと治療緩和の志向性が優位となりやすく、さらに多忙な職務上の関係という位置づけにおいては、直接的な言語表現を除く様々な表出やその困難さに秘められた意思を捉えることの難しさが示されている。特に、表出困難な意思については、その重要性やアプローチの技術等に対する十分な整理を見つけることはできない。

3. 意思の尊重をめぐる専門性の在り所

(1) 意思の尊重に関する社会福祉の専門性

本研究では、意思を「すべての人が有する、取りまとめられないままの様々な思い。その一まとまり」として、その意思を「関係の浅い他者が明確に捉えられる程度 of 表出が困難な状態」をさして、以降「表出困難な高齢者」と操作的に定義して扱う。さらに、この表出困難な意思について、確信に至らないまでも、「意思の存在を察し、その内容を諸状況から推しはかること」を「推察」として、操作的に定義して扱う。

表出困難な意思の尊重をめぐる専門性について、社会福祉（ソーシャルワーク）の専門性上の位置づけから整理する。まず、原理や規則が重要な役割を果たすこと、公平に行動し、自らのふるまいをきちんと説明することなど、社会福祉の専門職倫理は社会的に構成され、期待される。同時に、正直で信頼でき、感受性が豊かで、物事を正しく見分ける能力があり、状況に照らして注意を払い、周りの人びとと特別な関係を結ぶことなどもまた重要とされる（Banks 2016:99）。

これらは時にぶつかり合うため、専門職には「優れた判断」が要求される。ソーシャルワーカーとは決まったやり方で行為する特殊な能力をもち、規則を次々作るばかりではなく、「誠実な人は、この状況でどのように行動するだろうか？」と、徳や倫理を見習うことで高潔さや信頼性を有している（Banks 2016:103-105）。広域な職務に当たる社会福祉の専門職においては、こうした徳や倫理を公的に表明、誓約を行うことこそが重要な特性であり、「個人の尊重、サービス利用者の自己決定の推奨、社会正義の促進、サービス利用者の利益に沿った仕事」など、ソーシャルワークの土台としての価値観や原理・原則が倫理綱領に集約されている（Banks 2016:116, 135-136）。

こうした「優れた判断」が繰り返し求められることは、ケアの臨床においても同様であるが、「介護職が、介護の原則を、知識・技術・人間観をもって実践し、老人との間によりき体験を積み重ねることで、固有名詞を持った、充実した関係性を築けること」（上野 2008:37）と、さらに施設職員自身に蓄積される専門性に加え、関係性の重要性を求めている。すなわち、日常生活を支援するケアワークにおいて「優れた判断」を行うためには、対象となる利用者の個別的な意思を捉えることが欠かせず、意思の表出が困難になるほど個別性を捉えるための「関係性」が必要となってくる。

「関係性」は、多くの感情のやり取りによって成立し、「ケアワークの感情労働を評価するには、言葉にならない暗黙的な知識の重要性を認識する必要がある」（上野 2008:111）として、関係性に関する「専門性」があることを示している。さらにこの専門性を、理論化された「形式知」に対する「暗黙知」としてケア現場の経験を紐づけ、主観に基づく洞察、直感、勘など、根拠を前提とない特性があることを説明している。形式知が明文化された専門性であることに対して、暗黙知は、自転車に乗る技術の学習など、経験として蓄積されるものとされる。

表出困難な意思を「根拠なく直感的に捉える」という視点は、ショーペンハウアーの意

思の視点にも符合しており、推察の、特に意思の発生や変化への気づきに関する何らかの重要な特性を有し、施設職員にはその専門性があるものと思われる。なお、以後は気づきに関する特性を「主観に基づく洞察など、根拠なく直感的に捉える特性」と操作的に定義して用いる。

社会福祉の専門性は、臨床における「優れた判断」を導く、理念、徳、倫理などの倫理綱領など明文化された思考に導かれる専門性と、関係性や経験など個別に蓄積され直感に導かれる専門性の2面に整理された。意志の尊重に先立って、表出困難な意思を捉える段階においては、特に後者の経験が必要となる。また、暗黙知によって支えられる「関係性」の構築によって、「個別的な意思」の尊重が可能であるとするならば、事前の「関係性」が築かれている家族介護者との違いについて、整理することが必要となる。

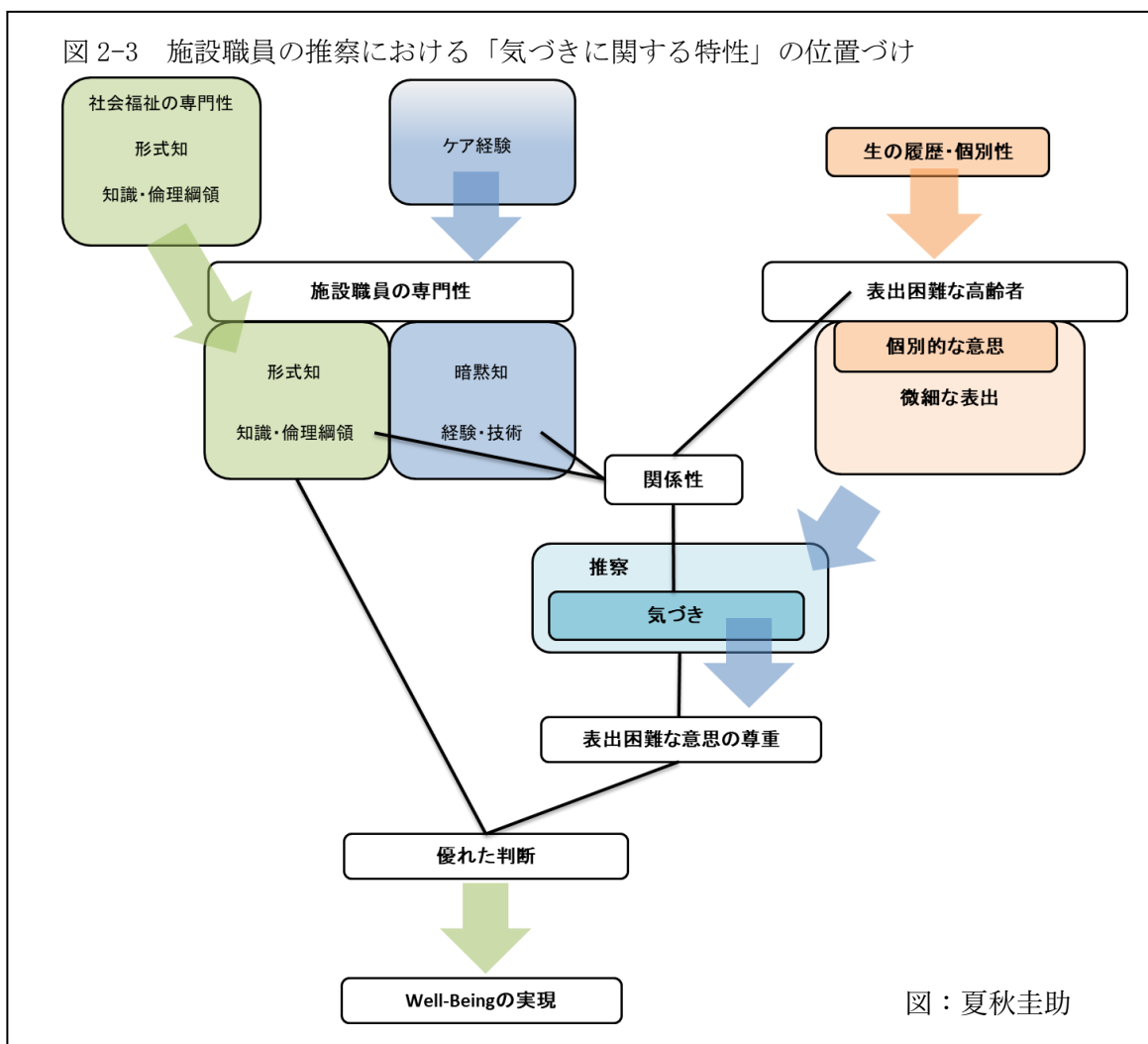


図 2-3 は、施設職員が、表出困難な高齢者の意思を推察する際の、専門性の関係性と、優れた判断が導かれるまでの経緯を想定した図である。知識や経験による専門性が、個別

的な意思の尊重を導き、倫理や経験の専門性に再度照らされながら、Well-Beingへと至る判断がなされるものと思われる。

(2) 表出困難な意思の推察

表出困難な高齢者の意思を個別性や自然な関りの中から推察するにあたって、より長期的な暮らしの文脈、生きてきた歴史性などから捉える必要があり、竹之内は「生の履歴」という概念を用いて次のように示している。「自宅という『空間』は、多彩な人間模様が織り成される生活の拠点として、家族はもとより、地域コミュニティの歴史の痕跡をとどめている。そしてその『空間の履歴』を介して、患者とその家族は、互いの『生の履歴』を共有している。これに応じて両者のケア関係は、相互性のみならず、歴史性をおびたものとなる。自宅を拠点とした地域の『空間』において、現在の『生』は、固有な背景と履歴という奥行きをもって立ち現れるのである。」(清水 2007:98-99) すなわち、家族は生の履歴という個別的な背景を相互に共有していることによって、表出困難な意思を直感的に捉えうるとともに、意思の内容についても捉えうる可能性が示されている。

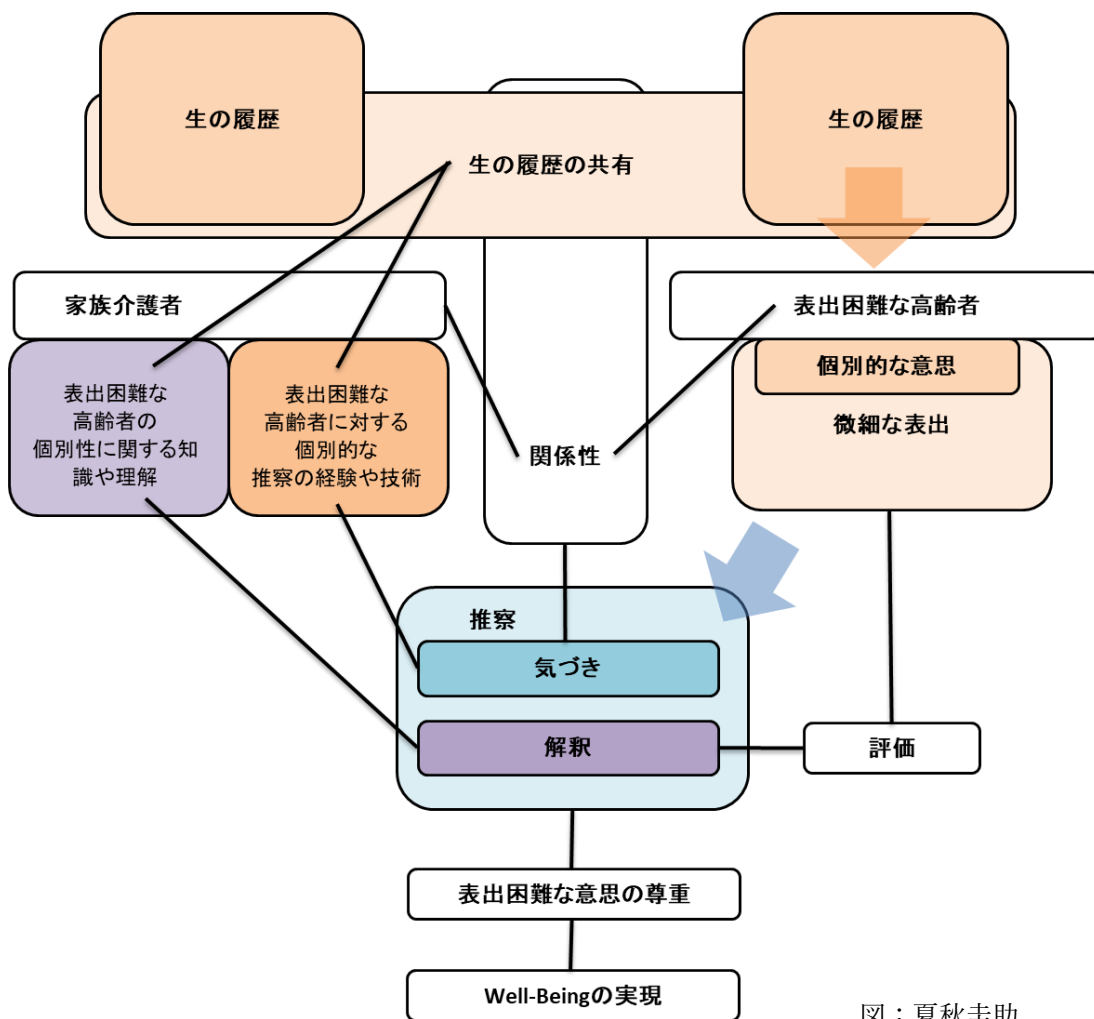
施設職員の専門性と関係性による推察に対し、家族介護者は、より深い関係性を基本として、さらにその内容に迫りうる推察の特性を有している可能性がある。専門性に依らない家族介護者が推察の拠り所としているであろう推察の特性を、「解釈に関する特性」として、「過去の個別性などから妥当に類推し、意思の内容を捉える特性」と操作的に定義して用いる。直接的表現によって言語的表出することが困難な場合など、他者とのコミュニケーションの可能性が大きく低下するほどに、この「解釈に関する特性」が重要となってくることが予想される。

近年ではACPなど、事前意思からの妥当な推測などに取り組む実践もなされているが、表出困難な高齢者の現在の意思を捉える必要性が失われるわけではない。家族介護者による意思の推察や代弁性については、「本心かどうか、認知症になる前からの意思に反していないか確かめようがなく、最終的に決断するのは家族である。」(杉野 2015:24) という状況となりやすいことなどからも、具体的な内容に迫るにあたって、重要な示唆を有するものである。この推察の実際について明らかにしていく必要がある。

図2-4のように、家族介護者が表出困難な高齢者の意思を推察する際には、生の履歴や関係性に基づいて気づきや解釈を得ているものと思われる。個別的な意思に気づき、その内容を解釈することで、Well-Beingへと至る意思の尊重がなされるものと思われる。

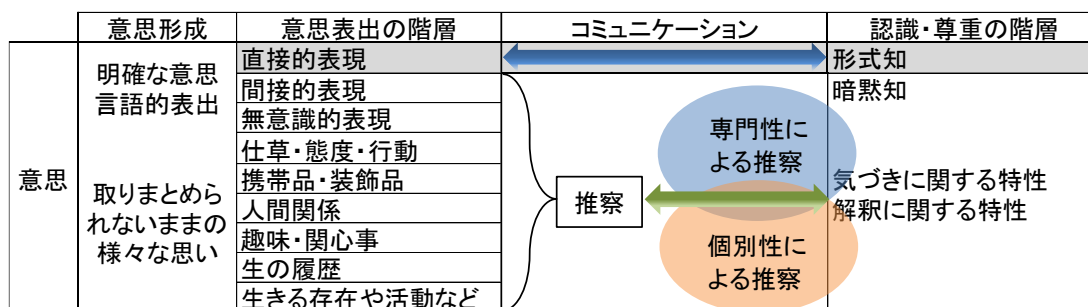
これらのことから、図2-5のように、既存の専門性、すなわち形式知では応じることの難しい表出困難な意思に対しては、施設職員の経験的な蓄積によるアプローチと、家族介護者が家族として特定の個人との関係性に基づくアプローチがあると想定できる。そして、その気づきや解釈に対する分析によって、表出困難な高齢者の意思の推察の特性という課題を明らかにする必要がある。

図 2-4 家族介護者の推察における「解釈に関する特性」の位置づけ



図：夏秋圭助

図 2-5 表出困難な意思の推察の関係性



図：夏秋圭助

(3) 関係性による推察の負担感

一方、天田が「近年は『体の介護は専門家、心のケアは家族がすることで役割分担をすべきである』とよく言われるが、こうした言表は現実の『家族による心のケア』の困難性を正視していない。・・・こうした高齢夫婦の秩序を達成するための虚構である<親密性>とは、けして「夫婦」に先験的に内在するものではなく、比喩的に表現すれば『協働で船をつくりながら進んでゆくようなもの』で、お互いの行為を通じて<親密性>が作り上げられ、そしてその<親密性>に準拠しながらお互いの行為が再び営為されてゆくような自己準拠的な特性である。」(天田 2003:525-527) と述べるように、本人と家族の間に期待される深遠な関係性は、当たり前に応じうるような先験的なものではなく、幾多の葛藤を越えてつくられるものである。その過程において、障害となる事象が多ければ破綻や虐待などのリスクを含んでいると指摘している。

在宅介護における家族介護者の負担感について、涌井は「介護を担うことによる負担、特にインフォーマルケアにおける負担とは、親密な関係者間における文脈において生じ、文脈において生じるがゆえにその負担は単なる身体的・経済的負担にとどまらず、そして、その負担は段階的に大きくなることが想定される」と特徴を捉え、「家族介護者にとって、周囲の者が介護を直接的に支援する手段のサポートや、介護に関連した情報を提供する情報サポート、そして思いやりや理解、悩みを聞くといった情緒的サポートを提供することが介護者負担の緩和につながる」と整理し、また、「介護に対するやりがいや生きがいを感じ、介護を担うことで満足感を感じることができれば、介護負担感の低下につながり介護の継続希望につながる」とまとめている(涌井 2021:36-40)。家族介護者が意思の推察するにあたって、親密であり閉鎖的な環境や関係性が負担を生じさせやすく、一方、適切な支援や満足感によって継続できる可能性が示されている。

このように、表出困難な意思を捉えられる関係性は、築いた後、維持する際の負担があることも想定する必要がある。特に、家族介護者の閉そく性は多様な危険性を有しており、施設職員による推察の関係性とも違いがあることがうかがわれる。この関係性の違いには、生活環境や心理的な距離感だけではなく、家族としての価値観、ケアを行う環境や設備、技術など、表出困難な意思の推察を取り巻く多くの要素が関係性に影響を与えていることも考えられる。そのため、家族介護者と施設職員による、推察の違いについて多面的に捉えて検討していく必要がある。

4. 意思の尊重に関する課題

以上の先行研究を踏まえ、以下の3点の課題が示された。

(1) 意思の尊重をめぐる特性の課題

表出困難な高齢者の Well-Being を実現するにあたって、本人の意思を尊重することは欠かすことができない。認知症などによって表出困難となっても、可能な限り捉え、尊重する必要がある。この際、明文化された知識だけではなく、経験などの言語化されがたい特性が必要とされる。その特性には、主観に基づく洞察、直感、勘などが挙げられ、表出困難な意思の存在に対する「気づき」の重要性が示されていた。

さらに、意思の内容については、生の履歴など個別性を中心として、過去の表出のすべて、取りまとめられないままの様々な思いを統合した「解釈」の必要性が示されていた。重度に表出困難な高齢者の「意思」を「推察」という実践において、2つの特性と負担について、より具体的な実情を整理すべき課題がある。

(2) 施設職員による推察の課題

意思の尊重をめぐる専門性の視点には、施設職員が職務の経験によって習得し、直感的に捉える「気づき」などの特性があるものと思われる。その具体的な内容については、より詳細な整理が課題として残っている。また、関係性や立場の違いによって、推察のアプローチも異なるものと思われるため、家族介護者との比較が欠かせない。表出困難な意思の尊重において、個別性に関する蓄積を有する家族介護者と、技術的な専門性を有する施設職員のそれぞれの特性を整理することが課題となる。

また、推察をめぐる丁寧な関係性は、感情労働としてバーンアウトなどを引き起こす負担が生じている可能性があり、課題となっている。

(3) 家族介護者による推察の課題

意志の尊重は重要な原則であるが、認知症などの諸要因から表出困難となることで、他者が何らかの「気づき」を得ても、その内容を認識することは難しくなる。そのため、意思を推察するにあたっては、本人の個別性や生の履歴を共有するなど、豊かな関係性を土台とした「解釈」が必要となる。

意思の推察における「解釈」の特性において、個別性や生の履歴の理解の実際について、家族介護者等の推察から示唆をまとめる必要がある。また、施設職員が関係性を築くことによって、家族介護者の「解釈」の特性に迫るアプローチについても、比較検討することによって明らかにすべき課題である。

また、推察には一定の負担が生じることについて、先行研究から示唆が得られているため、意思の推察における負担の内容、推察の負担に対する支援の傾向の2つについても考察の視点として課題を明らかにする必要がある。

第3章 研究の目的

1. 研究の目的

本研究は、明確に表出することが困難な高齢者の意思を尊重するにあたって、家族介護者や施設職員による推察の特性を明らかにすることを目的とする。たとえ表出困難であっても、すべての人が意思を有することを尊重し、その内容を諸状況から推しはかることは、尊厳の尊重において欠かすことが出来ない。そこで、本研究は、ケアの経験と専門性を有する施設職員による推察と、個別的な暮らしや人生の文脈を共有している家族介護者の推察を調査し、共通点や相違点を比較することによって、推察の特性を捉える。

第1研究では、高齢者の意思の尊重における、家族介護者による推察の特性を明らかにする。家族介護者への調査では、個別性を捉えていることによって可能となる推察について、その特性を明らかにし、また推察によってもたらされる疲弊や負担の実態についても明らかにする。

第2研究では、施設職員による推察の特性について、第1研究と同様に調査し、共通点や相違点を明らかにする。施設職員への調査では、表出困難な意思の推察に関する豊富な経験によって可能となる推察について、その特性を明らかにし、推察によってもたらされる疲弊や負担の実態についても明らかにする。

個別性への蓄積を有する家族介護者と、専門性や技術の蓄積を有する施設職員の推察をそれぞれを分析することによって、それぞれの立場からの表出困難な高齢者の意思の尊重、ひいては、高齢者本人の Well-Being の実現へと向き合っているのかを見つめなおす。

2. 研究の意義

推察の特性を明らかにすることによって、施設職員が有する暗黙知の専門性について示唆を得ることができる。

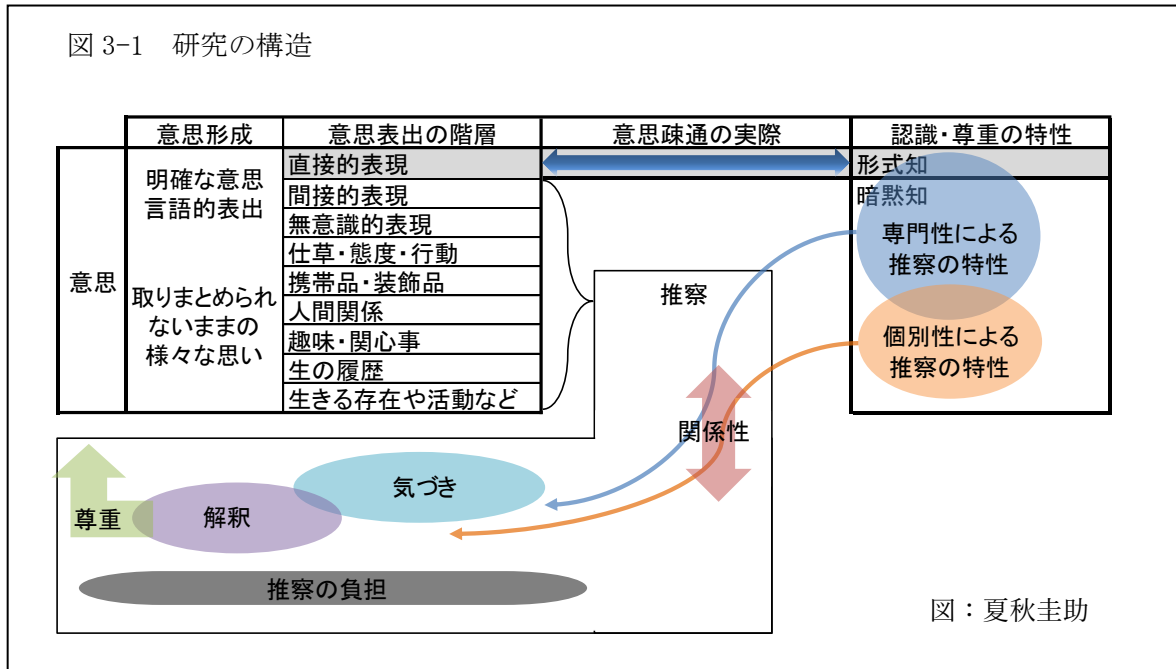
家族介護者による意思の推察について、代弁として解釈の構造を明らかにすることができる。

家族介護者や施設職員などによる意思の推察が、表出困難な高齢者の個別的な Well-Being の実現における重要性を明らかにできる。

表出困難な高齢者の意思の尊重についての支援、在宅ケア、在宅死等をめぐる施策において留意すべき要因等に対して、示唆を得ることができる。

3. 研究の枠組み

本研究は、表出困難な意思の推察について、「個別性に関する蓄積」を有する家族介護者と、暗黙知や経験知の蓄積による「専門性」を有する施設職員の両面から、それぞれの特性を捉えるにあたって、下図の構造を有している。



先行研究から、表出困難な意思は、直接的言語表現を介して他者へ意思疎通することが困難であるため、仕草や態度など非言語的な表現を含む微細な表出に対し、何らかの意思を気づき、解釈するなど、推察が必要となることがわかった。

施設職員が行う推察には、形式知だけではなく、明文化しがたい技術を含んだ蓄積が、専門性による特性があると想定できる。一方、家族介護者が行う推察には、過去の本人らしさや生の履歴を共有して過ごしてきたことで、個別性による推察の特性があると想定できる。この両者はそれぞれの特性を有するものの、表出困難な意思を模索し、尊重しようという営みであるため、比較において共通点と相違点が存在するものと思われる。

本研究では、表出困難な意思の尊重の基本的な構造について、推察の過程をより明らかにするため、図 3-2 の枠組みにしたがって研究を行う。

まず、家族介護者の推察に関する研究と、施設職員の推察に関する研究を、それぞれ第 4 章と第 5 章に大別し、これを明らかにする。また、それぞれの研究において、推察の特性に関する調査を第 1 調査、第 3 調査、推察の負担に関する調査を第 2 調査、第 4 調査とする。

なお、各調査は、次の通りの視点に基づいて、整理して考察する。第 1 調査、第 3 調査では、意思の推察における関係性、微細な表出への気づき、意思の内容の理解や解釈、推察した意思の評価の 4 つを考察の視点とする。第 2 調査、第 4 調査では、意思の推察における負担の内容、推察の負担に対する支援の傾向の 2 つを考察の視点とする。

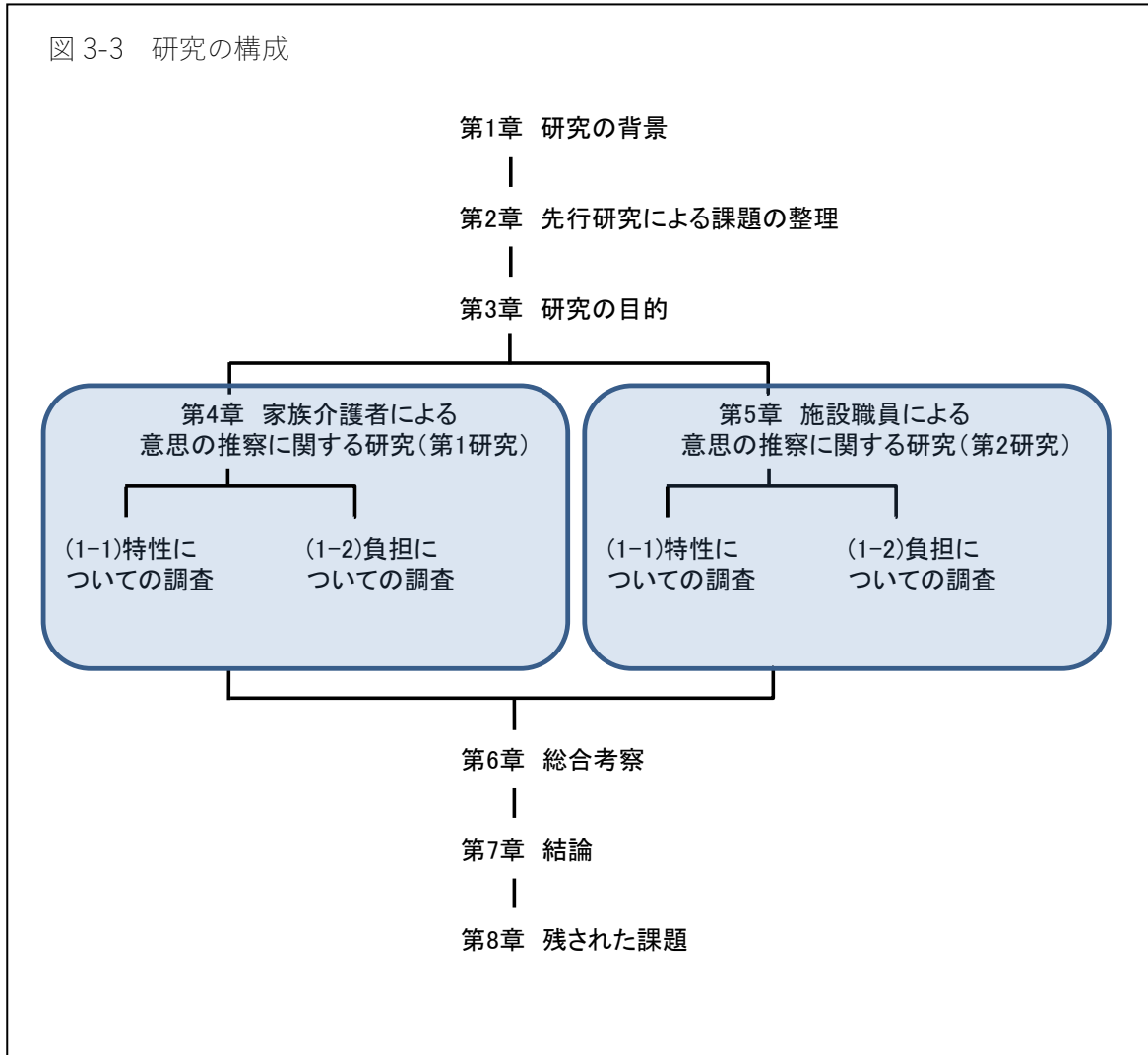
第 6 章の総合考察では、それぞれの結果や考察の比較をもとに、総合的に考察を行うものとする。

図 3-2 研究の枠組みと視点

	第4章 家族介護者による意思の尊重に関する調査(第1研究)	第5章 施設職員による意思の尊重に関する調査(第2研究)
意思疎通の実際と推察の特性	個別性による推察の特性	専門性による推察の特性
特性に関する調査	第1調査	第3調査
調査の視点	意思の推察における関係性 微細な表出への気づき 意思の内容の理解や解釈 推察した意思の尊重	
負担に関する調査	第2調査	第4調査
調査の視点	意思の推察における負担の内容 推察の負担に対する支援の傾向	
	第6章 総合考察	
	第4章と、第5章において得られた知見を比較検討し、 表出困難な意思の推察の構造に振り返って考察する。	

4. 研究の構成

本研究は、主に次の構成で研究を行なう。



第1章では、在宅死をめぐる近年の動向や施策から、本人の意思を尊重することへの関心の高まりと、認知症などによって意思の確認が困難となる状況などの背景を整理した。

第2章では、表出困難な高齢者の意思の尊重に関する先行研究を整理し、先行研究上の位置づけ、視点、対応しうる専門性の特徴などから課題を整理した。

第3章では、本研究において、家族介護者や施設職員による推察の実態を明らかにすることの目的、意義、方法などを示した。

第4章では、表出困難な意思を直感的に捉えることについて、家族による視点や方法等における特性と負担を明らかにする。

第5章では、表出困難な意思を直感的に捉えることについて、施設職員による視点や方法等における特性と負担を明らかにする。

第6章では、第4章、第5章の考察をもとに、表出困難な高齢者の意思の尊重をめぐって営まれる推察について、総合的な考察を行う。

第7章では、総合考察から得られた視座をもとに、簡潔な結論を述べる。

第8章では、本研究では対応しえず残した課題などを整理する。

5. 用語の定義

・ 表出困難な意思

意思を「すべての人が有する、取りまとめられないままの様々な思い。その一まとまり」、そして、その意思の存在や内容を「関係の浅い他者が明確に捉えられる程度の表出が困難な状態」として、一般の他者が容易に認識できるような表出が困難である場合を指している。また、主に意思を表出困難な「高齢者」をさして、以降「表出困難な人」または「表出困難な高齢者」として扱う。

・ 推察

推察を「意思の存在を察し、その内容を諸状況から推しはかること」と操作的に定義し、その確信に至らなくとも、可能な限りその内容に近づこうという営みを指している。

・ 専門性

社会福祉の専門性について、明文化や数値化する形式知や倫理綱領に対し、経験の蓄積による直感などの明文化しがたい暗黙知の2面から捉え、本研究では主に後者の専門性を扱う。

・ 推察の特性

表出困難な意思の推察に関する特性として、明文化しがたい専門性に関する先行研究の中で、「気づき」と「解釈」について示唆が得られた。本研究では、特性の言葉の「そのものだけが有する、他と異なった特別の性質」の意において、表出困難な意思の推察においてのみ、特別に必要とされる専門性として用いている。

6. 研究方法の検討

(1) 表出困難な人の意思に関する研究方法

表出困難な人の意思の推察に関する研究方法を検討するにあたって、先行研究からとらえた課題に際し、調査対象者の説明困難さを踏まえた研究方法を検討する必要がある。

また、表出困難な人の意思や推察に関する諸概念が、一般には一意のキーワードとして言語化しがたい領域であることから、質的研究において、あいまいな表現や文脈の意図を捉える研究方法について検討する必要がある。柴田が「老年学と死生学を統合的に捉えるためには、いわゆる科学ではなく人文学（質的研究）における narrative な手法が必要」（柴田 2015:11）と述べるように、より研究対象者の表現の意味を丁寧に捉える分析方法を検討する必要がある。

(2) 本研究における質的研究の視点

① 質的研究の主な理論

質的研究について、大谷は「研究対象となる人や社会をどう捉えるか、それ以前に事実や実在をどうとらえるか、またどのような目的のために研究するかなどの多様な思想的系譜と、それを実際にはどのような手続きで実現するかという多様な手法的系譜とを有する。」（大谷尚 2019:29）と整理している。

大谷は、思想的系譜としては、現象学、解釈学、現象学的社会学、社会的構成主義、文化人類学などを挙げており、こうした質的研究の多様な立場について、U.フリック（Uwe Flick）は次の三つに整理している。一つ目は、現象学的考察や構造主義的思考などを由来として、個々人の主観的な意味づけを探る立場である。二つ目は、相互行為に潜む構造的な組織化や文脈等の、細部に宿る前もっての認識を除外せず、日常のありふれた行為やその産物を探るエスノメソドロロジーの立場である。三つ目は、心理的社会的な無意識の過程に目を向け、客観的解釈学等によって、構造主義的もしくは精神分析的に行為や意味の構造を求める立場である（Flick = 2012:67-77）。フリックの理論的な整理は主に対象に焦点をあてたものとして、一つ目は個別的な体験の本質に向かう理論、二つ目は組織や文化、三つ目は社会構造や精神分析的な構造を対象として、さらに様々な理論はその程度によって立場が異なる。この分類に従えば、本研究は現象学的立場からの考察が必要となる。

現象学的立場については、さらに、普遍的洞察と存在解釈という理論的立場の違いを軸に、解釈学と本質学の二つの大きな流れが整理されている（小林 2015:29-30）。解釈学は、様々な存在解釈によって哲学的真理へと接近できるという考えにもとづいて、解釈の並列へと向かうのに対し、本質学は個々の解釈がいかにして間主観的な納得（普遍的な認識）へと近づきうるかへと向かう、と立場の違いを示し、「現象学は、人文領域において、そこで生じる意味や価値の問題に対して、いかに多様な対立を生み出す恣意的な解釈ではなく普遍的な認識方法としてアクセスできるか」という点において本質学の重要性を

示している。(小林 2015:41-42)

このように、本研究は現象学的考察に分類される質的研究であり、調査対象者の個々の体験や解釈から共通する意味や価値を明らかにする点では、本質学的立場であるといえる。

② 質的研究における規範

質的研究の現象学的考察の立場について、文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会の「人文学及び社会科学の振興について（報告）－『対話』と『実証』を通じた文明基盤形成への道－」において、「伝統的な学問観では、人文学及び社会科学の研究方法上の特性は、①定量的に計測するというよりは、定性的に記述する学問であること、②外形的、客観的な事実を明らかにするというよりは、解釈を通じた意味づけの学問であること、③研究対象に再現可能性がないという意味で、非実験系の学問である」（文部科学省 2009:12-13）と示されるように、自然科学的な実証主義の規範としての実在ではなく、意味づけを扱うものである。

質的研究における意味づけについて、大谷は「まさに『質的研究スペクトラム』とも言うべき一定の大きな連続体の中に、さまざまに存在している。その一方の端には、量的研究と差がないほど、 n が大きく、実証主義的で客観主義的な事実志向（実在志向）の研究が位置づいているが、他方の端には量的研究とは正反対の、小さな n に対して深い解釈を行う解釈主義的で意味志向の研究が位置づいている。」（大谷尚 2019:32）と次のように図示している。

図 3-4 質的研究スペクトラム

実証主義的／事実志向
 $n = 大$

解釈主義的／意味志向
 $n = 小$

出典：『質的研究の考え方』32 ページより引用

③ 質的研究における一般性

大谷は、質的研究の特徴について次のように示している。「(1) 仮説検証を目的としない (2) 実験的研究状況を設定しない (3) 観察やインタビューから主に言語記録を作成する ただし既存の言語記録を対象とする（文書研究 document study, 文書分析 document analysis）こともある また写真や人工物を対象とする（人工物研究 artifact study, 人工物分析 artifact analysis）こともある (4) 記録（質的データ）にもとづいて分析

し理論化する (5) 記録以外の資料も総合して検討する (6) 研究者の主観・主体的解釈を積極的に活用する (7) 研究対象の有する具体性や個別性や多様性を通して一般化や普遍性に迫る (8) 心理・社会・文化的な文脈を考慮してデータ採取とデータ分析をする (9) そのようにして現象に内在・潜在する意味を見出し研究参加者とともに人や社会の理解に努める」(大谷尚 2019:28-29)

これらの質的研究の特徴が示すように、対象の個別性、具体性、社会背景、文化的文脈等に多様性を含むなど、特に、一般性や普遍化のとらえ方において量的研究と立場が異なっている。質的研究の一般性について、大谷は「質的研究の一般化可能性は、論文の結論自体にはなく、それはむしろ、論文読者等（研究のオーディエンス）が論文を読み、それを自分の抱えているケースや、その他のケースと『比較』しながら、自分のケースのために「翻訳」することで、適用が可能となり、一般化が実現されると考える」（大谷尚 2019:79-80）と述べているが、これは竹田の「間主観的な納得（普遍的な認識）へ近づきうるか」「万人の納得へと向かって問い進むことが可能であるということ」（小林 2015:41, 51）という記述と適合している。

また、こうした個別的な意味づけに関する間主観的な納得や翻訳は、「一般化を法則定立的なものとのみ定義することで、この種の一般化、すなわち個性記述的一般化を個別のケースに当てはめてしまう過ちを最小限に抑えている。」(Sandelowski 2013:70) という側面においては、量的研究における一般性を補完することによって、質的研究としての一般性を有している側面でもある。

(3) SCAT の特徴

SCAT は、大谷によって提案された質的分析と理論化の方法であり、分析手続きの明示化、分析過程の省察可能性と反証可能性などに優れた特徴を有する。本研究では、直感的な体験、主観的理解等の推察の特性をインタビューーから捉える必要があり、多様な文脈で語られる抽象的な表現を捉えられる分析方法が必要となる。SCAT は、省察可能性と反証可能性の担保によって、文脈の解釈と妥当性を分析中に示すことに優れている。さらに、M-GTA などの諸質的研究がインタビューーの口頭データをテキスト化、セグメント、フレーズ、コード化と脱文脈化によって分析する方法であることに対し、SCAT は同様に脱文脈化を経たのち、ストーリーラインとして再文脈化して分析する手続きをとっている(木下 2016:6-7) (大谷尚 2011:156-157)。

本研究の調査における、意思や推察に関する諸概念をめぐる調査対象者の説明困難さを想定すれば、インタビューーのあいまいな表現や文脈の意図をより柔軟に捉えることが必要となる。そのため、脱文脈化したカテゴリーのグルーピングを図る Glazer と Strauss の GTA や木下の M-GTA などの分析方法に比して、発話に密着した形で分析の手続きを図る SCAT の手続きは解釈の妥当性を示すことに優れる点で、本研究における分析に適していると判断した。

・ 4 ステップコーディング

具体的な手続きは、音声記録の文字起こしを行ない、ひとまとまりごとに文に分ける。次に、その文に潜む内的現実や内的過程などを読み解きながら、着目すべき語句や文を抽出する。さらに、文中にはない概念や言葉によって文意を補い、これに説明を加える作業によって、浮き上がるテーマや概念の記入を行なう。こうした作業を全文に行ない、意味のつながりなどを整理しながらストーリーラインを記述する。そして、この分析から言えることを理論記述として整理する手法である。

・ ストーリーラインと理論記述

調査結果としてのストーリーラインと理論記述に対しては、その検証や確認の可能性を補うことで、妥当性を示している。この点について、大谷は次のように説明している。

「質的研究は、主観あるいは主体的解釈を積極的に用いるために、場合によってはきわめて恣意的なもの（・・・「公共性のある『主観』」ではなく「単なる独りよがりの『主観』」）になってしまう危険性も有している。しかし SCAT の表には、分析の過程が明示的に残る。そのため、自分の分析の妥当性確認 (validation) のためのリフレクションを分析者に迫る機能も有している」(大谷尚 2011:157)。つまり、分析の過程を明示することで、分析の妥当性を担保することとなる。

このように、4ステップの分析による脱文脈化と、ストーリーラインによる再文脈化について、証跡への検証可能性を残すことで紐づけながら、端的な表現として理論記述化する。

なお、ストーリーライン中の表現として、テキストの分析によって導かれた構成概念にはアンダーラインをつけて分析過程との一貫性に配慮している。さらに、調査目的への関係性が高いストーリーラインについて、理論を記述形式へと整理している。なお、理論記述は普遍的かつ一般的に通用する原理ではなく、このテキストの分析によって言えることを、端的で宣言的な表現として記述するものである（大谷 2019:324）。

・ 分析過程の一部抽出による明示の意図

SCATの最大の特徴は、インタビューのテキストから分析過程を本文中に残すことで、体験的理解や間主観的な納得に至るために必要な感覚を読み手と共有する糸口として、また、分析における妥当性確認と反証可能性を補うことができる点にある。

大谷は「データが非常に大きいなら、他の手法を使ってまずデータを圧縮してからSCATで分析する方法がある」（大谷尚 2019:360-361）としている。抽出にあたっては、セグメントの粒度を上げて一次分析したのち、ストーリーラインと理論記述を示すにあたって重要なテキストを抽出し、妥当性確認と反証可能性の特徴に矛盾しない範囲で、証跡を一部抽出して再分析することによって示すこととした。

なお、本研究では、言語化しがたい体験についての語りが多く含まれるため、可能な限り分析過程を文中で示す必要がある。一方で、研究上の文脈の可読性を損なわない範囲にとどめる必要があるため、特に重要なコーディングのみをさらに抽出して示すこととした。そのため、ストーリーラインや理論記述には示したコーディング外概念も含まれる。

図 3-5 SCAT の分析フォーマット

番号	発話者	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明する1つはテキスト外の概念	④テーマ・意味概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤疑問・課題
ストーリーライン(要約点で言えること)							
理論記述							
さらに追究すべき点・課題							

出展：『SCAT Steps for Coding and Theorization 質的データの分析手法』

www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/

(4) 本研究の対象と調査の内容

① 調査の対象

表出困難な高齢者の意思の推察をめぐって、本質的な概念をとらえようと試みられているが未だ抽象的であり、一般的ではなく、また、個別的な要因や背景が含まれる。そのため、質問紙による調査では、調査目的における推察の特性や負担について、適切かつ十分に引き出すことが困難と思われる。また、表出困難な高齢者の意思の推察をめぐって、ケアの臨床で交わされる思いを他者が観察によって確認することも困難であるため、観察法による調査も困難である。そのため、推察する人の体験のうち、特に重要な意味を持つ体験を振り返りながら語ってもらうことが必要であり、面接を用いた調査が最も妥当である。

面接においては、抽象的かつ本質的な概念をインタビュイー自身が語りながら捉え、関連する要因を引き込みながら自由に語ることを阻害しないよう、構造化面接よりも自由な面接が必要となる。ただし、生活の一側面であるところの推察の特定の状況に関する調査であり、調査目的から話題が離れすぎること分析を困難とするため、半構造化面接が妥当である。

また、分析は研究者のみによって行い、他の分析者との突き合わせは行わない。この点について大谷は、「SCAT の分析結果は分析者の数だけあり得る。これは SCAT の特徴ではなく、質的データ分析の一般的かつ本来的な特徴である。したがって、その突き合わせを『答え合わせ』として行おうとするなら、それにはまったく意味がない」（大谷尚 2019:365）と述べるなど、質的研究が本来、分析の観点や解釈の違いを肯定的に捉えるべきであることを示している。なお、質的データの分析上の妥当性や反証可能性については、SCAT の特徴上で担保されていると判断した。

② サンプルサイズとサンプリング

GTA などの一部の質的研究を除いて、そもそも、質的研究では「母集団とサンプル」という考え方が適していない。自然科学は、物事や事象などの「実在」を扱うが、質的研究が扱うのは、事実ではなく「意味」である。そのため、意味を扱うがゆえに、事実に関するカテゴリーとしての再現性は求めようがない（大谷 2019:90-91）。

しかし、調査協力者を、研究者が期待するデータの採取に都合よく、恣意的に選定していることがないことを示しておくことは重要である。そのため、sampling という概念ではなく、participant recruitment を用いることが多くなっているが、対象の選定によって、結果を研究者が操作しうる恣意性が介入していないことを明らかにするため、本調査の調査対象者について、選定の方法と理由を明らかにしておく。

なお、第1研究、第2研究とも、経験の本質を見きわめようとする立場であり、本調査におけるサンプルサイズは5人程度が妥当と判断した(Margarete 2013:50-56)。

質的研究では主に次のサンプリングが行われる。

「・便宜的抽出法 Convenient Sampling

集めやすい人たち、頼みやすい人たちに研究参加者になってもらうもの。自分の関わっている集団の人たちをお願いするなど。

・継続的抽出法 Consecutive/Sequential Sampling

サンプリングと分析を繰り返すもの。グラウンデッド・セオリーの理論的サンプリング theoretical sampling はこれである。

・層別抽出法 Quota Sampling(クォータ抽出法)／最大変異抽出法 Maximum Variation Sampling

層別を選ぶもの(確率抽出法の『層化抽出法』と似ている)。その際、個々のサンプルの間の違いが大きくなるようにする。

・ジャッジメンタル(目的的)・サンプリング Judgmental(Purposive) Sampling／クリティカルケース・サンプリング Critical Case Sampling

特定の根拠で選ぶもの。あるいは特定の条件をもっている人を選ぶもの。

・自己選択サンプリング Self-selection Sampling／ボランティア・サンプリング Volunteer Sampling

研究参加者の方から自発的に研究者にアプローチするもの。

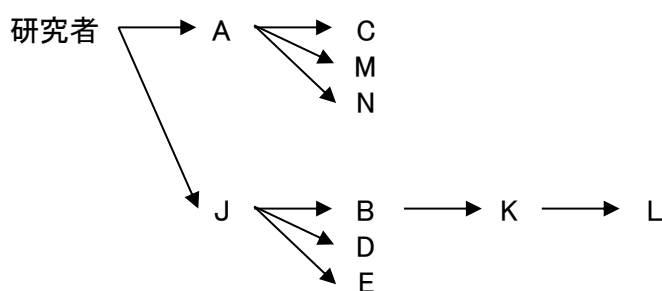
・スノウボール・サンプリング Snowball Sampling (機縁法)

研究参加者が次の研究参加者を研究者に紹介するもの。カミングアウトしにくい経験や体験を有する研究参加者が、インタビューで自己の経験や内面について語ったことが自分にとって有益だったと考えるとき、同様の背景を有する知人や家族を紹介してあげることがあり、そのようにして行われるもの。」(大谷 2019:124-126)

認知症ケアや終末期ケアの臨床となる家族介護者の体験は、一般に「カミングアウトしにくい経験」であり、現実的には信頼できる人からの紹介でなければ面接を受けてもらえる可能性は低い。そのため、本研究の家族介護者のサンプリングは、家族会の運営者、家族介護者、施設職員からの紹介によって得るスノウボール・サンプリングによって選定する。

なお、調査対象者の基準は、「意思の表出困難な高齢者に対し、日常的な推察に関わった経験を有する家族介護者と施設職員」をインタビューの対象とする。対象者の選定は、予備調査から関わりのあった2名を機縁にスノウボールサンプリングを行い、紹介者が得られなくなるまで行った。家族介護者であるA氏の紹介のC氏、A氏の知人で施設に勤めるM氏、N氏の紹介を得た。家族会の運営者であり施設職員であるJ氏を起点として、家族会参加者のB氏、D氏、E氏の紹介を得た。B氏からは利用施設の職員K氏、K氏からは連携施設の職員であるL氏の紹介を得た。紹介にあたっては、各インタビューの調査対象としての適性を確認している。

図表 3-3 スノーボールによる調査対象者のつながり



図表 3-4 調査対象者の属性

	機縁・紹介	調査対象者の立場	ケア経験の背景	表出困難な状態
A氏	研究者	家族介護者	在宅介護	脳腫瘍、アルツハイマー型認知症
B氏	J氏	家族介護者	在宅介護	若年性アルツハイマー
C氏	A氏	家族介護者	在宅介護	脳梗塞
D氏	J氏	家族介護者	在宅介護	レビー小体型認知症
E氏	J氏	家族介護者	在宅介護	アルツハイマー型認知症
J氏	研究者	施設職員	デイサービス	表出困難な施設利用者
K氏	B氏	施設職員	小規模多機能型居宅介護施設	表出困難な施設利用者
L氏	K氏	施設職員	グループホーム	表出困難な施設利用者
M氏	A氏	施設職員	有料老人ホーム施設	表出困難な施設利用者
N氏	A氏	施設職員	グループホーム	表出困難な施設利用者

③ 調査の内容

半構造化面接では、インタビュー어의語りを尊重するため、自由な発言を可能な限りさへぎらず、当事者が重要と捉える主観的領域の事実の収集に努めることとする。下記質問項目についても、自発的な発言を促すための質問にとどめ、発言が続く場合は省略する。特に、負担に関する調査に関する質問項目については、インタビュー어의様子や心理状況について倫理的に配慮し、適宜質問項目の変更や省略を行う。

半構造化面接における主な質問項目は、次の通りである。なお、第1研究と第2研究は異なる対象を調査し、結果を比較するため同じ質問項目とする。

質問項目：「〇〇さんのケアで特に印象深かった出来事にはどのようなことがありますか」

(印象的な出来事には、何らかの意思を推察できている可能性がある)

・「その時の〇〇さんの様子やあなたの感じたことを詳しくお聞かせください」

(表出困難な意思への気づきや洞察のきっかけを明らかにする)

・「その時、なぜそのようなお感じになったのですか (なぜそうされたのですか?)」

(表出困難な意思について、インタビュー어의解釈を明らかにする)

・「(インタビュー中の意思の推察に関する情報を取り出し、同じ条件として)

その様子を、例えば第三者が見て、同じように感じられると思いますか?

(同じようにすることが出来ると思いますか?)」

(個別性への理解や、暗黙知によってこそ成立する推察の焦点を明らかにする)

・「あらためて、あなたにこそ、そう感じられた思いやりとりには、どのような要因があると考えますか？」

(表出困難な意思の推察について、インタビューが重視する要因を整理する)

・「そのようなケアで、心に負担を感じることはありましたか？（もしあれば）それはいつ頃ですか？どのような状況でしたか？」

(推察の意義を尊重し、負担が生じている場合は具体的な状況を明らかにする)

・「医療や介護の施設職員は、その気持ちに十分応えることができましたか？」

(既存の支援の有効性や課題を明らかにする)

・「言葉にならない気持ちに寄り添い、もっとも心の支えになった存在は、どのような人ですか？（支援者との関係性、専門性などを確認する）」

(言語化しにくい負担の内容について、関係性のあり方を明らかにする)

・「その人はあなたの気持ちをどのように受けとめてくれましたか？」

(推察の負担に対する支援の専門性を明らかにする)

・「あなたのことを知らない初対面の人が、そうした存在になるために必要なことは何だと思いますか？（施設職員による代替的な支援の可能性を引き出す）」

(推察の負担に対する支援において、関係性以外の要因を明らかにする)

(5) 倫理的配慮

①手続き

調査における同意書等の調査手続き、および倫理的配慮については、2015年、2017年、2019年の各調査ごとに、西南学院大学大学院人間科学研究科研究倫理委員会の承認を得た。

調査においては、個人情報保護法に基づいて個人名は一切公開しない。また、研究成果を発表する際には、インタビューでの回答内容で人物や所属が特定されないよう、個人情報の機密保持に最大限配慮した。

調査への同意形成の際は、研究の協力がいつでも拒否することができること、それは研究協力者の当然の権利であり、拒否によって研究協力者が不利益を被ることは決してないこと、また、部分的に発言の箇所を削除したい等のご希望について、遠慮なく申し出てもらうことを確認した。さらに、下記の6項目について説明した。

① 面接への参加は自由です ② 面接の最中でも面接の中止を求めることができます

③ 質問への回答を拒否することができます ④ 希望すれば面接記録を見ることができます ⑤ 録音を停止あるいは一時的に停止することができます ⑥ 面接の内容を消去してほしい場合は、研究者の連絡先にご連絡くだされば、消去することができます

②保管方法

記録のために使用した筆記や IC レコーダーで録音したデータは、研究者のみが管理した。データの管理においては、暗号化の上 USB メモリに保存し、鍵のかかる机の引き出しで管理した。また、それらのデータは、研究上、必要な保存期間を過ぎた時点で完全に消去する。

③大学院の倫理審査プロセス等

調査にあたっては、研究対象者の尊厳の尊重、人権擁護、プライバシー保護、自由な意思の尊重、インフォームドコンセントの徹底など、繊細な配慮をもって取り組む。

なお、本研究・調査の内容が心の負担感などに触れる場合においては、調査協力者をトラウマ、悲嘆、怒り等に直面させる可能性があるため、特段の配慮を有することに注意する。面接に先立って、倫理的配慮を十分に説明の上、心理的負担についての調査協力者からの中断の訴えや、研究者による推察が得られた場合、直ちに面接を中止し、調査協力者へのケアを行うこととする。

その他、細目に当たっては「日本社会福祉学会研究倫理指針」も参考とする。

第4章 家族介護者による意思の尊重に関する調査（第1研究）

1. 調査の目的と概要

(1) 調査の目的と概要

第1研究では、高齢者の意思の尊重における、家族介護者による推察の視点や特性を明らかにすることを目的とし、これを第1調査とする。さらにその特性によってもたらされる負担の実態について第2調査を行い、支援策への示唆を得る。

第1調査では、表出困難な高齢者の意思について、家族介護者の視点や方法等における特性を明らかにする。

調査方法には、半構造化面接を用いた。倫理的配慮、調査への承諾確認、録音への同意確認の上、面接の内容をICレコーダーに録音する。音声記録は、逐語録として文字起こしを行ない、個人を特定できる情報などは伏せ字に置き換えることとする。

半構造化面接では、事前に研究の趣旨を説明し、日ごろのケアの経験から関連すると思われる話題を中心に、自由な語りを尊重して、面接を行なった。事前に用意した質問項目は、発話の促しと面接の方向付けのみにとどめ、柔軟な面接に努めた。

調査の対象は、脳の疾患などによって、意思の表出が困難となった高齢者家族に対し、日常的なケアに取り組む経験を有する家族介護者として、面接時間は1時間程度とした。調査対象者は次の5名であり、事前の説明を含む倫理的な配慮は、後述の通り行なっている。

Aは、夫が脳腫瘍を伴う終末期にあり、アルツハイマー型認知症も併発する中で在宅ケアを行なっている。Bは、夫が若年認知症によって要介護状態となり、長期にわたって在宅ケアを行い、面接時には入所型施設を使用している。Cは、脳梗塞を伴って表出困難な状態となり、入院生活後、在宅ケアを行っている。Dは、レビー小体型認知症で、入院後、施設での同居ケアなどを経て、面接時は入所型施設を利用しており、定期的な一時帰宅で在宅ケアに取り組んでいる。Eは、アルツハイマー型認知症による長期の在宅ケアを経て、現在は施設を利用している。

図4-1 調査協力者の属性(1)

			調査1	調査2	
A	女性	家族	夫が脳腫瘍、アルツハイマーから長期要介護状態	2015	2017
B	女性	家族	夫が若年認知症から長期要介護状態	2015	2017
C	女性	家族	夫が脳梗塞から長期要介護状態		2017
D	女性	家族	夫がレビー小体型認知症から長期介護状態	2019	2019
E	男性	家族	妻がアルツハイマーから長期要介護状態	2019	2019

(2) 倫理的配慮

倫理的配慮については、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守している。また、調査の協力依頼、承諾の確認など、調査に関わる手続きは、西南学院大学大学院人間科学研究科の研究倫理委員会の承認を得て行なった。

(3) SCAT のエビデンスの見方

本文中に示された SCAT の分析の過程は、分析によって得たストーリーラインや理論記述の妥当性を口頭データまでさかのぼって確認することを可能としており、反証可能性を補っている。分析の過程は、左からテキスト（インタビューの口頭データ）、〈1〉テキスト中の注目すべき語句 〈2〉テキスト中の語句の言い換え 〈3〉テキスト外の概念 〈4〉テーマ・構成概念となっている。

例えば理論記述中に違和感を持った場合、ストーリーライン中に根拠を探することができる。ストーリーライン中に根拠を見いだせない場合、〈4〉テーマ・構成概念中に該当する内容を見つけ、インタビューの口頭データの分析・解釈の過程を確認することができる。

ストーリーライン中、テキストの分析によって導かれた構成概念にはアンダーラインをつけて分析過程との一貫性に配慮している。さらに、調査目的への関係性が高いストーリーラインについて、一般性、統一性、予見性などの理論を記述形式へと整理している。なお、理論記述は普遍的かつ一般的に通用する原理ではなく、このテキストの分析によって言えることを、端的で宣言的な表現として記述するものである（大谷 2019:324）。

なお、ストーリーラインは、インタビューの全口頭データから導かれるが、SCAT の特性を可能な限り担保するため、本文中にも分析過程の一部を抽出して記載する。抽出は、ストーリーラインの妥当性についての納得を導くため、重要と思われるデータを選定している。

2. 家族介護者による意思の尊重に関する調査結果（第1調査）

(1) Aの調査結果

分析過程

図4-2 SCATによる分析 1-A

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
54	A	うん、自分の中にこう、少しは、こう、精神的に「こうせないかん」っていうのが、だんだんなくなってきたけなかな。なくなっていくか、自分自身が少し、気分的に慣れによって楽になるっていうかな。	精神的に「こうせないかん」/ だんだんなくなってきた/ 自分自身が少し/ 気分的に慣れによって楽になる	精神的な焦り/ 自分自身の慣れ/ 自然な関係を取り戻した	本人との関係に緊張/解消されるにつれて/ 自然な関係	精神的な焦り/ 本人と介護者の関係が緊張/ 自然な関係を取り戻した
72	A	ま、その、慣れ、慣れ、時間的なものもあるかもしれないけど。それによって、お互い少しは気分的に落ち着いた、落ち着くところが出るちゅうかね。すると、相手に合わせるじゃないけど、思う、思うことが出来るやろし、思いやりを持つことも。	お互い少しは気分的に落ち着いた/ 相手に合わせるじゃないけど/ 思うことが出来る/ 思いやりを持つことも	お互いに自分の気持ちを整えてきた/ 本人の意思に合わせる/ 思いやりを持つことができた	時間が経つにつれて/ 本人の意思を尊重して	時間が経つにつれて/ 本人の意思を尊重/ 思いやりを持つようになった
96	A	本人も少し不安やったかわからんし、こっちもこっちで余計気になるけん、ちょっとしたことね、こう。過剰にこう、気を遣うやん、こっちも、すると、お父さんも「もうよか」って言うてね。「触らんで」とか言いよっちゃったけんね。それはまあ、こっちの気持ちかもわからんけど。	本人も少し不安/過剰に/ 気を遣う/余計気になる/ ちょっとしたこと/ こっちの気持ちかもわからん	お互いの不安/ 過剰な配慮/ 気づき/ すれ違い/ Aの不安な気持ち/ 解釈	緊張した関係/ すれ違い	本人の意思よりも過剰に配慮/ 微細な表出から本人の意思に気づく/ 不安な気持ち
98	A	それはみんな鏡かもしれん、自分がこう、過剰にしようぎ、気になるから。するとこっちが、こう、してることに對しては、おとうさんもイライラするやろし。こっちがゆつたいたいときんた、向こうもゆつたりなるかわからんし。	鏡かもしれん/ 過剰にしようぎ/ 気になる/ おとうさんもイライラ/ ゆつたいたいときんた/ 向こうもゆつたり	Aの不安/ 本人の不安/ 鏡のように伝わる/ 落ち着いた気持ち/ 同じように共有する	二人の不安/ 心のあり様	お互いの気持ちが鏡のように伝わる/ 介護者が穏やかに過ごし始めること本人も穏やかさを取り戻す
220	A	自分のこの世界、居場所っていうかね。それは、「じゃ行ってくるね」といって、「うん、いい」というてね、言うけんね。だから、自分の家と私。	自分のこの世界/ 居場所/ 自分の家と私。	本人の存在/ 安心できる居場所/ 家族と自宅	在宅ケア	安心できる居場所/ 家族介護者の心の余裕
306	A	で、まあ、そうね。そういうときに、ああ、昔もそうやったねとかね、昔もちゅうか、だいたいそうやったねとか言う感じで、思うやろね。そういうことこそ、その、そういう思い、ずっと共有した部分があるけん、ああ、昔もそうやったね、自分が納得するちゅうか。本人じゃなくて、みんな私のほう、介護者やないけど、の方の、悪いなよな。想像する、すること自体がね。本人がどう感じよこちやい。	昔もそうやった/ ずっと共有した部分/ 自分が納得する/ 本人じゃなくて/ 本人がどう感じよこちやい	共に過ごしてきた時間/ 今の意志/ 妥当な解釈/ 家族側の納得/ 確信できない	共有した時間/ 解釈の土台	共に過ごしてきた時間/ 今の意志への妥当な解釈/ 確信はできない
342	A	一人で、在宅で、自分で一人で住んで、介護士、あの、ヘルパーさんが、お買い物ヘルパーさんとかあるやん。そんな人たちに、どこまで要求できるかて言うのはね。	ヘルパー/ そんな人たち/ どこまで要求できるか	第三者/ 介護士/ サービスとしての関係/ 困難さ	家族の代替/ 意思の尊重	サービスとしての関係/ 困難さ/ 求めることに迷い
370	A	そいけん、そんな時ね、どっちなかって思ったんよ。全部、そいけん、その表情、行動、言葉、にプラスして、自分が想像するんよな、こっちのほうかね。そいけん、だから、物事においても、ちょっとした動作見て、痺いのかんムヒかなとかね。	どっちなかって思った/ 全部/ 表情、行動、言葉/ プラスして/ 自分が想像する/ こっちのほうかね	微細な表出の統合/ 本人の意思に対する想像	明確な言葉にとらわれることなく	明確な言葉にとらわれることなく/ 本人の意思を想像する
388	A	同じ共有しているがゆえに、そうだろうなって連想して、連想ちゅうか想像するんだけど、そいけんやっぱそうや。土台が、同じ共有した時間があるて、それに、思いやりがあったら、そう。	同じ共有/ 連想/ 想像する/ 土台/ 同じ共有した時間/ 思いやり/ あったら、そう	気持ちの共有/ 意思の連想/ 共に生きた時間という土台/ さらに思いやりが必要	前提/ 起点としての思いやり	気持ちの共有/ 共に生きた土台/ 思いやりが必要
396	A	だから、そういうことで、そこに余裕があると、なれないうちは、精神的に負担があるけんね。こっちもね、そいけん余裕もないちゅうか、持てないて言うか、今起きちゃったよ、まきことある。	なれないうちは/ 精神的に負担/ こっちもね/ 余裕もない/ 持てない	ケアの生活/ 慣れるまでの間/ 精神的に大きな負担/ 心に余裕がない日々	ケア初期の混乱/ 不安/ 疲労	ケア初期の混乱/ 精神的な焦り/ 心に余裕が必要
406	A	うん、たぶんね。人はみんなそうやけんね。ずーつとがあった上のことな時点やけんね。	ずーつとがあった上のこと	ケアの瞬間だけではなく/ 生活や人生の延長上	長期的な関係	ケアの瞬間だけではなく/ 生活や人生の延長上

ストーリーライン

本人の発病からケアの初期の混乱では精神的な焦りがあって、本人と介護者の関係が緊張に満ちていた。また、健康や回復への願いから、本人の意思よりも過剰に配慮していたが、時間が経つにつれ、健康の自然な低下を受容し、本人の意思を尊重して、思いやりを持てるようになった。緊張感、時おり見せる本人らしさや、本人と向き合う中で解消され、自然な関係性や思いやる余裕が戻ってきた。

時間はかかったものの、以前の穏やかな関係や暮らしを取り戻すにしたがって、介護者は心の余裕を取り戻し、微細な表出から本人の意思に気づくようになった。本人の意思の推察や思いやりには、介護者の心に余裕が必要であったと振り返る。

意思の推察では、愛着ある生活、共に過ごしてきた時間など、Aと本人が過去から共に生きてきた土台が必要である。本人の表出が弱い場合は特に重要で、Aは対話的に本人の表出を促しながら、共有する思い出や本人らしさなどから柔軟な推察に努めた。それらによって、Aは言語的な表出や明確な言葉にとらわれることなく、今の意志への妥当な解釈として本人の意思を想像することで、確信はできないまでも推察できた。

Aは、本人との関係をお互いの気持ちが鏡のように伝わる関係と例えた。それは、介護者が余裕なく不安な気持ちで過ごす状況では本人も落ち着かず、また、介護者が穏やかに過ごし始めると本人も穏やかさを取り戻すような関係性を示すものである。その逆もあり、本人が外出などで不安を感じる時は、関わりの中で介護者も不安な気持ちになる。意思が二人の間で共有されていると感じている。そのため、二人の間で穏やかな関係性を持つためには、安心できる居場所と家族介護者の心の余裕を持つことが必要となる。

一方、ケアのあり方については、ケアの瞬間だけではなく、当事者間の関係や生活や人生の延長上であり、多面的である。本人との関係を蓄積しなければ難しいため、サービスとしての関係や施設職員にそこまで求めることに迷いもある。

理論記述

ケアの初期は、精神的な焦りなどによって、本人と介護者の関係が緊張したものとなりやすく、介護者は心の余裕を損ないやすい。

共に過ごす介護生活や経験から、自然な関係性や思いやる余裕が戻ってきた。

心の余裕ができるにしたがって、微細な表出から本人の意思に気づくようになった。

推察では、本人らしさの理解や家族の共有する思い出など、共に生きてきた土台のようなものが重要となる。

お互いの意思が鏡のように伝わる関係となり、二人の間で直感的に共有されることがある。

(2) B の調査結果

分析過程

図 4-3 SCAT による分析 1-B

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき箇所	<2>テキスト中の箇句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)
41	B	んって、なんか顔の、目をクルッとさせたような感じ。なんか、顔が違ふんですよ。あ、好きだったなあと思ってですね。	目をクルッとさせたような感じ／顔が違ふ／好きだったなあ	些細な表情／変化／昔の本人らしさ／想起	表情の変化／気づき	微細な表情の変化／直感的に気づく／昔から好きだったことを想起
43	B	日ごろ黙っててもね。表情っていったら、やっぱり、なんか、こうしたってなんか、自分でこう、バツとなったら、あ、こうなんか、嬉しいとか。なんか、それをしたいなっていうような感じがあるんですよ。私は分かるんですけどね。	日ごろ黙ってて／表情／こうしたか／嬉しい／それをしたい／感じ／私は分かる	微細な表出／表出困難な意思／直感的／他の人にはわかりにくい	説明しにくい感覚／共感した実感／解釈	日常的なケア／些細な表情や雰囲気の変化／直感的な気づき
53	B	本人は良かったのかなあ。喜んだのかなあって、私が勝手に思ってるのかも分からないけど、こうしてる顔がバツと明るくなっただけですか？ね。いきいき出したって感じはありますね。	良かったのかな／喜んだのかな／顔がバツと明るくなっ／いきいき出した	試行錯誤／確認／かがやき／なんとなくの良さ／雰囲気	確かめようがない／表情／印象	試行錯誤／確かめようがない／表情／なんとなくの良さ
74	B	そうですね。私もそう思ってるんですよ。やっぱり、職員の方忙しいじゃないですか。1対1じゃないんだから。で、やっぱり、もうそこで、もうとても安全だったら、もう、そのまんまで一応。危なかったらやっぱり、こう、なんとかして手を貸して、歩けたです。ほとんどそうじゃない、よそもそうじゃない、どこでもそうじゃないかなあとは思ってますよ。	私もそう思ってる／職員の方忙しい／安全だったら／もう、そのまんま／危なかったら／よそもそう／どこでもそう	施設／少ない人数／安全を確保／優先／余裕がない／家族のようにはいかない	意思の尊重／限界への理解／あきらめ	施設は少ない人数で安全を確保することが優先／意思の尊重をする余裕がない／家族のようにはいかない
95	B	そうですねえ。もう、お父さんが、「もう大丈夫だ、大丈夫だ」って言うてくれるんやなああって思うんですけど。言葉がでてたら、なんでもって言ったかなあとは思ってんですけど。ただ、大丈夫、大丈夫って、言うような感じですね。してくれるからですね。もう、こっちが勝手にそんなあれしてるのかも分からないけど、だ、自分がそういう心配するでも、私が大丈夫、お父さん大丈夫、大丈夫って言うてよ。したら、反対に私の肩が、大丈夫だ。私が心配してかなあと思ってるのかも分からないしと思っただけ。そういうところがやっぱりちよつだけ、私もきつときあつたです。	言葉がでてたら、なんでもって言ったかな／こっちが勝手にあれしてるのかも分からない／私が大丈夫、お父さん大丈夫、大丈夫って言うてよ／反対に私の肩が、大丈夫だ／そういうところがちよつだけ、私もきつときあつた	言葉がでるなら、どう言うだろうか／慰めようとする／逆に慰められている／確信はできないけど／同じ思いを共有できている／たまらない気持ち	お互いの心／優しい思い／心が通う	本人の意思の内容を確認することはできない／本人の意思がしっかりと残っている／優しさを実感する／同じ思いを共有できている／たまらない気持ち
97	B	そうですね。本当、もう、言葉が出なくなったら分からないけど、そういうところはやっぱりなんかもう。私も忘れるけど、ああ、お父さんこんな思ってたんやろなあ、こんなしよるけど、やっぱり子供のことやら、やっぱ、ずっと思ってたからですね。自分がしつかりして、子供が大きくなったら、それこそ、一緒にいろいろなね、同じよか思ってたんやろうけど、自分はこう、もうぐんぐん話しかてきんことなつたら、会社辞めたら色々話したいこともあつたらんと思うんですけど、それができなくなつてですね。	こんな思ってたんやろなあ／子供が大きくなつたら／一緒に自分はずいぶん話しかてきんことなつたら／会社辞めたら色々話したいこともあつたらんと思うんですけど、それができなくなつて	言葉に出来ない思い／本当はやりたかったこと／子供との関係／本人の思い／悔しさ／不安／共有	共に暮らしてきた／家族だからわかること／推察／解釈	表出できない思い／本当はやりたかったこと／本人の思い／悔しさ／共に暮らしてきた／家族だからわかること
99	A	ところが、なかなかその、ここまでは来ないけど、私は毎日そうやって、お父さん、今日はこうなって、こうなつたって話すから。本当にもう、ようするに、認知症になったら、何日か前も、「本人が一番きついやろなあ」って。「お父さんしたいことがいっぱいあつたて、なんもされんことなつとるけん、一番きついやろなあ」。本人もな、子供も言いたいやろうけど、お父さんとしては子供のことは気になるしって感じる時もあるんですけどね。	本人が一番きついやろなあ／子供も言いたいやろうけど／お父さんしたいことがいっぱいあつたて、なんもされんことなつとるけん、一番きついやろなあ」。本人もな、子供も言いたいやろうけど、お父さんとしては子供のことは気になるしって感じる時もあるんですけどね。	本人のつらい思い／伝えたい思いがあるだろう／つらい思いを共有	子どもを大切にしていた人柄	本人らしさや思い出から／交わりたい言葉もあつたらん／つらい思いを共有する
101	A	だんだんそれがもう、伝わるとはわかることなりよるけどやけども、子供を見て、ふーん、わけ分かつたらんねと思ふときもあるし。もう、今日なんどく分かつたらんねと思ふときもあるし。子供、来てくんですよ。	子供を見て／分かつたらんねと思ふとき／今日なんどく分かつたらんねと思ふとき	認知症の症状の波／子供だとわかってないような時もある	不安な気持ち	子どもを認識出来ないように感じる／不安な気持ちになる
116	A	家だったら、炊事場のほうに行ったりして、なんかこうしてたら、コーヒーかな、お茶かなって。「お茶飲もうか」って、「お父さん、お茶飲もう」って言うてから、ちよつと、お茶入れたりですね。コーヒーがいろいろあったら「うん」。どっちも「うん」とか、どっちでも「はい」とか言ったりするときもあつたけど、「そうね、お父さんコーヒー好きやったけん、今度コーヒーにしようね」って言うて、「ん」って言うて、すると目をクリッとしたりしてたんですよ。	どっちでも「はい」とか言ったりするときもあつたけど／「そうね、お父さんコーヒー好きやったけん、今度コーヒーにしようね」って言うて、「ん」って言うて、すると目をクリッとしたりしてたんですよ。	本人の行動から気づく／対話的に本人の意思を捉える／表出の曖昧さ／本人の反応から確信する	対話的な歩み寄り／試行錯誤	本人の行動から、ニーズに気づく／表出が曖昧なときは、対話的に歩み寄る／本人の反応を見ながら確認する
142	B	主人では、やっぱり、もう、一番皆さん言われる、徘徊って言われるけども、私徘徊じゃありませんって言っちゃいますよ。ただ、いづつどこに行くと、どこに行くと、いづつも言ってきたからですね。それがもう、本当に会社行く、仕事行く、会社があるから行くと、ボランティアの何とかなんとかあるから行くとか、よく行って出てたからですね。そのたんびについていって。だから、それがまだ本当はあるんじゃないかなあと思っただけです。	徘徊って言われる／徘徊じゃありません／いづつも言ってきたから／よく行って出てた／そのたんびについていって／本当はあるんじゃないか	徘徊と言われやすい／本人の行動／以前からの習慣／知っていれば理解できる／徘徊ではない／本人の気持ち／目的がある	気持ち／目的／解釈／視点	徘徊と言われやすいような本人の行動／以前からの習慣を知っていれば理解できる／本人の意思や目的がある
193	B	そう。やっぱり振り返すからね。ギューツとやって、そして、おまけにこうしてくれるんですか。ねえ。そして、言葉じゃないよって、この、肌で通じるものがなんかあるんじゃないかなあと思っただけです。そういうと、まだ残ってますよ、しつかり。	振り返すから／ギューツとやって、おまけにこうしてくれるんですか。／言葉じゃないよ／肌で通じるものがある／そういうと、まだ残ってます、しつかり。	手を握り、抱きしめる時／言葉ではない／直感的に通じる温もり／認知症でも／本人の意思／しつかりと残っている	言葉を交わす以上／存在の温もり	手を重ねる時／抱きしめあう時／言葉を交わす以上／心が通う／本人の意思がしつかりと残っている
195	B	それで、大丈夫、私、やっぱりよくするなって言いよっちゃると思ふんですよ。ギューツと握るからですね。で、よしよししてくるしですね。	よくするなって言いよっちゃると思ふんですよ。／ギューツと握るから／よしよししてくるし	手を握り／励ますような仕草／優しい思い／変わらないやさしさ	言葉でなく／行為で伝える思い	昔から変わらない優しさ
197	B	そう。私、それは、こう涙が出るんですよ。本当、優しくしたからですね。とにかく喧嘩らしい喧嘩はしたくないです。いつも言っていたのが、お母さん大丈夫よって。お父さんがおる限り、ちゃんと守つたらねって、口癖がそれやったからですね。会社辞めたら、どこへでも連れていって。それで、車買ひ替えとつたら、なんのことない、どつても行かれんやつた。	優しくしたから／喧嘩らしい喧嘩はしたくない／いつも言っていたのが、お母さん大丈夫よ／お父さんがおる限り、ちゃんと守つたら／口癖／会社辞めたら、どこへでも連れてい	昔から変わらない優しさ／昔の本人の口癖／本当はやりたかったこと／今もつづ愛情	家族の関係	昔から変わらない優しさ／本当はやりたかったこと／愛情
199	B	それはやっぱりそうですよ。本当、手を、本当に手を取るっていうことは、それでやっぱり、こう、やっぱりなんどく伝わるんですよ。力をギューツと入れたり持っただけ。	手を取るっていうことは、なんどく伝わるんですよ。／力をギューツと入れたり持っただけ	手を取ること／本人の思い／強く伝わってくる	認知症によって伝えられなくなった思い	今ではほとんど言葉を出せない／推察することができる

ストーリーライン

Bは日常的なケアの中に、微細な表情や雰囲気の変化などに、直感的に気づき、本人の意思を昔から好きだったことを想起して捉えることができる。こうした推察は試行錯誤であり、確かめようがないものの、表情などからなんとなくの良さを実感している。特に、手を重ねる時や、抱きしめあう時の温もりは、昔から変わらない優しさを実感し、言葉を交わす以上に愛情や心が通うものである。

本人の行動などから直感的な気づきから、本人らしさや昔から本人が好きだったことから意思を思い起こして推察する。表出が曖昧なときは、対話的に歩み寄り、本人の反応を見ながら確認する。そうした表出できない思いについて、共に暮らしてきた家族だからわかることが意思として、具体的な内容まで推察して捉え、同じ思いを共有できていると感じている。

本人の意思の内容を確認することはできないとしても、優しさを実感するほどに、本人の意思がしっかりと残っていることを感じることができる。Bはこうした関りに、たまらない気持ちになる。

また、認知症をともなった本人の思い、本当はやりたかったこと、悔しさなどについて、交わしたい言葉もあったらうと本人らしさや思い出から推察して、つらい思いを共有する。子どもを認識出来ないように感じるときは、不安な気持ちになることもある。

徘徊と言われやすいような本人の行動にも、以前からの習慣を知っていれば理解できるもので、本人の意思や目的があることを感じている。今ではほとんど言葉を出せないが推察することができる。ただ、施設職員は少ない人数で安全を確保することが優先する必要があり、多忙な状況の中、意思の尊重をする余裕がないこと、家族のようにはいかないことなどから、難しいとも感じている。

理論記述

家族介護者は、本人の微細な表情や雰囲気の変化に、直感的に気づくことができる。

本人の意思の内容を確認することはできないような状態であっても、共に暮らしてきた家族だからわかることを実感している。

表出が曖昧なときは、対話的に歩み寄り、本人の反応を見ながら確認する。

手を重ねる時や、抱きしめあう時の温もりは、言葉を交わす以上に心の通うことがあり、優しい思いを感じてたまらない気持ちになっている。

本人の思い、悔しさについても、本人らしさや思い出から推察して、一緒につらい思いを共有する

施設職員は、多忙な状況にあり、意思の尊重まで求めることは難しいと感じている。

(3) D の調査結果

分析過程

図 4-4 SCAT による分析 1-D

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき箇所	<2>テキスト中の箇句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の書き	<4>テーマ・構成要素(前後や全体の文脈を考慮して)
7	D	心のなんですか、いつのあの、悲しい曲、きれいなメロディーを聞けば、琴線に触れるんでしょね。涙を出したり、楽しい曲を聞かせたいと思うんですけど、きれいな曲をきかせてと、やっぱり、もう泣きたくなるからしてね。	心/悲しい曲/きれいなメロディー/琴線に触れる/涙を出したり/楽しい曲/聞かせたいと思う	きれいな旋律/悲しい旋律/似ている/もの悲しさ/本人の心	本人が好きだった音楽/かえってもの悲しい思いにさせる	本人が好きだった音楽/きれいな旋律を聞いても、かえって物悲しそう
9	D	うちにいるときの表情がね、やっぱり、違うんですよ。怒る…怒る表情も違う、うちでも大きい声を出すことありますけども、怒るときは声もね、そんなに違う時もあります。明らかに、むこうにおつて、「おたやかです」って言われた時の表情と、うちでおる表情が、なんか、なんて言ったらいいんでしょうかね。違うんですよ。	うちにいるとき/怒る/表情/声/明らかに/むこう/おたやか/違う	自宅での本人の幸福/表情/声/施設職員の手を握る程/やさしく/本当の幸せ	Dだからこそ感じられる表情の違い	自宅で過ごす時間の表情や声/表情や声で感じる/微細な表出への気づき/本当の幸せ
11	D	そうですね、はい、それで、むこうにいるときは、私がほとんど毎日、毎日行ってますけども、「穏やかにしてありますよ」って言われても、お部屋で独り音楽を聴きながら、なんかこう、あんまりこう、寂しげな、本当に寂しそうな顔してる。	むこうにいるとき/ほとんど毎日/穏やかにしてありますよ/独り/音楽/寂しげ/本当に	施設での生活/毎日の面会/穏やかにと捉える職員の見点/寂しさを捉えるDの見点	施設と自宅の違い/本人の幸福/意識の水準の違い	穏やかな状態/寂しげな表情
12	D	私が行けば泣き出すこともあつたし、まだね、わかるどころもあるし、もちろん名前とかはわからなくとも、でも、そして、まず身体と触つて、ほつたをこうして、「きたよ、きたよ」っていうと、「そうか、そうか」って言って、泣き出す。だから、なんですかね。んー。	私が行けば/泣き出す/まだ/わかるどころもある/まず身体と触つて/きたよ、きたよ/泣き出す	名前などはわからない/余り触れる/Dを認識している/感情の表出	非言語的コミュニケーション/言葉にできない感情のあふれ	肌に触れる対話/名前さえわからなくても意思が残っている
20	D	なんか、本人のこの病気がほら、どんどんわからなくなるし、もしかしたら施設の方を自宅だと思つてつらくなるような雰囲気の時もあるのはあるんですよ。だから、これ、ずーっとずーっと続けていけば、きっと、家に、家っていうのは、忘れちゃうかもしれないんですけども、でも、まだわかりますので。	どんどんわからなくなる/施設の方を自宅/雰囲気/ずーっとずーっと/家/まだわかります	認知症の進行/施設暮らしの長期化/自宅の遠み/忘れゆく/希望はある	自宅から離れる/本人の幸福/意識の思いも忘れる	自宅や家族のことも忘れていくかもしれない/離れて暮らす生活の長期化
23	D	だからその、悪い思い出、良い思い出がたくさん、時間のね、積み重ねがあるっていうことは、とても力になるんじゃないかと、介護していくうえでね、どうおもいますか？	思い出がたくさん/積み重ねがある/とても力になる/介護していくうえでね	音楽を共にした時間/積み重ね/介護をする力	ケアに向き合う力	共に生きてきた時間/ケアに向き合う力
30	D	あれを見ただけでも不安になったりして、怒りだしたりするんですよ。なんか、怒りとか怒るっていうのは、やっぱり、本人の不安、不安じゃないんですよ。皆さんそうだと思いますけれども、そこを深くとも、そこを深くとも読み取ってくれる人が、周りにね、どれだけの、いないかというところ、違うと思いますけども。	不安になったり/怒りだしたり/本人の不安/そこを深くとも読み取って/周りに/どれだけの	本人の強い不安/理解/深く読み取る/ケアの質を左右	認知症の不安への理解/当事者意識/主観的な領域への理解	本人の意思やつらさ/共感できるかどうかはケアの質を左右すると思う
34	D	自分でだんだんおかしなところのわかるのか、英語がとても堪能でですね、海外にもずつと行ってましたので、海外のお友達も多いですし、1月から12月までの英語で、January, February, Marchで、ずつと、忘れないようにしてうね、書いてね。そんなのが、あとからぼつと出てきたらうたですね、やっぱり、はあ…、自分でこんなして、わからなくなつてきてるんだってことがわかって、どんな辛かったらうなと思いますよ。うーん。	自分で/おかしなところのわかる/ずつと、忘れないように/あとからぼつと出てきた/はあ…/どんな辛かったらうな	認知症の進行/苦悶/悲痛な思いの共感/追体験/強い不安体験への推察	秘匿された葛藤/主観的な領域の想起/悲痛な葛藤	整理をして出てきたメモ/本人の不安や葛藤の痕跡/強い不安を共感する
59	D	もつと、家に帰つてこんなに表情が良いのなら、もう少しかね、見てあげたい、見ていって、自分のためにですね。思つてはいるんですけど、だけど、こつちもね、その当時からすると、すでに14年くらいたつて、歳もつと若かつたら、もううつつと頑張れるのになつて、自分で、気持ちが葛藤してます。	家に帰つて/こんなに表情が良いのなら/見てあげたい/自分のために/すでに14年くらいたつて/歳もつと若かつたら/もううつつと頑張れるのになつて/自分で、気持ちが葛藤してます	自宅で過ごす時の表情/ケアしたい/D自身の体力の限界/気持ちと現実の乖離	幸せな時間への確信/ケアの核心/体力的な限界	本人の幸せにD自身の生きている意味を感じる/体力的な限界
67	D	やっぱり、深いななな、根っこにある、故郷に帰る、戻つての、八女の方に戻つてよく言うんですよ。だから、「戻る」っていう言葉に、非常に、自分は、安心感があると思うんですよ。だから、じゃあ「戻らうかね」というて、「どこに戻るんか」ということは言わなくても、あ、いや何回か言うた「どこに？」って、言いたければ、「戻る」っていう。	根っこ/故郷/戻る/非常に/安心感/どこに戻る	根源的/戻るといふ言葉の安心感/戻る場所/帰る場所/自宅/施設	根源的な故郷/ルーツ/施設暮らし/仮住まい	戻るという言葉/根源的な安心感のある場所/迷いを感している
99	D	あの、笑顔を見たときから、私なんて、その笑顔を見たら、幸せな気持ちになる。今までにあったことのない幸せ。ああ、これ、こういうことが本当の幸せなんだっていう事が、思い立つたんですよ。	私なんて/笑顔を見たら/今までにあったことのない幸せ/本当の幸せ	今までにない/本当の幸せ	苦しい時期/輝き/自分の幸せ	苦しい時期は笑顔に救われた/今までにない幸せを感じた
102	D	そうですね、そうですね。きつとね。だから、ああ、私は今、生かされてるんだと思つて、いつもね、おつてますけども。生きる、なんか、なんですかね、うまく言えないんですけども、こういう仕事を最初からね、するようになってたんだ。	今、生かされてる/生きる/うまく言えない/こういう仕事を最初から/するようになってたんだ	自分の人生そのもの/本人とともに生きる運命/神仏から許されている	人生で意味のある時間/自分になんかできない事	ケアの中に生きている意味を感じている
104	D	面倒見てあげよう、こつちが面倒見てもらつてるのかもしれないと思つた。生きる意味で言うんですけど、こめんない、言葉がうまく使えなくて。	面倒見てあげよう/こつちが面倒見てもらつてる/生きる意味	ケアしている/生きる意味を与えてくれる	双方向的/対話的	二人で幸せを共にする時間/双方向的
121	D	だから、変わつてしまつてのわけじゃないですか、元気が頃と、表情も、言葉も出ないし、相手のことでもわからなくなつてきてるし、だけど、わからないなりに、あの、わかるんですよ。これがね、不思議とね、雰囲気、空気感とか。	変わつてしまつての/元気が頃と/表情も、言葉も出ない/わからないなりに/わかる/不思議と/雰囲気/空気感	元気が頃と変わった/表情も言葉もでない/不思議とわかる	表出の方法/感じ方	表出の仕方が変わつて/意思が残っている/雰囲気や空気感でわかる
192	D	あの、なんか、わたしは、主人はね、誇りを持ってると思つてます。あの病気をしても、きつと最後まで誇りを捨てないと思つてます。	主/あの病気/きつと最後まで誇りを捨てない	誇りに負けていない/誇りをもって生きている	エールキッシュ/本人らしき/表出できない思い	本人から生きている感じられる
193	D	そういう感じられますもん、私、何か、だから、私も、その誇りを、自分もね、そうすることによって、一緒にね、頑張つていけるんじゃないかなと思つてます。	感じられます/私も/誇りを一緒に/頑張つていける	本人から誇りを感じる/D自身も誇りを持って/頑張れる	くじけてられない	くじけてられない

ストーリーライン

施設生活では、本人が好きだった音楽をかけて過ごしている。施設職員はそれを穏やかな状態というが、Dには寂しげな表情に見え、きれいな旋律を聞いても、かえって物悲しそうに思える。毎日面会に行つて、もうDの名前さえわからなくても、肌に触れれば涙があふれて、泣いてくれる。元気なころと表出の仕方が変わつて、名前さえわからなくても、意思が残っている。それは、肌に触れる対話や雰囲気や空気感でわかる。

自宅から離れて暮らす生活の長期化によって、自宅や家族のことも忘れていくかもしれない。しかし、一時帰宅して、自宅で過ごす時間の表情や声など、微細な表出への気づきから本当の幸せだと感じる。一時帰宅を終えるときは、安心感のある「戻る」という言葉使っているが、根源的な安心感のある場所に帰るという意味では、迷いを感じている。

自宅を整理をしていて出てきたメモなどには、本人の不安や葛藤の痕跡が残されていて、本人のつらさや無念さは相当なものであったと、強い不安を共感する。本人の意思やつらさを深く共感できるかどうかはケアの質を左右すると思う。

ケア初期の苦しい時期はD自身の疲弊も大きく、体力的な限界もあったが、本人の笑顔からは本物の幸せを感じた。特に、苦しい時期は笑顔に救われたし、今までにない幸せを感じたこともある。ケアの中に生きている意味を感じているし、双方向的に二人で幸せを共にする時間やこれまで共に生きてきた時間は、もっと一緒にいたいというケアに向き合う力になっている。

本人から今でも誇りを感じられる、D自身もくじけていられない。

理論記述

表情や肌に触れることなどで微細な表出に気づき、本人にとっての幸せな状態などを感じることができる。

同じ様子を見ても、施設職員は穏やかな状態と捉え、家族には物悲しそうな状態に思えるなど、捉え方が違う時がある

本人の不安や葛藤の痕跡や本人が過去に書き残したものから、今では表出できなくなった考え方や本人らしさを感じることができる。

本人の意思やつらさを深く共感できるかどうかはケアの質を左右すると思う。

ケアの中に本当の幸せを見出し、二人で共有することで、ケアに向き合う力になっている。

(4) E の調査結果

分析過程

図 4-6 SCAT による分析 1-E

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき箇所	<2>テキスト中の箇所の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
8	D	色々説明して、伝わらなくていい。腹かいたって、知らん顔しとしかない。色々説明して、説得して、こうじゃああやらが言うたって、結局、理解がでんし、記憶に残らんわけですよ。もう、そういうことについては、もうしょうがない。もうほったらかし。ということで、えー、まあできんことは、もう見過ごしていく。	色々説明して／結局、理解がでんし／もうしょうがない／もうほったらかし／できんことは、もう見過ごしていく。	言葉を尽くす／伝わらない／諦め／受容	認知症の進行／できなくなっていく／受容	対話や振る舞い／出来なくなっていく／抵抗することは出来ない
9	D	自分で、例えば、なんか「自分で掃除しない」とか言って掃除させるわけじゃない。えー、風呂の事も全部、洗って、お湯入れて、なんもしなくて、とにかくこうじと座っていることだけでも、まあそういうわけにはいかんということで、えーと、診断を受けたききかけというのは、それ以前からの物忘れの状況がよかったです。	風呂の事も全部／なんもしなくて、とにかくこうじと座っている／診断を受けたききかけ／物忘れの状況	家事ができない／求めない／病気の疑い	葛藤／解決の模索	受容だけでは済まない生活の状況
20	D	その他の日常、主婦としての日常をすることが、ほとんど出来なくなりました。それこそ、あんまりワーワー言っても、出来ん事ときなさいって言うたって、かえってストレスになるでしょう。なんか手にと持たせたら、じーっとして、こうどうしたらいいか分からんというような状況になつたりしました。	主婦としての日常／ほとんど出来なくなつたり／か分からんというような状況	家族にとっての日常／認知症の進行	日常生活の変化／試行錯誤	主婦として日常的にしていたこと／できなくなってきた
27	D	それ以外のこと、本人にとっちゃおかしな感じがするけど、生活行動の中では、なんかチグハグな感じがする。そのうちどこか分からんから、方向感覚がでずね。家の方向とかですわ。極端に言うとも、徘徊なことなつたりということがあって、送迎付きのデイサービス頼って行きよつたんです。	本人にとっちゃおかしな感じがする／チグハグ／徘徊なことなつたり／デイサービス頼って	本人の気持ちの推察／かみ合わない思い／デイサービス利用	徘徊／日常生活／危険性／サービスの利用	チグハグな言動が増え／デイサービスを利用
35	E	以前、自分でです。桜とか、コスモスの時期になると、なんか調べてですね。阿蘇の方、久留米の方、佐世保の方も連れて行ったことありますけど、それは、まだデイサービスに行く前の話ですわ。	桜とか、コスモスの時期／連れて行った／デイサービスに行く前	過去の本人らしさ／花が好き／一緒に出かけたい思い	乗しかつた思い／認知症で失われたもの	良い思い出／以前の本人は対照的なほど活動的
55	E	そんな時に別れの会があるわけじゃないけど、出ていくときもですね。早く迎えにきたもんね。本来、一緒に付いていかなきゃならないけど、こっちもちょっと、なんか家の片づけやらなんか、後片付けがあるということで、車に乗せて。それは前から、通いのデイサービスの時あつたけど。	別れの会／出ていくときも／早く迎えにきた／一緒に付いていかなきゃならない／後片付けがある／車に乗せて	別れの時間もない／入所のあわただしさ／一緒に付いていけなかった思い	自宅を離れる最後の時間／あわただしくなつてしまつた	大切にしかつた時間／あわただしさで返ることができなかった
56	E	車に乗るよ？そしたら、私が「行っていい／いってらっしゃい」という感じでしょ。そしたら、「あなた行くんか？」とか「乗んなさいよ」とか言うわけですよ、なんかそういうことは言うんですよ。ある時期は。	いってらっしゃい／あなた行くんか？／そういうことは言う	車直な思い／不意に出てくる言葉	失われたと思つた言葉	自宅を去るとき／寂しさを表す言葉／失われたとおもつた言葉
58	E	何か知らんけど。車に乗ったら一緒に来るんだという感覚でしょうね。そんな時はもう、ごまかしやないけど後かきというときと待たさないと。」というのを言うて、やつたつた、先に。	一緒に来るんだという感覚／もう、ごまかしやないけど／後かき	車を出かけた思い／思いに込められない後ろめたさ	身体が覚えていない／習慣／認知症でも失われなかったもの	身体が覚えていない習慣／一緒にいるのが当然という感覚
64	E	老人保健に入って、やっぱり環境が大きく変わるからですね。それまでは、デイサービスに行つたて、朝夕は私と一緒なわけですよ。向こういつたら、知らん人ばかりの中で、緊張感があつたんですよ。表情がもうすぐ極端に変わったもんですね。	老人保健／環境が大きく変わる／それまでは／朝夕は私と一緒／知らん人ばかり／緊張感／表情がもうすぐ極端に変わった	自宅とは全く違う／施設では孤独／大きく変わった表情から推察	施設入所がもたらした変化／孤独／恐怖／失われた表情の意味	一変して表情が失われた思い／思い／喪失／よほどの孤独や恐怖があつた
65	E	それと、もう一つびっくりしたのはですね。言葉がですね、それまでも、話し言葉がほとんど出てこなくなつたけど、「あー」とか返事するくらいは「あー、そう。」なんたらと言感です。もう声掛けつたて、顔はもう見るとですね。会話はもう出来なくなつた状態になつてしまつて、ほんの1か月ぐらいでなつてしまつたもんね。そー、びっくりした。	びっくりした／言葉／「あー」とか返事するくらい／もう声掛けつたて／会話はもう出来なくなつた状態／ほんの1か月ぐらいでなつてしまつた	言葉がほとんどでなくなる／驚くほどの変化／声をかけても振り向くだけ	わずかに残されていた言葉／喪失／驚き／内包される寂しさ／想定を超えた悪化	わずかに垣間見られた表情や言葉／喪失／驚き／寂しさがこみ上げる
80	E	表情も死んでしまつてですね。	表情／死んで	表情に出すこともなくなつた	表情からの理解／期待できない／絶望	表情が失われて、意思は死んでしまつたように感じる寂しさを共感することだけが残つた
84	E	嬉しそうなのは、ほとんど感じらん。寂しそうなのですか。	嬉しそう／ほとんど感じらん／寂しそう	寂しさは感じられる	寂しさへの共感	Dの行動や生活音が様子を感じている
87	D	それがあつた時期からですね。「出かけるから寝ときなさい。」と出かけるんですけど、二階に寝るとですね。私が今二階に寝るとですね。寝起きしとるんですよ。すると、階段降りてから、玄関出てこようとする、二階からとんとんと降りてくる物音がするわけですよ。	玄関出てこようとする／二階から／降りてくる	玄関の音／外出を感じる／道いかけでくる	思いの感じられた時期／行動から感じる思い	Dの行動や生活音が様子を感じている
88	D	「何しよるといふ。寝ときなさい。言つたやろや。」と言つたら、「あ、そう？」と、こういうことやけん／寝ときなさい。」と言つたら、「あ、そう？」と、言つてから、また戻つて、そう言うかと思つたら、また出て行きよつたら、また降りてくる。そういうのが3〜4回かして、寝とつたという感じ。あー、なんかその頃、結局、進歩の関係かな。だんだんそういう、あの、不安な感情による行動というのがなくなつていったわけですよ。	寝ときなさい／また戻つて／また降りてくる／3〜4回	Dの顔をみると安心する／独りになると気になる／孤独／繰り返す／よやく／落ちつく	独りであることの思地地悪さ／不安	孤独に対して恐怖
91	D	結局、進行の関係／不安な感情による行動／なくなつていった	結局、進行の関係／不安な感情による行動／なくなつていった	アルツハイマーの進行／不安を表現できなかった	意識から離れていった	不安／表出がなくなるにつれ、なくなつたものだと感じていた
106	D	寂しいという行動からですね。考えたらそうなるでしょうね。寂しいって言うのは、独りやたら不安で感じるんですよ。なんか、そう伝わってくる。	寂しい／考えたらそうなる／一人やたら不安／なんか、そう伝わってくる	ふるまい／行動からの理解／意識しなかった／孤独／今ならわかる	妻の寂しさ／なんとなく／強／感じる	孤独に対して恐怖／行動からも感じられた
108	D	私がいつも一緒に、あの、家におらんという事／不安／寂しい気がする。話が進んじから。	私がいつも一緒に／家におらんという事／不安／寂しい気がする／話が進んじから	孤独／一緒にいるときは安心／言葉では伝えられない／感じる	妻の孤独に対する不安／強／感じる／言葉では伝えられない	Eと離れること／不安／言葉にできない／感じていた
164	E	ない、伝わらんちゅうか、感じないですね。声かけるんですけど、振り向きはしませんが、あなただれ？ちゅうような顔して、おりますけど、まあ、あとは、なんか知らんけど、目が宙を浮いとる感じ？言つては、何を考えとるかかわかんないですね。	伝わらんちゅうか、感じない／あなただれ？／目が宙を浮いとる感じ／何を考えとるかかわかんない	思いがあるとも感じられない／機械的に振り向くだけ／表情がない／目が合わない	かつて／心を感じる限界	表情もなく宙を見たまま／感情を感じ取るすべがない
173	E	もう会話が出来んし、立ち振る舞いでもできんし、何かを、感情を積み取るという手段がないですわ。	会話／立ち振る舞い／感情を積み取る／手段がない	もう今となっては／あらゆる表出ができない	今の思い／推察の限界／取り戻しようがない	今となっては／感情を感じ取るすべがない
174	E	まあ、すこしでも、やけん、なんというか、楽しめるような、そんな風な提供できることないか、行くときは、あの、なんかない、おやつを、だいたい普通は、向こうが用意した、3時ぐらのおやつが出るとやけど、たまにちょっと、硬いのがあつたりするようすから、小さなケーキ、パウムクーヘンかな。	すこしでも／楽しめるような／行くときは／小さなケーキ、パウムクーヘン	心が読み取れないなり／喜ぶであらうもの	限界的な状況／出来ることの模索／方向性のない思い	今の妻の思いにどうしようも、少しでも良い生活となるよう、ケアを模索する
204	E	なんか思うと知らんけど、ひょっとしたらなんかあるかもわからんけど、脳の機能が本当、ほとんど真っ黒なつたら、MRとつたらですね。そいけん、あんまり、そういう意味じゃ可哀そうやけど、期待できんですわ。	なんか思うと知らん／ひょっとしたらなんかあるかもわからん／脳の機能が真っ黒なつたら／MRとつたら／そういう意味じゃ／期待できん	もしかしら／心が残つているかもしれない／脳の機能がとまっている／医学的根拠／絶望の想起	まだ心が生きていて／今への主観的期待／脳のMR画像／客観的絶望	表出できない意思があるかも知れないという思い／今への主観的期待／脳のMR画像／客観的絶望に打ち消れてしまつた
212	E	そういう話の種やないけど、ごく普通の会話ができるんですよ。そういう会話のごたごたもない、アルツハイマー認知症になった人たちは、ねえ、可哀そうばつてん、生きる屍でしょうが。	ごく普通の会話／アルツハイマー認知症／可哀そう／生きる屍	アルツハイマーでなければ、会話が出来る／心が感じられなくなることへの憤り	心を感じた／叶わぬ思い／運命への憤り	「生きる屍」とさ感じられるほどの虚無

ストーリーライン

対話や振る舞いなどにチグハグな言動が増え、主婦として日常的にしていたことが次第にできなくなつてきた。認知症によって出来なくなつていく事自体に抵抗することは出来ないため、受け入れていくほかなかつたが、受容だけでは済まない生活の状況となつて、デイサービスを利用するようになった。

本人が不安や孤独に対して恐怖があることは、行動などから感じられた。特に外出で不在にする際など、Eと離れることへの不安があることは、本人が言葉にできないものを感じられた。そうした不安も、表出がなくなるにつれ、なくなつたものだと思つていた。

施設入所で自宅を去るときの寂しさを表す言葉が印象的だった。失われたとおもっていた言葉は、一緒にくるのが当然だという感覚や身体が覚えている習慣から出たのだろう。この時の大切にしていた時間や本人の思いに、あわただしきで応えられなかったことを後悔している。

表情などの表出は施設入所で一変して表情が失われ、よほどの孤独や恐怖があったものと思われる。わずかに垣間見られた表情や言葉さえを喪失したことには、驚きと寂しさがこみ上げた。表情もなく宙を見たままとなり、本人から表出が失われて、意思是死んでしまったように感じる。感情を感じ取るすべがなく、今となってはもはや「生きる屍」とさえ感じられるほど虚無的で、寂しさを共感することだけが残った

病気になる以前の本人は対照的なほど活動的であり、表出できない意思があるかも知れないという思いもある。しかし、脳のMR画像という客観的な絶望に打ち消されてしまう。今の妻の思いに応えるというよりも、少しでも良い生活となるよう、ケアを模索している。

理論記述

認知症初期のチグハグな言動が増えたことには、病気であり抵抗することは出来ないと受け入れるしかない状況だった。

認知症の進行によって表出がなくなったが、孤独に対する恐怖は残っていると感じる。

家族と共に自宅で過ごす時間は、Dの行動や生活音で様子があり、一緒にいることで安心を感じていたようだ。

表情もなく宙を見たままと、意思を感じることはできなくなった。

表出できない意思があると期待するが、認知症が進行性であることや脳のMR画像など、客観的な絶望に打ち消されてしまう。

今の妻の思いに応えるというよりも、少しでも良い生活となるよう、ケアを模索している。

3. 第1調査の小括

(1) 関係性の再構築

ケアの初期は、共通して葛藤や混乱などを有しやすく、本人と介護者の関係が緊張したものとなるため、介護者は心の余裕を損ないやすい。そのため、本人の意思をうまく捉えられない関係性となりやすい(A氏)。かみ合わないやり取りが増えることについては、進行性の病気であり抵抗しえないことと受け止めながらも、本人の不安や孤独を少しでも軽減できるよう、注意深く関心を寄せていた(B氏、D氏、E氏)。

葛藤や混乱はあるが、共に過ごした時間の中で介護生活への慣れや受容が進み、微細な表出などから意思が捉えられる関係性を再構築した(A氏、B氏)。ただし、再構築の過程は、共通して、大きな葛藤や悲痛に孤軍奮闘している状況が語られており、推察の関係性は不安定な状態と思われる。

(2) 表出困難な意思への気づき

心の余裕ができるにしたがって、本人の繊細な表出などから意思を気づくことができるようになる。本人の気持ちを確認することができないような状態であっても、家族介護者は心が通う感覚を実感している(A氏、B氏、D氏)。

家族介護者は、表情や行動などに表れる微細な表出に気づき、本人と共に生きてきた思い出、共有してきた感覚など、生の履歴から共感して捉えていた。本人の表出が弱くとも、曖昧なままの意思として直感的に捉えるすることもある(B氏、D氏)。直感的に捉えるにあたって、表情や振る舞いを重要な視点として、さらに、肌に触れた時の温もり、表情、仕草などから、言葉にならない本人の意思を捉えていた(B氏、D氏)。こうした繰り返しから、本人と介護者は、鏡のように感じあう関係となる(A氏、B氏)。

表出の方法が変わったものの、直感的な気づきとして、本人には心が残っていると実感することができる。しかし、第三者が直感的に気づき、踏み込んだ推察をするには、十分な関係の構築が必要と思われる(A氏、B氏、D氏)。そのため、施設職員などにあっては多忙な状況があり、共通して意思の尊重まで求めることは難しいと感じている。

(3) 推察をめぐる解釈への不安

本人の表出困難な意思について、家族介護者は推察の確からしさを確認する術が得られず、つらく不安な思いになることがある(A氏、B氏、D氏)。自身の推察が独りよがりではないかと不安になると、もし本人だったらこう慰めてくれる、あの時はこう言ってくれたなど、本人との過去の思い出などから捉えて直していた(B氏、D氏)。その他にも、本人が過去に書き残したものから、葛藤の痕跡などから、理解を深めることもある(D氏)。また、本人の意思の推察を鏡に例えて、自身の不安な感情は本人の不安や孤独を共感したものと捉えるなど(A氏)、推察をめぐる解釈には広がりが見られた。

一方で、焦点が合わないまま宙を見るような表情など、本人の表出困難さが深まると、

家族介護者によっては一切の意思が感じられなくなることもある。家族介護者の悔しい思いが混在した言葉とも考えられるが、家族介護者であっても推察の解釈には限界があることが示されていた。特に、認知症が進行性であることや脳の画像診断など、客観的な絶望感が強い印象は、表出できない意思があるだろうという期待を打ち消していた（D氏）。

しかし、意思を汲み取ることが絶望的な状況にあって、あるいは、不安や葛藤の状況にあっても、本人にとって少しでも良いであろうケアに取り組み続ける家族介護者には、Well-Being を追求において、推察の重要性を見ることができた。

（4）推察した意志の評価

家族介護者は本人の表出困難な意思への推察し、本人の Well-Being を求めたケアをすることは、家族介護者自身の喜びや、より繊細な表出への関心などにもつながる（A氏、B氏）。本人の優しさを感じることで、本当の幸せを感じることなどの語りにも示され、ケアに向き合う力となっていた（D氏）。こうした評価の背景には、推察によって解釈した意思に基づいたケアが、現在の本人の意思と妥当であるという実感を得ているものと思われる。

さらに、本人と家族介護者自身の意思が近似した状態になることについて、主観や存在が鏡のように接近した状態を考えれば（A氏）、本人の幸せを願ったケアは介護者自身の幸せにも関わりうる。こうした感覚によって直感的に推察した意思は、純粹に本人の表出困難な意思のみを尊重しているというよりも、家族介護者側の願いも含まれた間主観的な解釈である可能性がありうる（D氏）。しかし、そもそも意思が、他者との対話や暮らしの中で変化することを想定するならば、その程度によっては許容すべきであると考えられる。

一方で、家族介護者の負担がつのり、大きな心の揺れが生じた場合、同時にケアも損なわれる危険性を有していることから、第2調査の必要性が示唆されていた。

4. 家族介護者の負担や葛藤に関する調査結果（第2調査）

(1) Aの調査結果

分析過程

図4-7 SCATによる分析 2-A

番号	発語者	テキスト	①<1>テキスト中の注目すべき文句	②<2>テキスト中の断句の言いかた	③<3>を説明するようなテキスト外の要素	④<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）
14	A	最初のころはケアのやり方も分からないし、医療的な知識もないから。両方で病気のこと心配、心配っていうかな。病気の現状を理解するのに苦労する。で、先生に聞いても、こう、はっきりした回答でないやない、病気のことで。もうそこら辺でね、その、自分のその、悩んでいるかな。で、その介護をするほうの悩んでいるものは、まあ、取りあえず自分ができることをするしかないから。	ケアのやり方／医療的な知識／現状を理解する／苦労する／はっきりした／回答でない	ケアのやり方／病気の現状／わからないことばかり／出来る事をするしかない。	わからない／不安	ケアや治療について／わからないことが重なる／自分の中の悩みがあまりないまま／出来る事をするしかない
38	A	自分の中で、こう、葛藤していくしかないよね。まあ、葛藤っていうか、自分がそういうものをおみ込みかどうかの、ことでしょ、そのときはもう病気のことで頭の中いっぱいよね。	自分の中で／葛藤していくしかない／病気のことで頭の中いっぱい	最初の葛藤／受け入れるかどうか／頭がいっぱい	自己解決／孤立感	自分の中で葛藤していくしかなかった／病気のことで頭がいっぱい
98	A	あ、最初、最初は、その、自分の中で看護婦さんに、元看護婦さんやってとからね、〇さんもそうやし、佐賀の人もね、〇さんとかもそうやしね。看護婦さんにも電話をしても、でも、そのカウンセラーみたいなことでしょ、してある人にも話したことあるしね。	最初／看護婦さん／元看護婦さん／カウンセラー	最初のころ／看護婦やカウンセラー経験のある人／病気の専門性や情報／頼った	専門性への信頼	最初は専門性や情報みたいなものを期待した
78	A	人間だから、そんなときその感情ってあるよね。普通、だっけ、普通にしようとするとき、そうでもないけどさ、「あんた、ちゃんとしてよ」とかいう言葉が出る。でも、そういうことに対してお父さん、あんま感情的に、こう、言わないけど。まあ、私ができる範囲ならこれくらいやろうと思っちゃったりよばってん(笑)。でも、あの、あの、ケアマネさんとか、あの人がたつと、か、「全然理やかな性格やけ、もともと穏やかな人だったんでしょ」とか言われるけど、まあ、本人の性格もあるやろけど、まあ、それで言われるの、「あ、奥さんが、してあるからですよ」と言ってくれたっけん、まあ、お互いに。	人間だから／そんなときの感情ってある／「あんた、ちゃんとしてよ」とかいう言葉／本人の理やかな性格／許される／一生懸命していること／分かってきている／お互いに許し合う	介護者／感情の波／責める言葉／本人の理やかな性格／許される／一生懸命していること／分かってきている／お互いに許し合う	本人の理やかさに／介護負担の感情／癒やされる	介護負担／感情的な揺らぎ／本人の理やかさ／許された気持ちになる／お互いへ支え合っている
100	A	で、その人の1つ思ったのが、「あ、そうね、そうね」、「大変ね」って言ってからね、で、最後「頑張ってるね」っていう、回答っていうのが一番に、あの、何ていうかな、救いにならない(笑)。いや、突き放されたじゃなくて聞き流されてるみたいなね。	「大変ね」／最後「頑張ってるね」／回答／一番／救いにならない	聞いてくれているようで／ありきたりな励まし／寂しい気持ち	看護婦やカウンセラーの対応／専門性	ありきたりな返答／聞き流された様な寂しい気持ち
110	A	だけど、それは、今、あの、こんな期間がたったやろ。そして思うんだけど、それはね、やっぱりみんな回答できないことなのかなと思うの。お医者さんでも一般論で言われるんやろけど。でも、最初のころの悩んでいるのは、それが一番よね。で、まあ、5〜6年たつと、もう、あ、半分こ、聞き直りじゃないけど、だいたい自分の中でしょ、できないやんとか、できる範囲内でしかしようがないやんとか、そういうのがあるから。	平均的なこと／分からないこと／最初のころの悩み／それが一番／5〜6年たつと／半分／聞き直り／自分の中で／しようがないやん／できない範囲内	表面的に応えられるばかり／答えのない悩み／一番大きい／聞き直って／できる限りやるしかない	深い葛藤／専門性／表面的／応答できない	答えのない悩み／一番大きい／数年かかった／聞きなおって受け入れられなかった
134	A	もう友達、だってさ、話をこう聞いてもらうといたときにさ、昨日、今日会った人にも、実はね、ちょっとこうだつてね、言えないやろ。	昨日、今日会った人／実は／ちょっとこうだつてね／言えない	初対面の人に対し／思いを打ち明けられぬ	初対面の人／打ち明けられない	初対面の人／打ち明けられない
146	A	だからなかなか、あのね、講演会の後はそういうふうにして、まあ、話が少さう、自分とダブって分かっていかな、あったけん良かったけど、前に行ったやろ。そのときは全然こ、もう、自己紹介で終わってしまう感じやから、自分ピンとこなかつたけん、もうそれくらいかかって思ったんよね。2回目ももういいかって思うよね。	ダブった部分／良かった／自己紹介で終わってしまう／ピンとこなかつた／いいかって思った／2回目	家族介護者の集まり／体験的な共感／出来事の説明だけ／二度と行かない	期待と違う／次回への参加につながらない	家族介護者の集まり／体験的な共感／自己紹介だけの時は二度と行かないと思った
202	A	「今度一緒に食事しよう」とか言ってる、そういう感じやけど、ケアマネさんっていったら、もうこの何ていうかな、お父さんに関しての、自分の心がこうですよじゃなくて。お父さんのサポートとして何がいいでしょうかって、今このスケジュールでいっているからとか、もうそれに関するだけでいいやない。	ケアマネさん／お父さんに関して／心がこうですよ／じゃなくて／お父さんのサポート／何がいいでしょうか、今このスケジュールでいっているから／それに関するだけでいい	ケアマネ／本人のケアに関する事ばかり／介護者の心／関心がでない	仕事／目的だけ／専門職	仕事への目的意識の強さ／介護者の心／関心や配慮がない
248	A	でも、この2人っていうのは、今仕事してないけん、いつでもいいよね。要は自分がウツと思ったときに電話すれば、まあ、そのときに用事があったら別やけど、そういう拘束がないしやすうっていうかな。仕事に行ってる、ね、7時から9時までの間に電話、でないとあんまり早めだ仕事のあるね、ご主人と一緒に仕事だけ、まあ、食事の用意とかあるやろなとか思ったらさ、なかなかかけづらいもんがあるよね。	自分がウツと思ったとき／拘束がないしやすう／かけづらいもんがある	突然くる心の揺らぎ／その瞬間に／教いを求められる友人／打ち明けるとき／時間を気にしてられない。	相談相手／求めるもの	いつでもじっくり聞いてくれる／突然くる心の揺らぎ／いつでも相談できる相手
302	A	普通の、あの人もそうやけ、そう、あれ、あ、そうか、友達と話したときに、老いては子に従って言うけどなとは言ったんよ。だっけね、親は親としてのね、何か、意地みたいなものがあるんだよね。だから、なるべくね、こう、自分でできることは自分でしようと思っ、だっけね、子どもから見れば、見ればね、もうあんたそろそろ限界らしいっていうのが、見えよるかもしれんけどって話をして。	親は親としての／意地みたいなものがある／自分でできることは自分でしよう／あんたそろそろ限界らしい	親としての意地／子どもに過度な心配や負担をかけたくない／無理があるのかも知れない	助けを求められない／求めたくない	子供に対して／親としての意地／心配や負担をかけたくない／無理があるのかも知れない
380	A	そうそう、自分って、みんなそうやけど、自分でできる範囲内で一生懸命にしてやろうと、してやろうやなくて、ね、そういう状態で、がーんと怒られたらさ、もうでんとか思うよね。もう嫌って、私もこれ以上でんとか思いながら。	自分でできる範囲内／一生懸命にしてやろう／そういう状態で／がーんと怒られたら／もうでん／もう嫌	一生懸命しているとき／つらいこと／投げ出したくなる	さらにつらいことがある／耐えられない	一生懸命、ギリギリまで／本人とのずれ違い／耐えられない思い
482	A	なのに、年取ってると、何なりと悩みがあるのよね。で、話している、私こう、そういう悩みっていうか、愚痴を言う、向こうも向こうで愚痴を言うてるしね、お互いにそういうことを言っても、他に公言するわけでもないから全部言える。	愚痴を言う／向こうも愚痴を言うてる／お互い言っても、他に公言するわけでもない／全部言える	友人／お互いに／愚痴や悩み／言うことができる関係／全部言える。	双方向の対等な関係	友人としてお互いに／何でも話せて、愚痴も言い合える／逆に相談される

ストーリーライン

ケアの初期は、ケアや医療についてわからないことが重なって、自分の中の悩みはあまりないまま、出来る事をするしかない。病気のことで頭がいっぱいになり、自分の中で葛藤していくしかなかった。最初は専門性や情報みたいなものを期待したけど、相談をしても、ありきたりな返答しか得られず、聞き流された様な寂しい気持ちになった。専門職は、仕事への目的意識の強さなど、介護者の心に関心や配慮がないように感じられた。

こうした回答のない悩みが一番大きく、自分の中で葛藤するしかない状態が数年かかった。ゆくゆく、不安に思っていることについては、聞きなおって受け入れるしかなかった

た。介護負担や不安などによって感情的な揺らぎが生じるときもあるが、変わらぬ本人の穏やかさにふれれば、許された気持ちになる。お互いに支え合っているのかもしれない。一方、一生懸命、ギリギリまでやろうとしているときに、本人とのすれ違いがあれば、耐えきれない思いを抱えることもある。

家族介護者の集まりにも参加したが、体験的な共感が得られなかった。自己紹介だけの時は二度と行かないと思った。もっとも支えとなったのは2人の友人で、突然くる心の揺らぎも、いつでもじっくり聞いてくれる。逆に相談されることもあり、友人としてお互いに打ち明けることができたので、何でも話せて、愚痴も言い合える。子どもに対しては、実際には無理があるのかもしれないが、心配や負担をかけたくないという親としての意地があって、打ち明けにくい。

理論記述

ケアの初期、ケアや医療についてわからない不安や自分の中の悩みをあいまいなまま、介護者一人で抱え込みやすい。

回答のない悩みが一番大きく、自分の中で葛藤する状態がつづき、開き直って受け入れるしかないと孤立していた。

ケアの中で、変わらぬ穏やかさにふれれば、失敗も許された気持ちになる。

介護者にとって、いつでもじっくり聞いてくれ、また逆に相談されるなど、何でも話せて、愚痴も言い合えるようなお互い様の関係であると相談しやすい。

専門職であっても、ありきたりな返答が見透かされると、聞き流された様な寂しい気持ちを与えてしまう。

一生懸命、ギリギリで向き合っているときに、限界を迎える危険性がある。

介護者は親としての関係性において、子に相談することは負担をかけることであり、親としての意地があって打ち明けきれない。

(2) B の調査結果

分析過程

図 4-8 SCAT による分析 2-B

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
10	B	あそこでは今度「こんなうちはなってるね、もうこんなよ」って言えば、「あ、うちもそれはしたよ」って、「やっぱりそれを何回か繰り返してね、そうならないもんね」って、もう半分は仕方ないって思っているけど、ね、そうならもうこっちのほうがキツとするんですね。だけん、そんなふうな感じを話す、結構構って結構なんですよ、やっぱり、話の内容が皆さん分かってくださるから。そうしたらやっぱり、誰かかやっぱり聞いてもらえたらいいんですけど、気持ちが一つとす。	もう半分は仕方ないって思っている／こっちのほうがキツとする／結構構って結構／話の内容が皆さん分かってくださる／聞いてもらえただけで気持ちがすーとする	自分のこのように分り合う／ずーと話していただく／誰かに聞いてもらえただけでも、気持ちがすーとする	認知症の家族会の友人／経験が豊富な／体験的に理解しあう関係	認知症の家族会の友人／わかってくれる／聞いてもらううちに、気持ちが落ち着く
19	B	そう言われたらもう、「ああ、もうアルツハイマーだ」って言われて、言われて、うわーと落ち込んで、それでお父さん帰ってきて、「もう俺の人生終わった。もうここで死んでもいい」ってよく言ったの。それでこの前個人名さんが言われたように、お父さんも散歩行くようになって、帰ってこなくなってきたら、「死にきれなかった」って帰ってきたことがあった、何度かあった。こーやって、それで私もずっと付いて行ってたんですけどね。	もうアルツハイマーだって言われて、うわーと落ち込んで／帰ってこなくなってきたら／死にきれなかった／帰ってきたことがあった、何度かあった／ずっと付いて行ってた	認知症と分かったとき／本人は自殺を考えた状態／本人の悲痛な思い／介護者は寄り添い続けた	認知症告知時／本人の葛藤	認知症と分かったとき／本人は自殺を考えた状態／本人の悲痛な思い／介護者は寄り添い続けた
25	A	いや、先生たちはやっぱり先生の立場でございまして、昔は大体10年ぐらいって言われてたんですけど、初期、中期、後期って言う、だだ、だんだん薬も良くなって来たりする。だから、それを維持するにはやっぱり何かをせんとしとらん。じつとじつとやっぱりいかにやらなくてはいけないこと。だけん、そこ行くといふことって、あそこその、Oさんの所行ったら、デイサービスもあつたんですよ。	先生たちはやっぱり先生の立場で維持するにはやっぱり何かをせんとしとらん／いかにやらなくてはいけないこと／デイサービスもあつたんですよ	医師は医師の立場で言わないといけい／治療やリハビリの話／他施設の紹介	家族の会とは話の聞き方が違う	医師は医師の立場で言わないといけい／気持ちの支えを求めるとは難しい
54	B	うわー、そうしたら、もう椅子に座って、どうしたら落ちたりしてたか、こうしたら、私が。「ああ、眠ってありますもんね」ってスタッフの方、言われるんですよ。お昼に私いつも行ってたんですけど、最初の辺はやっぱり言われたりして、こげんてたら、いつの間にかやっぱりアウトとしますよね。あ、「お父さん、ご飯が来てるよ」って言う、「今、眠気が来て眠ってますもんね」と言われるけん、「お父さん、お父さん、お昼よって、「ご飯食べないよ死ぬよ」とか言ってですね。わざとってですね。起こしてさ、もう食べさせれば食べるんですよ。「持つて」とか言って持たせる。だけん、やっぱりスタッフの方は、あ、眠たいんだ。	眠ってあります／スタッフの方、言われる。「そう言われたり何たりして、こげんてたら、いつの間にかアウト／スタッフの方は、あ、眠たいんだ。	本人の意思が理解されていない／孤立した結果として眠ってしまう／た、眠かたからではない／本人の気持ちもわからない	そう言われ(責められたり何たり(言えない)／職員/家族の表面的な解釈/本人の気持ちもわからない	本人の意思が理解されていない／職員/家族の表面的な解釈/本人の気持ちもわからない
64	A	もありますよね。それいけん、私はもう毎日行ってるだけで、ある程度、私、もうスタッフの方も同じくらいか、年若いけど、若い人やたらやっぱり子どもぐらいの方もいらっしゃいますからね。	スタッフの方／子どもぐらいの方もいらっしゃいますからね	若い職員／子どもぐらいの年齢の介護職	高齢者の気持ちをわかかるのは難しい	子どもぐらいの年齢の介護職／高齢者の気持ちをわかかるのは難しい
86	B	あんま強く言えばね。いい人ばかりじゃないけど、そのまま聞いてくれればいいけど、今度こっちが言うって、どがされるか分からんやろって、みんな心配してるんですよ。	いい人ばかりじゃないけど／どがされるか分からんやろって、みんな心配してるんですよ	踏み込んで言う／理解してくれない人／どがされるか分からんやろって、みんな心配してるんですよ	表出困難な人を大切に／踏み込んで聞いてほしい	表出困難な人を大切に／踏み込んで聞いてほしい
106	B	ああ、そうそう。ね、やっぱり子どもね、心配配ってないってところが、やっぱりあるんですよ。全部は言えないって。ただ、こーやって、10あったら、3か4ぐらいまではこーやって言うけど、本当のところはやっぱりそうい。	子どもに心配配ってない／10あったら、3か4ぐらいまで	子どもに言えば、心配させてしま／心配させたくない／本人の3-4割まででとめていい／本当の気持ちは言えない	子どもへの遠慮／打ち明けられるのは本人の3-4割程度	子どもに言えば、心配させてしま／心配させたくない／本人の3-4割程度
112	B	だけん、やっぱりね、普通の昔からの友達ぐらいには、ちょっとそういう話はない。ちょっとこーやって、さりとて言うけん、「家族会」なんかで同じ病気をしてる方やたら分かってもらえるから、やっぱり何でも言う。うーん、やっぱり同じ病気、同じような気持ちでいるっていうのは強い。	昔からの友達ぐらいには話はない／同じ病気をしてる方やたら分かってもらえる／何でも言う	普通の友達には打ち明けたりしない／同じような経験/体験がある分かってもらえるであろう人にしか言えない	打ち明けられる対象／繊細な判断	普通の友たぐいには打ち明けたりしない／自分と同じような経験を体験した経験者にしか言えない
114	A	友達なんか言ったら、やっぱり分からぬです。大変なっていうのは分かりますよ、私もそれだともう、友達と親とご主人、かんだかかいてても、ああ、やっぱり大変だろうって思うけど。	友達なんか言ったら、やっぱり分からぬです	同じような体験がなければ分らない／表面的には分かる	心配してくれる(116:「ああ、大変ね」無理したらいかんよ)	同じような体験のない人／表面的にはわかってくれる／共感を求めることは難しいだろうとも感じている
132	A	いやー、だけんね、私もあんまりそこまで、まあ、Oさんには大抵言っておりましたけど、ケアマネさんにこそまではね。	ケアマネさんにこそまではね。	ケアマネには打ち明けにくい。	形式的な関わり	ケアマネ、打ち明けにくい。
146	A	うん、地域でもね、「あんまり頑張りすぎんことね」とか「頑張りよるやないこと、言ってくださる人いらっやるんですよ。だけん、やっぱりそれ以上のこと、やっぱり私も言えせんね。	地域でも／「あんまり頑張りすぎんことね」とか／「頑張りよるやないこと、言ってくださる人いらっやるんですよ。だけん、やっぱりそれ以上のこと、やっぱり私も言えせんね。	地域の人／心配してくれる／それ以上を求めてもいけない	実際の経験に重ならぬ／踏み込んで話を聞かない	地域の人／気にかけてくれる／それ以上を求めてもいけない
190	A	私も1回誰かに言ったつたけ、やっぱり親とか、兄弟とか、いろいろな他のね、あ、「あんまりこう言っても聞いても、どう言ってもいいから聞かないもんね」って言うけん、こーあるんですよ。やっぱり、向こうとしては、私もそう思うんですよ。こー、聞いて、「本当ね、大変ね」って言うのは言えんけど、それをこーうこーうとはいえないですもんね。	1回／親とか、兄弟とか／どう言ってもいいから聞かないもんね／向こうとしては、私もそう思うと思う／本当ね、大変ね	答えようがない／それは、私もそう思うと思う／向こうとして困るだろうと思った。	応えることが難しい／親とか、兄弟にとっても答えようがない／私もそう思うと思う／向こうとして困るだろうな、と思った。	親とか、兄弟にとっても答えようがない／私もそう思うと思う／向こうとして困るだろうな、と思った。
230	B	やっぱり向こうは仕事としてしてるよなあって言われるよな。まあ、中には本当に優しく親身になってくださる方もいらっやるんですよ。自分の親みたいな気持ちでとか、だけん、やっぱり仕事という感じですよ。	向こう／仕事としてしてるよなあって言われるよな／中には本当に優しく親身になってくださる方もいらっやるんですよ	仕事と割り切っている感じがする／親身になってくれる人もいる	ケアへの向き合い方／仕事と割り切るか／親身になるか	ケアへの向き合い方が、仕事と割り切る人も親身になる人も
238	A	うーん、そうですね、それもあるけど、やっぱりそこまでは、やっぱり人数が向こうは多いから、私だって同じじゃないですか、だからみんなにそれをしてたら、つぶれていくって、その、あるから分らないけど。	やっぱり人数が向こうは多いから／みんなにそれをしてたら、つぶれていく	ケアする相手の数が多いから／一人ひとりの気持ちに寄り添ってたらつぶれてしまう	施設職員の事情への理解	望みすぎるとつぶれていってしまうかもしれない
248	B	何か何もなく、電話もない、もうしようかと思っても、ああ、向こうも大変ななと思った、やめとこう思ったのよ。何か、どんどん悪いように考えたりするじゃないですか。あ、このまんまやたらいかん、うつになりそうと思うときは、やっぱり、あ、散歩行こうと思うとき、散歩行ったりするんですよ。	電話もない／しようかと思っても、向こうも大変ななと思った、やめとこう思ったのよ／どんどん悪いように考えたりする／うつになりそう／散歩行ったりする	孤独／憂鬱な気持ち／散歩/気分転換	相談相手がない場合／孤独感／気分転換	一人でないと憂鬱になる／散歩/気分転換をする／出会った人と話を
252	B	うわー、どうやろって思うときも、だけんやっぱりそこで気分転換、やっぱり何かしなきゃいけんと思うと、やっぱり全てきつとストレスで、甘い物ばかり食べよ。うん、こー、なりやすいかも分らない。そううときお茶飲んで、甘い物食べよって、私なんかすぐそうなんですよ。お酒なんか飲めんで、そうしたらこんなんばかみたいに大きいよ。	気分転換／何かしなきゃいけんと思うと、やっぱり全てきつとストレスで、甘い物ばかり食べよ。うん、こー、なりやすいかも分らない。そううときお茶飲んで、甘い物食べよって、私なんかすぐそうなんですよ。	ストレス／気持ちが落ち込むとき／甘いもの食べる／自分で気分を変えられない	孤立／自分で立ち直るしかない／こー(体重が増える)、なりやすい	気持ちが落ち込むとき／甘いものを食べる／自分で立ち直る
256	B	うん、お互いにね。そうやっけもう大概みんなそんな感じやから、いつかいいいよって言うし、向こうからかけてもいいよって、私も言うし。だけん、ちょっと熱が出て、「入院したって、もう私、落ち込んだ、どうしていいか分からないって、やっぱり日頃がこう、今のところ悪いけど、穏やかにして、「急にそんなだから、どうしていいか分からない」って、本当にかけてきたりするから、それで戻ってきたり、退院すると、けろっとするけど、こーこれが嬉しいんですよ。	お互いに／いつかいいいよって言うし、向こうからかけてもいいよって、私も言うし。だけん、ちょっと熱が出て、「入院したって、もう私、落ち込んだ、どうしていいか分からない」って、やっぱり日頃がこう、今のところ悪いけど、穏やかにして、「急にそんなだから、どうしていいか分からない」って、本当にかけてきたりするから、それで戻ってきたり、退院すると、けろっとするけど、こーこれが嬉しいんですよ。	憂鬱になる事情や葛藤／家族会の仲間同士／分かってくれる／優先して聞いてくれる	(認知し)悪いけど、(過ごし方)程や／これ(手や上下)に波を表して)が嬉しい	ちょっとしたことでも、気持ちの揺らぎが激しい／憂鬱になると電話をする／家族会の仲間／分かってくれる／優先して聞いてくれる
329	B	うん、そう、私も何となくそんな、何かやっぱり普通に何でも嫌って思うことでもあった、聞けたら、そっちが気楽なな。あ、そうですね、そうですね、もう聞けたら何と言わん、そうね、そうねって聞いたたら、やっぱり言ってる人にも、何かこう、言ってほしいときもあるじゃないですか、ちょっと強くて優しくも、やけん、強く言ったらかかんかなと思て、「いや、そういうことするよ」とか言っても、言われても、何ていうことかはよく優しい気持ちも返ってくるから、お互い信頼関係ですね。	もう聞けたら何と言わん／そうね、そうねって聞いたたら／言ってる人にも、何かこう、言ってほしいときもある／優しくも強くて優しくも／お互い／信頼関係	気を遣わずに話せる関係／よく電話をかけるあつた／強くも優しくも率直に言い合える／優しい気持ちが返ってくる／お互いの信頼関係	気を遣わない関係性／率直に言い合える関係性／信頼関係	いつも気を遣わずに話せる関係／よく電話をかけるあつた／強くも優しくも率直に言い合える／優しい気持ちが返ってくる

ストーリーライン

認知症の家族会の友人は、共通の経験を重ねてくれ、気持ちをわかってくれる。だから、また話が弾み、ずっと話していたくなる。聞いてもらううちに、気持ちが落ち着く。

医師は医師の立場で言わないといけないから、気持ちの支えを求めることは難しい。ケアマネなど専門職には打ち明けにくい。多忙で、子どもぐらいの年齢の介護職もいるので、家族介護者や本人の高齢者の気持ちをわかるのは難しいだろうし、ケアへの向き合い方が仕事と割り切っている人もいる。中には親身なってくれる人もいるけど、望みすぎるとつぶれていってしまうかもしれない。表出困難な人を大切にしてほしいと思って、踏み込んで言い過ぎたら、もし誤解があったら、本人に仕返しされるかもしれない。

子どもに言えば、心配させてしまう。心配させたくないの、本心の3・4割まででとどめている。本当の気持ちは言えない。親とか、兄弟にとっても答えようがない、「どう言っても良いかわからない」と言われた。それは、私もそうだろうなと思うし、向こうとしても困るだろうな、と思った。同じような体験のない人も、「大変ね」「無理したらいかんよ」と表面的には分かってくれるけど、共感を求めることは難しいだろうとも感じている。地域の人も気にかけてくれる気持ちはありがたいけど、家族介護者としてもそれ以上を求めてもいけない気がする。

日頃、穏やかにしても、入退院したり、ちょっとしたことでも、気持ちの揺らぎが激しい。気持ちが落ち込むとき、一人でいると鬱になりそうになる。散歩をして出会った人と話をする、甘いもの食べることで気分転換して自分で立ち直る努力をするしかない。

憂鬱になると電話をする。家族会の仲間は事情や葛藤をよく分かってくれるし、優先して聞いてくれる。電話をかけあえる友人の存在が一番安心する。家族会の仲間はいつでも気を遣わずに話せる関係で、よく電話をかけあう。強くも優しくも率直に言い合えるし、優しい気持ちが返ってくる。忙しい人とか気を遣う人には難しい。

理論記述

家族会の友人は、共通の経験を重ねて理解してくれる。

専門職にはそれぞれの立場があり、多忙であるため打ち明けにくい。

実際の経験に重ねられない人に共感を求めることは難しいので、家族介護者もそれ以上を求めてもいけない気がする。

いつでも気を遣わずに話せる関係で、電話をかけあえる友人の存在が一番安心する。

地域の人は、それぞれの距離間で気にかけてくれる。

出来ることがあると希望をもつ事ができた。

体調不良になるほど思いつめて、ひどくつらい時もあったが、その時は、開き直って頑張るしかない状況だったので、自力で立ち直った。自分が倒れたら子どもに迷惑をかける
という思いもあった。

最初の2年ぐらいは、急変についての不安は強かった。一人でケアをする時期、本人を一人にしておくのは不安で、わからないことがあるとさらに不安がつのった。そういうとき、医師の軽く言う「大丈夫」と、一番支えになった姉が言う「大丈夫」は違った。看護師、医師に「大丈夫ですよ」って言われると、突き放された感覚でもう次の言葉が言えない。つらいねとか、すごいねとか、ありきたりな励ましは、かえって、戸惑った。

対して、一番支えになってくれた姉は、ピリピリした気持ちを察して、一つひとつの不安に丁寧に応える態度で「大丈夫、大丈夫」と、納得いくまで聞いてくれた。聞いてもらうという中で、話すうちに気持ちが整理されていき、納得して向き合えるようになった。

つらいときに思わず涙して、ケアマネに本音を漏らしたら、「皆さんそうですよ」という言葉で懸命な状況を軽視されたように感じ、ひどく傷ついた。私の聞きたいことはそういうことじゃない。それ以降、ケアマネには強い不信感があり、一切打ち明けない。

初対面の方は、表面的な経緯を話しなかなければならないので時間がかかるし、大切な感情の話までいかない。長期的な関係がある人は、経緯を説明しなくて良いので、その都度話して、わかってくれる。地域の方は知っているけど、表面的な距離感で知っている程度、本音で付き合おうとすると疲れてしまう。

理論記述

ケアを始めた初期の葛藤は、急変時の対応など知識的な不安感を整理することで、家族介護者にできることに向き合うことができた。

体調不良になるほど思い詰めることもあったが、開き直って頑張るしかない状況だった。

医師やケアマネなどの専門職の「大丈夫」は、懸命な状況を軽視されたように感じ、ひどく傷ついた。

納得いくまで聞いてくれる人の「大丈夫」という言葉は温かく、話すうちに気持ちが整理されていき、納得して向き合えるようになった。

打ち明けて話すには継続的な関係が必要であり、多数の人に対し、本音で付き合おうとすると疲れてしまうし、誤解して取られるのも怖い。

(4) D の調査結果

分析過程

図 4-10 SCAT による分析 2-D

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき箇所	<2>テキスト中の箇句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)
103	D	運命だと。お友達、本当に信頼しているお友達がね、「〇ちゃんはね、選ばれたのよ」って、そうねえって、そういわれるとね、私も誇りをもって、ちゃんと主人の傍にね、最後までおられるなあつて。	本当に信頼 / お友達 / 私も誇りをもって / 最後まで	信頼している友人の応援 / 前向きにケアできる	親友 / 相談 / 自信	心から信頼できる人 / 相談や応援 / 大きな励まし
105	D	そうですね、あの、その友達は、私と主人を結んでくれた、同じ、主人と同じ大学の5年後輩で、(出身地域)です。弟分と思ってあったんですよ、主人はその人のことを。私はその人とは、小学校の時から幼馴染で。5年後輩だから、5つ年下です。主人から言えば5つ年下で。	私と主人を結んでくれた / 弟分主人 / 小学校の時から幼馴染 / 主人から言えば5つ年下	小学校からの幼馴染 / 同郷 / 本人の事もよく知っている	共通の友人	小学校からの幼馴染 / 本人の事もよく知っている
118	D	ああ、そういう、先生が職をたられて、あの、奥様が先にそこも亡くなられたものだから、弟分だった私の友人が介護するようになった。もう、お家に入って、毎日介護して、だから、そういうお話しは、介護者同士の話し合いはよくしましたね。	奥様が先に / 亡くなられた / 私の友人 / 毎日 / そういうお話し / 介護者同士 / 話し合いはよくしました	介護経験者同士 / よく相談した	介護相談	介護経験のある友人 / 介護相談もしていた
119	D	もう一人はね、お友達、その人もわかってくださるんですけども、メキシコ人。あの、主人の弟子で、若いころからのお付き合いで、奥様が日本人で、今のところに、施設にも1か月に1回は面会に来てくださったり。	お友達 / わかってくださる / メキシコ人 / 若いころからの付き合い / 奥様が日本人 / 1か月に1回は面会に来て	メキシコ人の友人 / 長期的な関係 / 理解ある人 / 継続的な面会	本人の友人	よく理解してくれる / 長期的 / 面会もきてくれる
127	D	はい、それがありますね。あの、すべての事ひとりで、決めないといけないわけですよ。大事なことです。だから、それがとてもプレッシャーにもなっていました。	すべての事 / ひどりで、決めないといけない / 大事なこと / プレッシャー	生活 / お金 / 治療 / 決断が迫られる / 責任	本人が担ってきた役割 / 二人分の決断	全ての事を一人で決断するプレッシャー
128	D	あの、今は少しはもう、しかたない、なるようにしかならないと思わなきゃと思ってるんですけども、あの、なんかねー、それが、きついですね。	今は / 少しは / しかたない / なるように / しかたない / 思わなきゃと思ってる / きつい	今となつては / 慣れてきた / 受け入れてきた	決断のプレッシャー / かなが慣れないつらさ	今となつては少し慣れてきた / 今でもつらい
129	D	こんな大事なことを私が決めていいのかしらと思うようなことで、決めていかなきゃいけないわけですよ。	大事なこと / 決めていかなきゃいけない	Dには判断しにくい事柄 / 決断が迫られる	Dの力量を越えた決断 / 先延ばしできない	Dでは判断できないほどの決断 / 決断が迫られる
131	D	そんなことはないですね、いや、行けばなんか本当に、スーツと入っていき、その中に、はい、だから、私もなるべく行くことは思ってる。日曜日でしたもんね。今月はあるんですけどもね。	そんなことはない / 行けば / スーツと入っていき / 思ってる	相談しにくいことは / 自然に / 打ち解けられる / 行くべきだと思う	家族会の支え / かなが行けない	家族会に行けば相談できる / 最近あまり行っていない
175	D	それがね、リハビリのおかげなんですよ、きつとね、うちにも来てくれますし、向こうにも来てくれるリハビリの人がいるんですけど、先生がね。一週間に2回。	リハビリのおかげ / うちにも来て / 向こうにも来て / リハビリの人 / 一週間に2回	自宅と施設に来る / 同じリハビリの人 / 回復の兆し	リハビリの人への信頼 / 同じ人がつく	週2回のリハビリ / 回復の兆し
182	D	だから、ただ笑顔だけじゃなくて、自分の機能もね、残されてる機能をね、もっと上げられると思ってるんですよ。	笑顔だけじゃなく / 残されてる機能 / もっと上げられる	心だけじゃなく / 残された生きる力 / 回復への期待	元気になってほしい	笑顔だけではなく / 生きる力も残している / わずかでも回復してほしい
184	D	腹も立ちましたし、まあ、それはね、施設にとつてみたら、危ないと思うかもしれないし、だけど、病氣だからあきらめろって、どんな病氣の人の、家族の人にも絶対言っではいけないことですよ。それも言われたから、もう、どっか良いところがあったら。	腹も立ちました / 施設にとつて / 危ない / 病氣だからあきらめろ / どんな病氣 / 絶対言っではいけない / どのくらい良いところ	施設の危機意識 / 回復への期待の否定 / 強い憤り / 施設ケアへの決別	家族への理解 / 施設の判断の押し付け / ほどにひどく憤慨した	回復への期待の否定 / 施設ケアへの決別
187	D	だけど、良い時をどんどん増やしていけば、その、根本的には治らない病氣でも、もうちょっと質のある生活をね、家でできるならね、そうしようかなと思ってます。まあ、色んな人の在宅ケアで、手を、力を借りたいと思って、その段取りをしてるところです。	良い時 / どんどん増やして / 根本的には治らない病氣 / 質のある生活 / 家でできるなら / 色んな人 / 手を、力を借りたい	根治出来なくても / 生活の質 / 自宅での生活 / 色んな人の力を借りて	在宅ケアへの転換 / 穏やかな時間の拡大	根本的な回復は難しくとも / 在宅ケアで生活の質をあげられる

ストーリーライン

小学校からの幼馴染で、本人の事もよく知っている友人は心から信頼できる人で、その相談や応援は大きな励ましになっていた。介護経験のある友人も、よく理解してくれる。長期的に、よく面会もきてくれるので介護の相談もしていた。家族会に行けば相談できるが、最近あまり行っていない。

Dでは判断できないほどの決断などであっても、決断が迫られる。全ての事を一人で決断するプレッシャーが辛い。今となつては少し慣れてきたが、今でもつらい時がある。

週2回のリハビリで、最近では回復の兆しもみられる。本人はまだ生きる力も残しており、笑顔だけではなく、わずかでも回復してほしいと願う気持ちはある。

施設の職員から、回復への期待を否定されたときは、施設ケアへの決別を考えるほどに憤慨した。根本的な回復は難しくとも、在宅ケアで生活の質をあげられることはしたい。

理論記述

本人の事もよく知っている幼馴染の友人は相談や応援をしてくれて、支えになった。

全ての事を一人で決断するプレッシャーは、少し慣れても、つらい時がある。

根本的な回復は難しくとも、本人はまだ生きる力も残している。

回復への期待を否定された時には憤慨した。

(5) E の調査結果

分析過程

図 4-11 SCAT による分析 1-E

番号	発話者	テキスト	①) テキスト中の注目すべき箇所	②) テキスト中の箇句の言いかえ	③) 左を説明するようなテキスト外の観念	④) テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
38	E	で、同居しとるからですね。向こうの方から帰ってくるわけですよ。で、要するに、娘の産後ですから、まだ体調が完全に戻ららん、体力がですね。普通の家ならば、食事の世話から、風呂とか、その世話しますよね。それを一切できんのやけん、お客さんのようにじーっと座ってるんですよ。	娘の産後 / 普通の家なら / 食事 / 風呂 / 世話しますよね / 一切できん / お客さんのように / じーっと座るとる	普通の家庭ですること / 産後の子の世話 / 一切できない状況 / 無関心のように見える	産後ケアの期待 / 応えられない妻の状態で娘から見た妻の様子	娘は産後ケアを期待 / 身の回りのこともできない本人の様子 / やり場のないストレス
98	E	本人のことがやけど、二人してから、まあ一番あの、私がさっき言いました娘。出産後の、産後のことに対する対応が全然できとらんやっただということが、家族としては、最大の失敗やっただかなと。	一番 / 娘 / 出産後 / 対応 / 全然できとらんやっただ / 家族として / 最大の失敗	娘への配慮 / 十分にできなかった / 最大の後悔	妻への対応 / 一杯 / 限界	家族全体として、大きな失敗を感じている。
124	E	疲れたというのは、あんまりないけど、やっぱり、そりゃ、気持ち的に楽しいことはなかったんですけど。疲れたって言うよりか、こちらの余裕、どうかなりそうっていうのはなかったですね。幸いにして。	楽しいことはなかった / どうかなりそう / っていうのはなかった	暗い気持ち / 極端な疲労ではない / 余裕のなさ / 運よく	目的 / 余裕のなさ / 極端な疲労はなかった / たまたま	極端なつらさは回避できて / 暗い気持ちが続いていた
125	E	というのは、あの、今でも、定年後のですね、会社時代にとった、電気の関係の資格をとるんですよ。それで、電気管理保安事業っていうんですけど、それでちよい出ていく機会も、毎日じゃないですけどね。そういう事で、出かけていく機会もあるし、まあ、気がまぎれるということはあるですね。	定年後 / 電気の関係の資格 / 電気管理保安事業 / ちよい出ていく / 機会 / 気がまぎれる	ケアの日常 / 外出の機会 / 定期的	極端な疲労を回避 / 気分転換 / ケアから離れる時間	仕事を続けたいこと / ケアから離れる機会 / 気分転換 / 人になっていた
128	E	隣近所の人と話すこと、町内会長しとる立場で、立ち話することもありますが、あんまりこつ、話すことはない、だれかといえずたいね。あんまり、話、長話になると嫌がられるですすたいね。	隣近所の人と話す / 町内会長しとる立場 / 立ち話 / 話すことはない / だれかといえずたいね / 長話になると嫌がられる	地域の人 / 表面的な話 / 短時間のできる話	地域の人との距離感	地域の人 / 表面的な話 / 話しかけない
130	E	いった先ではそりゃ、あの、悩みっちゃうか、実は家内がそげんかつります、とポロっと言うことはあります。結局、言った方が、突発的なトラブルの時に対応が、全然言わんより、そういう事情があるっていう事は、知ってもらった方が良いでしょう。	悩み / 実は / 家内がそげんかつります / ポロっと言う / 突発的なトラブルの時に / 対応が / 全然言わんより / 知ってもらった方が / 良い	実情 / もらす / 不慮のトラブル / 迷惑をかける / 協力への期待	事情の説明 / トラブル回避	トラブル回避 / 事情を説明する
132	D	そうですね、あの(家族会)。Oさんがまあ、むこうから、Oさんが色んな話をしようから言うて、それでは皆さん、順番でもないけど、話はないですかって言うて。	色んな話 / 皆さん / 順番 / 話はない / ですか	家族会 / 平等な発言の機会	受動的な打ち明け	家族会では、受動的に打ち明ける機会がある。
133	E	近況報告したり、こういう事で困ってるっていうと、それに対して、知らんやっただことが結構あったりして、参考になった分はありますけどですね。	近況報告 / 困ってる / それに対して / 知らんやっただこと / 結構あったり / 参考になった	新しい情報 / 知識 / 助かる	的確なアドバイス	近況報告 / 的確なアドバイス / 情報 / 参考になった
134	E	他人の方が、いろいろと、ご主人とか奥さん、対応で苦労して、非常に一生懸命しとるなど、言う考えがあつたけど。そういう事からいうと、私、あんまり、こまごまとしたことはできとらんと思うんですけどね。特別、不自由なことはさせとらんと思ってますけどね。	他人の方が / 対応で苦労 / 非常に一生懸命しとる / そういう事からいうと / こまごまとしたことは / できとらん	他の出席者 / 懸命な思い / ケアの質の比較 / 出来ることはした	余裕のなさ / 情緒的 / 自分なりのケアの客観視。	他の会員の打ち明ける聞いて / 自分なりのケアを客観視
139	E	こちから積極的に隣近所に言うてるわけじゃないけど、家内がこういう風になって、デイサービスに行きよるって、言ってみてないけど、やっぱり、皆さんがそういう姿見たりして。	こちから / 積極的に / 隣近所に / 言うてるわけ / じゃない / 皆さんが / そういう姿見たり	自発的 / 自分からは言えない / 自然に理解してくれる	隠しようがない	自発的に打ち明けることに / 抵抗感
145	E	もちろん、言うてもらったほうが、こちも気楽になるですすたい。カコつける気持ちは気持ちはないけど、こちから次から次に言うてまわる必要もないけんですね。	もちろん / 言うてもらったほうが / 気楽 / 次から次に / 言うてまわる / 必要もない	受動的 / 聞いてくれた方が / 話しやすい / 自分からは / 言えない	自分から言えば / 受動的に打ち明けるほうが / 話しやすかった。	
148	E	なんか、時々、家庭訪問じゃないけど、きてから、ケアマネの方から色々、悩みごとじゃないけど、余話はいりましたね。	時々 / ケアマネ / 色々 / 悩みごと / じゃない / 余話 / いりましたね	悩み事ではない / 表面的な余話	相談の場にはない	ケアマネへの相談は表面的なものだった
149	E	今、むこうに、施設に入っしもうとるから、あの、こちが、そうですね、月に3回4回ぐらい、顔見よりいきよりますけど、そんな時に責任者の方がおれば、立ち話しますけど。なんて言うのかな。やっぱり、忙しかすすたい。施設もなんかねえ、人手不足なんですよ。結構右往左往、右往左往。	施設に入っしもうとるから / 月に3回4回 / 顔見より / 責任者 / 立ち話 / 忙しかすすたい / 人手不足 / 右往左往	施設入所 / 見舞い / 会いに行く / 支援者 / 落ち着いて話せない	専門職は話を聞いてくれる様子ではない / 忙しかすすたい / 忙しさのため	専門職は話を聞いてくれる様子ではない / 忙しさのため / 忙しさのため
218	E	ん、でしょうね。何とも言いますけど、その悪いタイミングで、孫生まれたとき、事後の対応が、産後の対応がそんなんやっただけん、家内に対して、良い感情もつとらんやっただけん、なんとか自力で乗り越えらっしゃったすすたい。それを私が気が付かんやっただけん、	何とも言います / 産後の対応 / 良い感情もつとらん / 自力で乗り越え / 私 / 気が付かんやっただけん	頭から離れない / 妻が求められた / 親としての務め / 娘との不仲 / 取り返しがつかない	家庭内のわだかまり / 十分に対応できなかった後悔	孫の誕生が重なって / 家庭内の不仲 / 娘から妻へのわだかまり / ケアの後悔

ストーリーライン

本人の病状の進行に、孫の誕生が重なってしまったことで、家庭内の不和が生じた。産後ケアを期待して帰省した娘は、認知症で自身の身の回りのこともできない本人の様子に、やり場のないストレスを抱えていた。家族全体として、大きな失敗を感じている。特に、娘から妻へのわだかまりが残ったことは、ケアの後悔となった。

仕事を続けていたことが、ケアから離れる機会となり、気分転換になっていた。極端なつらさは回避できていたものの、暗い気持ちが続いていた。

地域の人とは、トラブル回避もかねて事情を説明することはあるが、表面的な話しかしない。詳しい状況については、自発的に打ち明けることに抵抗感があり、かえって聞かれて受動的に打ち明けるほうが話しやすかった。その点、家族会では、受動的に打ち明ける機会がある。また、近況報告に対しては、的確なアドバイスや情報があり、他の会員の打ち明ける聞いては、自分なりのケアを客観視して、参考となった。

一方、ケアマネへの相談は表面的なものだった。多忙さのためか、専門職は話を聞いてくれる様子ではないという印象である。

理論記述

本人の介護に、他の生活課題が重なる場合、家庭内の不和が生じた。

仕事を続けていたことが、気分転換になっていたが、暗い気持ちが続いていた。

自発的に打ち明けることには抵抗、受動的に打ち明けるほうが話しやすかった。

専門職は話を聞いてくれる様子ではない、相談は表面的なものだった。

5. 第2調査の小括

(1) 推察による負担の内容

家族介護者は、介護の方法、制度、治療の可能性などの知識的な不安が整理されると、大切な存在を失いゆく不安感へと向き合うこととなる。ケアを始めた初期には、この両面が混在した葛藤を抱えやすく、書籍や専門職から得られる知識に安心を感じることもあれば、表面的な回答をされたと、かえって不信感を抱いて負担となることもある（A氏、B氏、C氏）。

家族介護者にとって、こうした葛藤を他者に打ち明けること自体が、負担をともしうものである。そのため、期待した対応が得られない場合には、以降の打ち明けを避けるようになり、家族介護者の推察の負担は支援から孤立していくことがある（A氏、C氏）。また、推察が必要な判断に追い付かないうちから、多様な判断や役割を次々と求められることは、家族介護者にとって「一人で決断する」ことであり、家族介護者は孤立感を示して負担を訴えていた（D氏）。

特に、回答のない悩みは一番大きい課題として、身体的な不調となるほど深刻さを増し、思い詰めるにしたがって、「開き直ってやるしかない」という気持ちになることがある（A氏、C氏）。覚悟は、強さでもあるが、この一生懸命、ギリギリで向き合っているときには、うまくいかない出来事によって、限界を迎える危険な状態とも思われる（A氏）。

(2) 対等な関係による支援

家族介護者は、専門職などへの相談の際、特に初対面においては、自分の感情は省略して客観的な経緯ばかりを説明することとなる（C氏）。しかし、負担の中において、そうした説明やありきたりな返答が繰り返されることは、ミスマッチな支援となってしまうなど、専門職に対する信頼の低下をまねいてしまうことがある（A氏、C氏、E氏）。

対して、旧知の友人や家族会の友人などは、家族介護者の経緯を継続的に共有しており、負担や葛藤について、直観をそのまま打ち明けることができる。そのため、相談先として信頼されていた人物は、友人や兄弟姉妹という対等な立場であった。特に、いつでも気兼ねなく連絡できる対等な関係や態度は重要とされた（A氏、B氏、C氏）。また、家族介護者の葛藤の内容についても、自分事として似た経験や境遇から理解してくれることも、直感的な理解や受容のために重要とされた（B氏、C氏）。仕事上の友人も同様に、双

方に負担のない程度の自然な関係は、一時的な負担感の軽減や回避には重要な役割を示していた (E 氏)。

こうした関りを、形式知として具体的な支援内容に示しにくい要因として、同じ支援内容であっても、態度や関係によっては効果に大きな違いが生じることが挙げられる。医師や専門職などの「大丈夫」という言葉には、家族介護者の打ち明けたい思いを塞ぎ込ませる力があること、また、同じ「大丈夫」という言葉であっても、親身に聞いてくれる支援者の言葉には、家族介護者の自信を引き出し、安心感を満たす力があることが語りからも示されていた (C 氏、D 氏)。

家族介護者が抱く回復への希望には、根本的な治癒とは限らず、本人の Well-Being を追求したいという思いが混在することもある (D 氏)。また、本人の表出困難な意思を、直感的にとらえていることから、家族介護者自身も意思の表出しにくさを抱えている可能性がある。これらのことから、形式的なアセスメントはかえって、家族介護者を孤立へと追い込む危険性を有しているため、継続的な信頼関係を想定した誠意ある態度が必要と思われる。

一方、近い関係としての親子においては、子に負担や葛藤を打ち明けることについて、家族介護者は親としての立場から、避ける傾向があった (A 氏、B 氏、E 氏)。こうした抑制には、わが国における「子どもに負担や心配をかけたくない」という親子関係が少なからず影響しているものと思われる。すなわち、親として、子としての関係性を、介護生活以前の延長線上に維持しようとする働きと思われる。

また、地域の人という関係性においては、地域の多様性によって程度はあっても公の関係性をおびるものであり、地域の人と言うだけでは打ち明ける対象とはなりにくいことがわかった。しかし、地域のという連帯の中で、遠巻きに心配している思いは実感されており、家族介護者側からも感謝の思いが述べられていた (B 氏、C 氏、E 氏)。

家族会などはピアという前提があることで、経緯や事情についての違いはあっても、体験的な理解から共感でき、家族介護者が求めているものへの共感や助言が期待できる。また、事実ばかりを事細かに説明することなく、葛藤の中核や感情について直接話ができる (B 氏)。また、お互いが支援者として話を聞く側である点では、一方的に受容してもらっただけの関係ではなく、気兼ねのない対等な関係となることが期待できる (A 氏、B 氏)。また、家族介護者の側から負担などを自発的に打ち明けることには抵抗があることもあり、聞いてくれる方が打ち明けやすいという側面もある (E 氏)。

6. 第1研究の考察

(1) 推察の循環的成熟

第一研究では、家族介護者が表出困難な意思を捉える際の視点や特性について、特に、先行研究の課題から直感的に捉える次元を明らかにすることを目的としている。第一調査からは、家族介護者の推察について、直感的に捉える視点が共通して強く示されたが、その内実は本人と家族が喜びや苦難を共にしてきた蓄積に支えられたものであった。

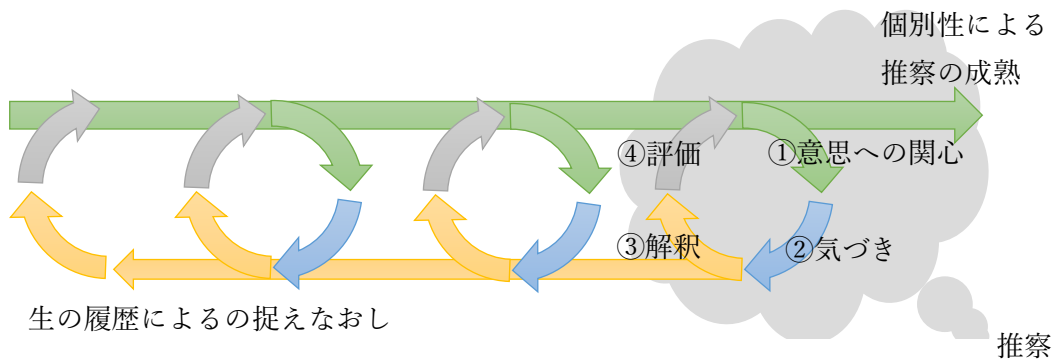
家族介護者による表出困難な意思の推察には、日々新鮮に関心を向け、繰り返し捉えなおそうとする対話的な継続性があるため、一般化しうる方法や技術というよりも、関係性の成熟を要する傾向にある。その繰り返しについて、4つの段階に分けて整理を試みる。

第1に、表出困難な意思に対する関心を高い状態に保っていること、第2に、微細な表出や変化から意思の変化に気づくこと、第3に、その意思の強さや内容などについて、対話や具体的な解釈を試みること、第4に、その解釈が妥当であったかを確認しようと評価し再び関心を高めること、の4つの段階である。さらにその4つの段階は、さらに個別的次元において精度を高めようと循環的に繰り返され、成熟し、蓄積される。この視点について、それぞれのインタビューの理論記述から関係する記述を次の図の通り整理した。

図 4-12 推察をめぐる理論記述の整理

4-1	A	B	D	E
関心・関係	共に過ごす介護生活や経験から、自然な関係性や思いやる余裕が戻ってきた。	共に暮らしてきた家族だからわかることを実感している。	施設職員は穏やかな状態と捉え、家族には物悲しそうな状態に思えるなど、捉え方が違う時がある	認知症の進行によって表出がなくなったが、孤独に対する恐怖は残っていると感じる。
気づき	心の余裕ができるにしたがって、微細な表出から本人の意思に気づくようになった。	家族介護者は、本人の微細な表情や雰囲気の変化に、直感的に気づくことができる。	表情や肌に触れることなどで微細な表出に気づき、本人にとっての幸せな状態などを感じることができる。	表情もなく宙を見たままと、意思を感じることはできなくなった。
解釈	推察では、本人らしさの理解や家族の共有する思い出など、共に生きてきた土台のよなものが必要となる。	本人の思い、悔しさについて、本人らしさや思い出から推察して、一緒につらい思いを共有する	本人の不安や葛藤の痕跡や本人が過去に書き残したものから、今では表出できなくなった考え方や本人らしさを感じることができる。	表出できない意思があると期待するが、客観的な絶望に打ち消されてしまう。
観察・評価 関心への循環	本人と介護者は鏡のような関係となり、意思は二人の間で直感的に共有されることがある。	表出が曖昧なときは、対話的に歩み寄り、本人の反応を見ながら確認する。	ケアの中に本当の幸せを見出し、二人で共有することで、ケアに向き合う力になっている。	今の妻の思いに応えるというよりも、少しでも良い生活となるよう、ケアを模索している

図 4-13 推察の循環に関する図



家族介護者による意思の推察は、知識、情報、思考などに先立って、直感的に、より微細な変化に対する気づきを得ている点にある。気づきを生む蓄積として、短期的長期的に関わらず生活のさまざまな状況に、表出困難な意思があることへの関心が必要となる。

逆に、家族介護者に余裕がなく、あるいは客観的な確からしさにさらされ、本人の表出困難な意思への関心が保ちにくくなる時には、①や②が弱化され、確かめるすべのなさやその不安から③が弱化され、うまくいかない関りや自信の喪失から④が弱化される可能性も示唆された。

(2) 家族介護者の負担に対する支援の視点

表出困難な意思の尊重における推察の循環は、計画や知識に基づくものではなく、根拠や確信のないままの直感によって支えられた営みである。推察はときに妨げられあるいは励まされながら、負担や喜びとともに繰り返される。

特に、本人の病状や暮らしが変化し、家族介護者の心身に負担が生じやすい時期において、客観性に照らした説明を繰り返し強いることや、意思の不在を突きつけるような医学的、客観的情報は、家族介護者にさらに強い負担を与える危険性が高い。また、客観性や専門性にのみ従い、表出困難な意思を尊重しない場合、誠意がないと評価が低くなることもあるようだ。そのため、家族介護者の主観的、直感的な気づきや解釈を尊重した上で、一側面の情報として丁寧に伝える必要があるだろう。

家族介護者の推察は、本人の意思への関心や生の履歴の共有が重要となるため、葛藤に対して他者から有効な助言が与えられることは少ない。しかし、表出困難な意思を直感的に捉える体験に生じる負担感や喜びへの共感、家族会などを中心に励みとなることがある。

家族介護者は自分にしかわかりえない共感や直感があることを受け入れるにしたがつて、専門職が専門職として、地域の他者が地域の他者として、自分とは異なる視点を持っていることについても受け入れるようになる。

(3) 家族介護者の推察による意思の尊重への示唆

推察の循環と負担は、家族介護者の直感的な気づきや解釈の循環を基本として、支援者などから得られる客観的情報や助言が時に救いとなり、時に負担となる。主観と客観の間の揺らぐとき、負担が生じやすいことが分かった。

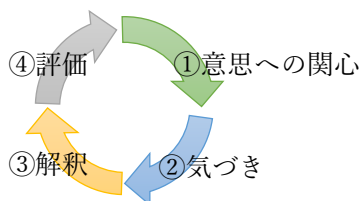
その視点から、SCAT中の口頭データの該当箇所を抽出すると、下記の通り、3つの類型に整理することが出来る。

・個別性循環型の推察

家族介護者の推察において、最も基本的な循環であり、この循環が妨げなく繰り返されるほど、安定した推察であると思われる。

A氏が、「何か、こっちが思うやろ。っていうのは、言わなくてもなんとなく。本人に関するものがなんかあるかなっていうので、思うんやない。いっぱいある中で、指さしとって、こうしよっていうたら、あ、コップ取りたいのかなとか。」と述べ、関心を持って関わり、本人の微細な仕草を指さしであることに気づき、その生活の文脈や習慣などから、コップを触りたいという意思を解釈している過程が表れている。また、「ちゃんと意思疎通が出来ないときもあるけど、これねて想像して持って行くぎ、それでいいと言うしね。」と、試行錯誤の解釈について、本人の意思とまったく違うのか、あるいは、おおよそ沿っているのかをうかがいながら、家族介護者の主観的な判断に基づいて繰り返えされている。他のインタビューに同様の言葉があり、基本的な循環の型であると思われる。

図 4-14 個別性循環型の推察



・専門性分析型

意思の存在に気づきながらも、その内容の解釈に迷いがあったり、解釈した内容が、身体的な健康などの客観的なより良さとの比較において矛盾する場合などに、迷いや葛藤として生じる型。

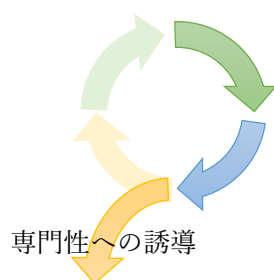
E氏が「ただ顔向けるっちゅうぐらいで、そいけん、何を見とるか、どうしたいのか、顔見てうれしかったとか、ものが感じ取れんですたいね。」と述べ、表出困難ながらも意思があるように気づいた一方、その内容の解釈には及ばない状況で、「なんか思うとる知らんけど、ひょっとしたらなんかあるかもわからんけど、脳の機能が本当、ほとんど真っ

黒なっとる、MRとったらですね。そいけん、あんまり、そういう意味じゃ可哀そうやけど、期待できんすたいね。」と、専門的な分析や情報へと誘導されていた。

専門的な情報が必ずしもネガティブではないものの、解釈、評価、さらなる関心という、家族介護者自身の主体的な推察の循環を想定すれば、その出来事においては循環から脱しているように思われた。

専門性を有する支援者が、家族介護者の推察による負担に対して支援する際は、個別性循環型の推察を十分に尊重し、専門性による分析や判断とは異なる意義があるものとして、丁寧に助言する必要がある。

図 4-15 専門性分析型の推察

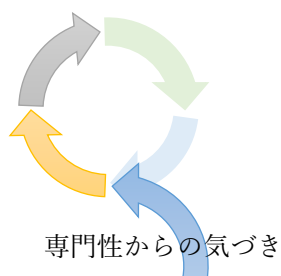


・専門性起点型

専門書からの知識や専門職からの助言など、一般化された知識から気づいたことが、生の履歴からの解釈に妥当して、本人のより良さも確認できる場合の型。あるいは、不安が強く意思の推察に向きにくい時、専門性のある立場から助言を受けて気づき、推察に自信を取り戻すこともある。

C氏が、看護師である姉から「今のままでも、私はそこまでせんでもいいと思うけどね」と助言されたことを受け、それまで多くの気を払っていた「もしも」の不安から脱し、安心感を得ることで、日常生活の推察や意思の尊重に向くようになっていた。

図 4-14 専門性起点型の推察



第5章 施設職員による意思の尊重に関する調査（第2研究）

1. 調査の目的と概要

(1) 調査の目的と概要

本調査の目的は、家族以外の介護者（施設職員）の特性について第1研究と同様に調査し、家族以外の介護者（施設職員）の特性を明らかにする。さらに、その特性によってもたらされるであろう疲弊や負担の実態についても明らかにし、支援策への示唆を得る。特性に関する調査を第3調査、負担や疲弊に関する調査を第4調査とした。

調査方法には、半構造化面接を用いた。倫理的配慮、調査への承諾確認、録音への同意確認の上、面接の内容をICレコーダーに録音する。音声記録は、逐語録として文字起こしを行ない、個人を特定できる情報などは伏せ字に置き換えることとする。

半構造化面接では、事前に研究の趣旨を説明し、日ごろのケアの経験から関連すると思われる話題を中心に、自由な語りを尊重して、面接を行なった。事前に用意した質問項目は、発話の促しと面接の方向付けのみにとどめ、柔軟な面接に努めた。

調査の対象は、在宅死を支えるケアに取り組む家族、および施設職員として、面接時間は1時間程度とした。調査対象者は次の5名であり、事前の説明を含む倫理的配慮は、後述の通り行なっている。J氏は、デイサービス（通所介護）を行なう施設の責任者であり、認知症に関する専門性、職務経験も豊かである。K氏は、小規模多機能型居宅介護を行なう施設の責任者であり、看取りや認知症に関する専門性、職務経験も豊かである。L氏は、グループホームを行なう施設の責任者であり、看取りや認知症に関する専門性、職務経験も豊かである。ただし、第4調査時点では転勤となっており、追跡不能であった。M氏は、老人ホームでの勤務を経て、面接時は障害者支援施設に責任者として勤務している。高齢者ケアの経験と、精神障がい者支援の経験を有している。N氏は、グループホームの責任者として、他の施設職員に目を配りながら実務を行っている。

図5-1 調査協力者の属性(2)

調査3 調査4

J	女性	介護職員	デイサービスの責任者	2015	2017
K	女性	介護職員	小規模多機能居宅介護支援事業所の責任者	2015	2017
L	女性	介護職員	グループホームの責任者	2015	
M	男性	介護職員	介護職に従事後、障がい者支援施設の責任者	2019	2019
N	男性	介護職員	グループホームの責任者	2019	2019

(2) 倫理的配慮

倫理的配慮については、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守している。また、調査の協力依頼、承諾の確認など、調査に関わる手続きは、西南学院大学大学院人間科学研究科の研究倫理委員会の承認を得て行なった。

(3) SCAT のエビデンスの見方

本文中に示された SCAT の分析の過程は、分析によって得た理論記述の妥当性や反証可能性を補っている。左からテキスト（インタビューの口頭データ）、〈1〉テキスト中の注目すべき語句 〈2〉テキスト中の語句の言い換え 〈3〉テキスト外の概念 〈4〉テーマ・構成概念となっている。

例えば理論記述中に違和感を持った場合、ストーリーライン中に根拠を探すことができる。ストーリーライン中に根拠を見いだせない場合、〈4〉テーマ・構成概念中に該当する内容を見つけ、インタビューの口頭データの解釈過程を確認することができる。

ストーリーライン中、テキストの分析によって導かれた構成概念にはアンダーラインをつけて分析過程との一貫性に配慮している。さらに、調査目的への関係性が高いストーリーラインについて、一般性、統一性、予見性などの理論を記述形式へと整理している。なお、理論記述は普遍的かつ一般的に通用する原理ではなく、このテキストの分析によって言えることを、端的で宣言的な表現として記述するものである（大谷 2019:324）。

なお、ストーリーラインは、インタビューの全口頭データから導かれるが、SCAT の特性を可能な限り担保するため、本文中にも分析過程の一部を抽出して記載する。抽出は、ストーリーラインの妥当性についての納得を導くため、重要と思われるデータを選定している。

2. 施設職員による意思の尊重に関する調査結果（第3調査）

(1) J氏の調査結果
分析過程

図5-2 SCATによる分析 1-J

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき箇所	<2>テキスト中の箇句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）
8	J	気づきのケアっていうかな、心の気づきのようなのがあって本当にこう、つらいような顔をしているとかあの、なんかこう、怒ってるような感じなんだけどかって、いっぱいあるんです、毎日ね。そういう中に職員がどう介入するかっていうので、その方が落ち着いたり、あの、興奮したりとやって、職員が気づきが相当大きいと思うのね。本人たちはどう訴えたいのかわかって言葉も発せない人が多いので、あの、だから、言葉が発せない人が、言葉見つけられなくて、言いたいのになんか言えなくてイライラしているとかあるの。	気づきのケア／心の気づき／職員の気づき／相当大きい／本人たちはどう訴えたいのかわかって言葉も発せない人が多い／言いたいのになんか言えなくてイライラしている	直感的／表出困難な意思／職員の気づき／表出できない葛藤	うまく言葉に出来ない気持ち／職員による共有	うまく表出できない気持ち／敏感に気付くことが重要／気づきのケア
24	J	そうそう、当たりをつけるっていうか、うん、そうじゃないのかなって、予測する。だから、予測って言うのは、とても重要よね。予測したり、本人がこう、例えば、まあ、それは、その、それで一応解決したの	当たりをつける／予測は、とても重要	本人の表出困難な気持ち／予測	家族から聞いた本人らしき／職員による気づき／予測	本人の表出困難な意思／予測／解釈していく
26	J	やっぱり、経験だと思う。経験というか、本人の思いをどう受け止めるようになるかという、職員のスキル、の、あの、ものだと思うのね。今入ってきたばかりの職員が、そんなことが出来るかという、思い、描けない。でも、ずーっと触れ合っていると、その人なりの人生とか、全部聞かなくていいですか、コミュニケーションとかしながら、だから、こう、だんだんこの人の、その、怒りっぽいのか、なんなのかっていうのが全部わかってるので、だからやっぱり、ある程度の年数が必要になると思う。すぐに出来るものではない。	経験／職員のスキル／ずーっと触れ合っている／その人なりの人生／全部聞く／コミュニケーションとかしながら／全部わかってくる／ある程度の年数が必要／すぐに出来るものではない	経験やスキルのようなもの／本人との時間をかけた深い関わり／本人らしきや生の履歴の共有／経験の積み重ね	意思を捉える／経験の積み重ね／長期的な関係の構築	表出困難な意思を意識的に引き出す／人柄への関心／長期的な関係の構築が必要
36	A	で、腹が立つのよね、きつとね。なんのことも、わからなかった、私たち、そうすると、ドーンと机をたたいて、私も帰る！って言ったのね。で、なんでかと思った時に、職員が、そばにいて、ただ話を聞くんじゃなくて、どうしたの？と聞いて聞くんじゃなくて、黙ってそばにいます。	腹が立つのよね、きつとね。／わからなかった、私たち。／そばにいて、ただ話を聞くんじゃなくて／黙ってそばにいます。	整理できないままの表出／安易な言葉に頼らない寄り添い。	整理できないままの孤独や不安／安易な言葉に頼らない寄り添い	整理できないままの孤独や不安／安易な言葉に頼らない寄り添い
38	J	話もしないでただ手をつないで、ほんとは、あの、大丈夫？みたいな感じで、声を出さないでただ手を握って、そして、その人は泣いてる。泣いてるんだけど、気持ちを落ち着かせようとしてるんだと思う。で、そこで、たぶん、職員が、どうしたの？なんで泣いてるの？どうしたの？って言った。たぶん、もつと	話もしないでただ手をつないで泣いてる／気持ち落ち着かせようとしてるんだと思う。で、そこで、たぶん、職員が、どうしたの？なんで泣いてるの？どうしたの？って言った。たぶん、もつと	本人の整理／葛藤を共有する職員／言語によるケアの難しさ。	表出困難な意思	表出困難な意思を静かに捉える／手を握り、思いに寄り添う
58	J	だから色んな思いがあるんだって言うのを、私たちは教えられて、そして、思いに寄り添うとかっていうのは、そういうことから、自然に学んできてるんだと思う。	思い／寄り添う／自然に学んできてる	思いに寄り添う感覚／職員の成熟／自然な関係の中から得ている	寄り添いの本来のあり方／直感的に習得	寄り添う感性を習得／自然な関係の中／一人ひとりの異なる意思に関心を持つ
80	A	で、あのね、泣けない人と泣ける人というのよ。泣けない人の方が時間かかる。泣ける人は、何かこう、あふれ出るものがあるって、涙が出てくる。入れ替えるするって意味かな、これから何か変わらうと思う時に何か、悲しいとか苦しいとか、いつ、つらいこといっぱいあったんだけど何かこうわかってくれる人がいる。自分のその、つらい状態をちょっとわかってくれる人がいる。と思うと、やっぱりこう、涙が出てくるのかな。だから、泣ける人はね、大丈夫だと思ふ。私。あ、この人大丈夫だ。	泣けない人と泣ける人というのよ。泣けない人の方が時間かかる。入れ替えるするって意味かな、これから何か変わらうと思う時に何か、悲しいとか苦しいとか、いつ、つらいこといっぱいあったんだけど何かこうわかってくれる人がいる。自分のその、つらい状態をちょっとわかってくれる人がいる。と思うと、やっぱりこう、涙が出てくるのかな。だから、泣ける人はね、大丈夫だと思ふ。私。あ、この人大丈夫だ。	泣ける人は、心の底から表出した、入れ替える。泣けない人は、まだ表出出来ない、つらい気持ちを隠してしまっている。	本人の閉じた気持ち、隠した気持ちのままでは、関係性は構築し難い。	本人が気持ちを隠してしまうことを心配している／心をほぐし、信頼関係を構築する。時間を必要とする／
84	A	まだ、意図地はなかなか泣けない。だから、何度も何度もこうやって利用するようになって、面談をするようになって、それから、数回やっていると泣けるようになってくる。だから、常にこう、なんか、2〜3か月はやっぱりね、話してあげないといけない。	意図地はなかなか泣けない／何度も何度もこうやって利用するようになって、面談をするようになって、それから、数回やっていると泣けるようになってくる。だから、常にこう、なんか、2〜3か月はやっぱりね、話してあげないといけない。	信頼関係ができるまで／表出に抵抗がある／2〜3ヶ月程度、集中的に／関わっていく	表出を促すような傾聴	2〜3ヶ月程度、集中的に／意思が表出できる関係／表出を促す
99	J	そうそう、だからそのところを、私たちがどう、じゃあ、受けとめたいって言うときに、ああ、そうねえ、小さいときのね、その住んでたときの、そこで、本当に水もきれいかつたし、お米も美味しかったよって、言っていると、そうそうそううって、ま、このもいいけどねってなるのよね。	私たちがどう、じゃあ、受けとめたいって言うとき／小さいとき、住んでたとき、そこで、水もきれいかつたし、お米も美味しかったよって、言っていると、そうそうそううって、ま、このもいいけどねってなるのよね。	生の履歴に関心をもつて関わる／本人も施設に関心を持ってくれる	愛着あるものがない／寂しさ／受容しあう関係	生の履歴に関心をもつて関わる／本人も環境を受け入れてくれる
136	A	どんなに重度で進んでも、本当に人として、人としてだと思ふんですよ、最終的には、で、よくわかってるんだもん、より研ぎ澄まされて、より、本当に、こ、その人間を見るようになって。だから、やっぱり、わからない人ではない、こ、こ、動かなくて、話せなくて、こ、こ、目だけぎょろぎょろさせてても、よくわかってるってことなんだよって言うのを、言葉かけを丁寧にしてほしいと思う。で、そうされると、入って柔らかな顔にならない？	どんなに重度で進んでも／本当に人として、より研ぎ澄まされて、動かなくて、話せなくて、こ、こ、目だけぎょろぎょろさせてても、よくわかってるってことなんだよって言うのを、言葉かけを丁寧にしてほしい／柔らかな顔	重度の認知症／人間としての心は生きている／研ぎ澄まされた状態	人として尊重して関わる	重度の認知症／同じ人間としての心は維持される／言語的なやり取りに依存しない／研ぎ澄まされた状態
140	J	そうそう、それはね、重度の人と関わったら、やっぱり、感じるものがある。	重度の人／関わったら感じるものがある	直感的な共有	表出困難な意思／共有	重度の認知症／人と人として直感的に向き合う
142	J	実習の人はね、実習で、単に実習に来たと思うんじゃないで、大切な人を、自分は関わらんだ、大切な人には今日は出会うんだと思って、やっぱり、実習の、もう今日はもう、あの、このね、実習一日に終わればいって、思うんじゃないで、自分の一番大切な人と出会う気持ち。	実習／一日に終わればいって／思うんじゃないで／自分の一番大切な人と出会う／気持ち	表面的なケアではなく／大切な人として／最大限の関心をもって関わる／実習、ケアに向かう／大切	共に過ごす時間が十分に持たない場合	短い時間しか関われない人／最大限の関心をもって関わる
188	J	夫婦が阿吽の呼吸とか言うじゃない、ね、何にも言わなくてもわかる。俺の目を見てわかれとて言うことでもないけど、だから、それがケアでも同じだと思う。何も言わなくても、本当にこ、自分の行動や、自分のこ表情を見てもらって、そして、あ、こ、こ、自分だと思って、もう、すぐに、こ、その職員は動いてるっていうね。そういう、阿吽の呼吸の中で、あの、動くケアって言うのかな。出来るようになるのと良いなって思う。	夫婦／阿吽の呼吸／何も言わなくてもわかりあえる／夫婦が／長く付き合ってきたからこ／何も言わなくても通じあうもの／ケアでも同じ	夫婦／長く共に生きてきた者／直感的に共有するようなケア／職員によるケアの理想	直感的な推察／ケアの理想	夫婦のように／長く共に生きた人の関係／ケアの理想

ストーリーライン

デイサービスの施設職員にとって、本人がうまく表出できない気持ちに敏感に気付くこ

とが重要であり、気づきのケアともいえる。施設職員は、家族との対話や自然な関係の中から、一人ひとり異なる意思に関心を持つことで、気づくための寄り添う感性を習得している。そのため、本人との関係性についても、長期的な関係の構築が必要である。

本人の表出困難な意思を意識的に引き出すにあたっては、人柄への関心を持つことが必要である。特に、初対面からの基本的な信頼関係構築には、2~3ヶ月程度、集中的に関わって、表出を促す。また、過去から現在にいたる本人の状況や家族からの情報など、生の履歴に関心をもって関わることは、本人も環境を受け入れてくれる。本人が気持ちを隠してしまうことを心配している。心をほぐし、信頼関係を構築するのは特に時間を必要とする。

ケアにおいては、整理できないままの孤独や不安に対して、安易な言葉に頼らない寄り添いが重要である。手を握り、思いに寄り添うなどから、表出困難な意思を静かに捉えることで、一人ひとり異なる意思に関心を持つことが重要である。そのうえで、本人の表出困難な意思を予測し、解釈していくことが必要となる。

一方で、本人は、施設職員との関係性によって、意志の表出を変えている。そのため、施設職員、家族、利用者同士など、本人を取り巻く多面的な関係性が豊かな表出を可能にしていることも考慮して働きかける役割も求められる。

重度の認知症であっても、同じ人間としての心は維持される。言語的なやり取りに依存しない、研ぎ澄まされた状態となるにつれ、人と人として直感的に向き合うことが重要となる。短い時間しか関わられない人であっても、最大限の関心をもって関わり、出会いとして向き合う。施設におけるケアも、夫婦のように長く共に生きた人の関係をケアの理想としている。

理論記述

表出困難な意思を意識的に引き出して捉えるにあたっては、基本的な信頼関係構築とともに、生の履歴を捉えることが必要である。

ケアにおいては、握った手の温もりや、静かさなどから、表出困難な意思を直感的に捉えることが重要である。

デイサービスにおいては、多面的な関係性が豊かな表出を可能にしている。施設職員、家族、利用者同士などの関係性を考慮して働きかける必要がある。

重度の認知症など、表出が困難になるほど、言語的なやり取りに依存しない、研ぎ澄まされた状態となる。最大限の関心をもって関わり、出会いとして向き合うことが重要となる。

(2) K氏の調査結果
分析過程

図 5-3 SCAT による分析 1-K

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき箇所	<2>テキスト中の箇句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成員概念(前後や全体の文脈を考慮して)
9	K	だから、こう、日々やっているなかで、目が合う。認知症の方は視界がだんだん狭くなって、正面からのコンタクトが一番ベストなんですけど。日々正面から目が合う、言葉が、数が少なくなった方も合うときに、あ、お父さんの写真見てもらったり、あ、今コンタクトとれるなあと思うときの瞬間って、本当、動いてくれないんですよ。そういうことが、あ、増えてきたのは、何かとも思いますけど、最後の場面を取るときに、あ、もうそろそそだなんていう感覚と一緒に。あ、そろそろだなんていうタイミングが、目の合わせ方と目の色とかで分かる。非常に曖昧です。	日々正面から目が合う/言葉数が少なくなった方も合う/今コンタクトとれるなどと思うときの瞬間/動いてくれない/最後の場面を取るとき/そろそろだなんていう感覚/一緒に/目の合わせ方と目の色とかで分かる/非常に曖昧	正面から目を合わせて/コンタクトが取れる瞬間/直感的な気づき/目の合わせ方や目の色など/看取りの直感と似た/曖昧な感覚	認知症の人の意思/直感的な気づき/コンタクトできる機会まで関心を持って待つ	表出困難な意思/繊細な仕草や目の動き/関心を持って待つ/直感的で曖昧な感覚/客観的な方法では知ることができない
18	K	グループホームは、前は特養で働いていたので、憶測と、あの、だらうなあっていうことに関わりだけだったんですね。そうじゃないかなあとか、今こうしてほしいんじゃないかなあって思うだけ。今、あの、情報っていうのは、例えば居宅のケアマネさんから流れてくる情報っていうのは、あの、基本的にはADLの状態、体のこと、皮膚のこと、あと、情報プラスどこ出身でした。こういう仕事をしてきた方です、ぐらいいんです。認知機能が低下した内容っていうのは、ものすごく多い。どうい問題行動があるかとかが来るので、まったくその、どうい暮らしをしてたっていうのは情報ないんですよ。ただ、こういうコンタクトをとりながらご家族に聞いて。	居宅のケアマネさんから流れてくる情報/基本的にはADLの状態/体のこと/皮膚のこと/認知機能が低下した内容/多い/どうい暮らしをしてた/情報ない/コンタクトをとりながらご家族に聞いて	定型的な方法/ADLや医療の情報、認知機能などの情報ばかり/本人らしさや生の履歴をうかがい知る情報/ほとんどない/本人と過ごす時間や、家族との対話などから得ている	特別養護老人ホーム勤務時/本人の客観的な情報と、生の履歴/本人や家族から知ることの大切さ	連携から得られる客観的な情報/本人らしい暮らし方/本人や家族との関わり/生の履歴
20	K	だっただけです。今、[小規模多機能施設に]いると、家の中に入れば家の中においがかいて、しゃべらなくても、あ、今から仏様お参りするんだって、いう足の動きだったり、もう、特にタッチしないで、その、家事補助もしない身体介護もしない、お1人の暮らしを見れるので、ジーッと黙っていても、あ、次こういうことするんだ、なるほど、ここが冷蔵庫が棚になっているんだとか。棚というものはなんだろうって思うので。面白さもあるかな。だからこそ、ここに来たときに、そういう習慣だったり手つきだったり、方向を、あ、こっちの方向に行くんだから家の方向と一緒にだあって。	家の中に入れば/家の中におい/足の動き/ジーッと黙っていても/次こういうことするんだ/ここが冷蔵庫が棚になっているんだ/ここに来たとき/習慣/手つき/方向/こっちの方向に行くんだから家の方向と一緒にだ	本人の自宅での仕草や様子、匂い、習慣など/本人らしさを知る/施設での本人の過ごし方/自宅での過ごし方/知り、重ねて見ること/共有することができる	小規模多機能施設勤務時/自宅での生活から見る、本人らしさ/一人ひとりの存在を深く知ろうとする	本人の自宅での暮らしを垣間見ること/繊細な仕草や目の動き/関わりの持ちやすさ/特別養護老人ホームと小規模多機能施設の違い
30	K	ほとんどの方はなるので、我々がビジネスホテルに泊まって、あ、どこだっかなくて、うぐらいい熟睡したときっていうのは、思うように利用者の方も、起きたときになるべく、「あ、そうやったな」、こう、自然に起きてトイレに行ったり、そういうサポートが大事ななあと思って。	我々がビジネスホテルに泊まって、どこだっかなくて/うぐらいい熟睡したとき	認知症の方も私たちも同じ/見慣れない部屋で起きたときは不安	生の履歴から/不安	これまでの暮らし/乖離した環境/不安
38	K	田んぼに向かって、伝えてほしいと。いつも、「わからん、ばかやろう」って叫んではったので、[本人]さんの背中普通にさすりながら。	いつも「わからん、ばかやろう」って叫んではった/背中普通にさすりながら	認知症にともなう苦悩、つらさ/表出困難な意思への気づき	家族への思い/本人の苦悩への共感	苦悩/表出困難な意思
46	K	[表出困難な本人]さんはですね、鳥肌立つんですよ。パーツと、怖いときとか、不安が強いときは、そんで、あ、鳥肌立ってるとしたら、スタッフが背中一生懸命さすって、「大丈夫ですよ」ってしばらく手を握っていると、ああ、いくれたって。一緒に歩いててもそれが出来るのは、私たちの存在が消えたときなんか、1回立ち止まって、「いますからね」って言うのと、「あ、ありがたう」ってなる。	怖いとき/不安が強いとき/大丈夫ですよ/しばらく手を握っていると/一緒に歩いててもそれが出来るのは、私たちの存在が消えたとき	鳥肌/孤立/孤独/不安/存在を確認し合う/安心できる関係性	本人の孤立した不安の共有	本人の強い不安/微細な表出から不安や意思に気づく/安心を促す/共に向き合う
66	K	そういう情報って、やっぱり、介護の初期の皆さんっていうのは少ないから、余計に介護の方の行き詰まりだったり、跳ね返りだったりっていうのは出てくるので、なるべくその方の代弁をできるように、あの、ケアでないと。	情報/介護の初期の皆さん/少ない/その方の代弁をできるようにケアでないと	出会って間もないとき/関係性の共有が十分ではない/トラブルも多い/代弁できるようなケア	求められるケア/本人の意思を共有し、代弁する	出会って間もないうち/生の履歴についての共有/少ない/家族の葛藤/代弁できるようなケア
67	K	ただ単に、せっかく対応しているのにな、こういう方にこういう感情を持ってしまったとか、早くお風呂入れればいいのになって思う自分、またスタッフが苦しい。あ、もう、事前にやはりそういう情報って入っているのは、あれはあるだけ。あ、お風呂入る前は、必ずバックをして入った方には、「キューリです」って話してね、やってもらって、「じゃあ行きましようか」って言えばいいけども、そういう情報も何もないかケアをしようと、スタッフがもう体を壊してしまう。ああ、来ました。	スタッフが苦しめられる/事前に/情報/あればあるだけ/お風呂入る前/必ずバックをして入った/情報も何もないか/ケアをしようと、スタッフがもう体を壊してしまう	本人の表出困難な意思を共有できないまま、すれ違ってしまう職員は苦しむ/本人の習慣などの、生の履歴を共有していれば避けられた衝突	定型的なケアで生じる衝突/施設職員の負担軽減	定型的なケア/すれ違いや衝突/生の履歴から得られる情報/避けられる/施設職員の負担軽減にもつながっている
78	A	大体言いました。あ、もう、ほほほ。もうその方の身になって言葉が家族に伝えられるか、スタッフに伝えられるかっていうのが、日々私のテーマなので。こんなだったんですよって言うのと、ああ、たぶんきつかったんでしょね、とか。	ほほほです/もうその方の身になって/言葉/家族に伝えられるか/スタッフに伝えられるか	経験的な善積/本人の身になって代弁/家族や職員との共有	表出困難な意思の代弁/共有	直感的に捉えた本人の意思を代弁すること/家族や職員と共有すること/施設職員として重要なテーマである
83	A	本当に情報が無い方もおられる/第三者の後見人さん/全くなりの情報っていうのはいくつか、悪い場合はもう家があるんで、家に、おうちにあって、ああ、鍋の使い方はこうなんだなあとか、そういう習慣が見れる。見れるので、情報として持っておく。	本当に情報が無い方もおられる/第三者の後見人さん/全くなりの情報っていうのはいくつか、悪い場合はもう家があるんで、家に、おうちにあって/鍋の使い方はこうなんだなあ/そういう習慣が見れる/情報として持っておく	近親者が周囲にいない人/本人らしさ/生の履歴を知ることがない/自宅で/そういう習慣が見れる/情報の過ごし方や習慣	独居高齢者/後見人の情報	本人らしさや生の履歴を知る人がいない/本人の仕草や自宅での暮らし/生の履歴を捉える

ストーリーライン

小規模多機能施設における、一人ひとりの表出困難な意思は、客観的な方法では知ることができない。関心を持って待つことで、繊細な仕草や目の動きなどから直感的で曖昧な感覚で気づくことができる。連携から得られる客観的な情報では、本人らしい暮らし方を知ることはではない。本人や家族との関わりや、自宅を訪問し、繊細な仕草や目の動きから本人の自宅での暮らしを垣間見ること、生の履歴を捉えることができる。こうした関わりの持ちやすさは、特別養護老人ホームと小規模多機能施設の違いでもある。

生の履歴を知ることは、微細な表出から不安や意思に気づくことを可能とし、本人の強い不安や苦悩、表出困難な意思に対する理解を深め、共に向き合うことで安心を促すことができる。特に、出会って間もないうちは生の履歴についての共有も少ない。また、これ

までの暮らしと乖離した環境から感じる不安が生じやすいため、家族の葛藤も生じやすい。

できる限りの安心を促しながら、本人の生の履歴や表出困難な意思と向き合うことが必要がある。また、家族の話を聞くとともに、家族に対しても表出困難な意思を代弁できるようなケアが必要となる。

こうした関わりの積み重ねは、定型的なケアによって起こるすれ違いや衝突についても、生の履歴から得られる情報で避けられることが多く、施設職員の負担軽減にもつながっているようである。直感的に捉えた本人の意思を代弁することは、施設職員として重要なテーマである。家族や職員と共有することでケアの工夫も可能も広がっていく。

しかし、近親者が周囲にいない孤立した高齢者など、本人らしさや生の履歴を知る人がいないなど難しい事例もある。本人の仕草や自宅での暮らしぶりから生の履歴を捉えることで紐解いていくことが欠かせない。

理論記述

本人らしい暮らし方などの生の履歴から、表出困難な意思や不安を捉えていく。

関係性の浅い期間には、事前訪問などで以前の暮らしを垣間見ることや家族との対話を行い、早い段階から生の履歴を捉えることが特に重要である。

連携からもたらされる客観的な情報は、本人らしい暮らしを知るにあたっては、有効ではないことが多い。

生の履歴から、自宅に近い生活環境や習慣の再現などへの配慮も行なわれる。

生の履歴を捉えることで本人への関心が高まり、本人と施設職員の関係性が深まる。

生の履歴から得られる情報で避けられる衝突も多く、両者の負担を軽減する。

(3) L氏の調査結果
分析過程

図 5-4 SCAT による分析 1-L

番号	発話者	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言いかえ	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成員概念(前後や全体の文脈を考慮して)
21	A	やっぱり私たちも、こう、毎日こう仕事をしてるんですけど、お年寄りに何も言わなくても、「あんたなんか今日元気ない」というとか、「どうしたの」とか言われるっていうことは、もう度々あるんですよ。だから、あ、伝わってる。たぶん自分たちは精一杯それを外に出さないようにとこたえてるけど、それが伝わったりとか。あとは、そういうこと、日ごろ言葉が出にくい方でも、ふとしたときに、なんか、「ありがどう」とか、それが伝わったりとか。でも、それは私たちが話しかけたから言うわけでもなく、なんとなく、「ありがどう」とか言われる、言われたりとか。そういうことはありますね。うん。	毎日こう仕事／お年寄り／何も言わなくても／伝わってる／何もお年寄り／何も言わなくても／伝わってる／何もお年寄り／何も言わなくても／伝わってる	表出困難な人／隠そうとしても／施設職員の気持ち／直感的に伝わる	自制的な振る舞い	表出困難な人／同じ／隠そうとしても／施設職員の気持ち／直感的に伝わっている
26	L	そうですね。伝わりますね。だからやっぱり私たちも、こう、あの、穏やかに生活していただくために、なるべくこう、自分たちもやっぱり穏やかになって、慌ただしくしてると、やっぱり不安になられたりするので。そういうことは、一応気がつけてはいるつもりではありますね。	伝わります／穏やかに生活していただくため／自分たちも穏やか／慌ただしくしてると不安になられたりする	職員の穏やかさ、慌ただしさ、不安／伝わり、本人や他の利用者にも共有される	職務の多忙さが介護される側にも伝わってしまう	施設職員自身の穏やかさや不安／多忙な時／穏やかな気持ちで関わるように気をつけている
30	L	うーん、そうですね。なんか逆に言葉にしてしまうと、なんかそれが愛に伝わったりとか、逆にその、なんというか、言葉のほうは伝わりづらかったり。あ、お耳が遠いっていうこととかもあるんですけど、逆になんかジェスチャーのほうは、ジェスチャーだったりとかのほうは伝わりやすかったり。なんか、何も言わなくても、なんかこう、お互いアイコンタクトで、ああ、みたいな感じで伝わることもあるし。なんか、そうですね、やっぱり言葉が全てではないなあっていうのは、すごい感じですね。	言葉のほうは伝わりづらかったり／ジェスチャーだったり／お互いアイコンタクトで／伝わることもある／言葉が全てではない／感じます。	気持ちを言語化することへの違和感／アイコンタクト、ジェスチャーの方が伝わることもある／言語的やり取りの限界／曖昧のままの共有感	非言語的／直感的に捉える	言語的なやり取りに依存することなく／表出困難な意思／曖昧のまま直感的に捉える
44	L	そうですね。日ごろやっぱ、こう、まあ、[グループホーム]施設の方針じゃないんですけど、やっぱりそういうこと、表情をくみ取ったりとか、あの、ま、動作とか仕草もそうなんですけど、そういうことで、あの、お年寄りの生活を支えているっていうのが、やっぱり土台にあるので。あの、もうそれはたぶん私じゃなくても、あの、ある程度ここで仕事をしているスタッフは、たぶんもう、あの、表情を見て「あ、今怒ってる」とか、「あ、今はちょっとそっとしておこう」とか、たぶんそういうことがもうみんな自然に身につけているスタッフばかりなんです。うーん。	表情をくみ取ったり／動作とか仕草も／お年寄りの生活を支えている／みんな自然に身につけているスタッフばかり	日常から／表情、動作、仕草など／繊細な表出から、本人の意思をくみ取って支えている／全ての職員が自然にできている	表出困難な意思の直感的な読み取り／職員間で自然とできている	日常的／表情や仕草の微細な表出／関心を持つ／表出困難な意思／配慮する意識／施設の方針／職員の間で共有
46	L	うーん、そうですね。それもあって、やっぱりグループホームは24時間365日なので、その、やっぱりそういう自分たちも夜勤とか夜の生活とか、昼間は昼間とかでそういう関わりをさせてもらっているうちに、なんとなくその、見てくるものっていうのが、あの、ま、小規模とかよりもやっぱり深いと思うので、グループホームは密にこう関わってるので。うーん、だから、逆に自分がグループホームに入ったとしたら、やっぱり、あの、言葉でいろいろ「何かですか」「何かですか」って、こう、ずっと聞かれるよりも、表情で「あ、今イヤかな」とか、「あ、今なんかちょっと声かけてみようかな」とかかってやっぱり言われたり、なんかそういうことを思うからこそこそ思うんですけど、あ、なんか今、ちょっと今一緒に横にいようかなとか。	グループホームは24時間365日／小規模とかよりも深い／密に関わってる／逆に自分がグループホームに入ったとしたら／言葉でいろいろ／ずっと聞かれるよりも／表情で／ちょっと今一緒に横にいようかな	長期に生活を共にする特性／深い関係になりやすい／表出困難な意思に／関心が向く／言葉よりも表情や一緒にいたい気持ちを共有／自分を、本人の視点に置き換える／親身に寄り添っている	グループホームのケアの特性／表出困難な意思への関心／気づきへの寄り添い	長期に生活を共にする／施設の特性／関係性は深くなりやすい／言語的なやり取りに依存することなく／繊細な表情や仕草／自分を本人の立場に置き換える視点／曖昧のまま直感的に捉える
48	L	そうですね。なんかその、私だからどうかっていうのは、なんか私は感じたことはいらないです。やっぱりこう、ご本人にとって、その、安心して過ごせる場所だったり、ご家族にとって、その、安心していただけるか、うん、あったかじゃないかかっていうこともあるし。でも、あの、本当にもう入居されて1年とかで看取りになることもあるので、そこはなんか、あの、年月って言うか。年月は分からないし、実際のところ、そうですね、どこまでこう信頼って言うのができてたかどうかは分からないし。	ご本人にとって、安心して過ごせる場所／入居されて1年とかで看取りになることもある／実際のところ、どこまで信頼しているのができてたかどうかは分からない	本人にとって、安心して過ごせる場所であることが重要／短い期間で看取りとなる場合／本人と介護職がどこまで信頼関係を築いたか／分からないまま	安心して過ごせる場所づくり／短期間の場合には信頼関係の構築の程度は分からない	短い期間で看取りとなる場合／十分な信頼関係が築けないこともある／まずは安心して過ごせる場所であることが重要
61	L	うーん、なんか、なんでしょうね。まず、どうなんだろう。その方に、その、興味を持つとか、なんかどういうふうなその方がそのグループホームに入られる前に、まあ、生まれてどういう時代を生きてこられたとか、そういうこと、生活環境だったとか、どの辺に住んでたとか、なんか、そういうこと、興味を、その方の興味を持つと、なんか、あ、もっと聞きたいなあとか、なんか思えてきたり。でも、逆に聞けないこともあるし。やっぱり、自分でも聞かれないこともやっぱりあるだろうから。まあ、そういう話を聞かせてもらえば、あとはご家族だったり、いろんな。その、ま、ご兄弟がいっぱいいたら、ご兄弟が来てお話を聞かせてもらったりとか。また、あの、息子さんと来たときとか、あ、来たときとか、ご本人さんの態度が違ったりとかもするので。それで、なんか、あの、きょうだいの関係とかも見えたりとかするし。なんかそういう、こう、まず、まずはその人を知るといって、知って、なんですかね。うーん。	その方に興味を持つ／生まれてどういう時代を生きてこられた／どういう生活環境だった／どの辺に住んでた／そういう話を聞かせてもらいながら／ご家族／お話を聞かせてもらったり／息子さんと来たとき／ご本人さんの態度／関係／見えたりとかする／まずはその人を知って	本人の存在そのものへの関心／生の履歴を捉える本人の存在と向き合う／生まれた時代／生活環境／本人が大切にしてきた事や話した事／家族の話／家族との対話	豊かなケアとその関係の前提	本人の存在そのものへ深い関心をもつ／本人らしさを知り、人として興味を持ち、関係性を深める／本人が大切にしてきた事や話した事／家族の話／生の履歴を捉える／豊かなケアとその関係の前提

ストーリーライン

グループホームでは、長期に生活を共にするという施設の特性上、本人と介護職の関係性は深くなりやすい。そのため、日常的に、表情や仕草の微細な表出に関心を持つことで、表出困難な意思に配慮する意識をもつことができる。こうした関わりは、施設の方針でもあり、職員の間で共有できている。

自分を本人の立場に置き換える視点を持ち、表出困難な意思を繊細な表情や仕草から捉えることで、言語的なやり取りに依存することなく、曖昧なまま直感的に捉えることを可能にしている。

表出困難な人も施設職員と同じように、表情や仕草などを捉えており、施設職員の気持ちは隠そうとしても直感的に伝わっている。そのため、施設職員自身の穏やかさや不安が伝わらないよう、たとえ多忙な時でも、穏やかな気持ちで関わるように気をつけている。

また、短い期間で看取りとなる場合など、十分な信頼関係が築けないこともある。そのため、まずは安心して生活できる場所であることが重要である。

そのため、まず、本人の存在そのものへ深い関心をもつことが重要である。本人が大切にしてきた事や話したい事を聞き、家族からの話を聞くことで、生きてきた時代、生活環境や地域など、以前の暮らしの中から生の履歴を捉えることで、本人らしさを知り、人として興味を持ち、関係性を深くすることができる。

理論記述

グループホームでは、長期に生活を共にするという施設の特性上、本人と介護職の関係性は深くなりやすい

表出困難な意思は、言語的なやり取りに依存することなく、繊細な表情や仕草などから捉えられるようになる。

本人の存在そのものへ深い関心をもつことで、日常的に、表情や仕草の微細な表出に関心を持つようになり、自然に表出困難な意思に気づくことができる。

本人らしさを知り、人として興味を持ち、関係性を深くすることは、施設の方針としても、職員の間で共有されている。安心して暮らせる場所であることも重要である。

(4) M氏の調査結果
分析過程

図 5-5 SCAT による分析 1-M

番号	発話者	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
3	A	ふと畑に触れた時とかの表情が明らかに違う。たぶん昔はできたことをおもいだして、なんか懐かしいみたいな、なんかそういう気持ちになっただと思う。	畑に触れた／表情／明らかに違う／昔／懐かしい／そういう気持ち	親しんだ／馴染みのある／懐かしい感覚／穏やかな気持ち／気持ちの推察	回想法／園芸療法／生の履歴／確信できる	馴染みのある体験が穏やかな気持ちを引き出す／表情の違いからわかる
7	A	俺たちも一緒なんやけど、今まであれとこれが好きやったねとか、こういう場面喜んでねとか言うのを積み重ねた結果、今こういうことがしたいんだろうなって、今きつとこの人はこう思うだろうなっていうところの関わりを積み重ねる。	俺たちも一緒／今まで／積み重ね／今／したい／この人はこう思うだろう／関わり／積み重ね	人は誰でも同じ／今までの関わり／積み重ね／推察する	人と人の関わり方の基本／過去からの推察	健康な人との関わりも同じ／日常的に関わりの積み重ね
10	A	結局、データだけじゃなくて、やっぱり目で見たもの。こういう時に喜んだよねとか、こういうの好きよねとか、そういうところの積み重ねから、きつとこういうことが言いたいのだろうという感じが考えられた。それも決めつけすぎたら、「支援者のエゴ」に発展してしまうけん。常になんか、本当にそれでいいのなかって言う。ちょっと離れた目線を持つようには心がける。	データだけじゃなく／目で見たもの／喜んだ／積み重ね／きつとこういうこと／支援者のエゴ／常に／本当にそれでいいのな／離れた目線	本人らしさを知ること／本人の喜び／直感／思い込み／過信せず／冷静に考える	一人の人間としての関わり／専門職としての視点	データだけではなく、日常的に関わりの積み重ね／表情や直感ばかりを過信せず／専門職としての冷静な視点を持つ
13	A	やっぱりまず、表情の違いがまず出る人出ない人。笑ってこれれば判断はしやすい。ずっとムスツとしてる人とか、やっぱり、うちの施設はそこまで寝たきり重度の方はいないんやけど、それでもなんか、まあ、うちの障害者支援施設で言ったら、その、もう、笑いたいときや笑わんで、適切な感情表現がまずでない人もいっちゃう。笑うとけん、けして機嫌がいいわけでもないし、まあ、いろんな方がいっちゃうけん。けして表情とかだけで指針にするわけにもいかんけん。	表情の違い／出ない人／笑ってこれれば判断はしやすい／適切な感情表現／機嫌がいい／指針にするわけにもいかん	表情での判断／わかりやすい／裏返しの表現／表情の過信の危険性	表出の多面性／総合的な視点	表情は本人の意思を判断しやすい／表情が心と一致しない／表情が出にくい人／適切にしない人／総合的な視点が必要
18	A	ただわかったのは、その「今」は違うくても、ふとした時に遊んでるのは見受けられるから、やっぱり、気分のムラで。その一回では決めつけられないというのよわかるし、なんか、本当になんか、これだっという正解は言えんけど、本当にもうその日その日のご本人の状態とか見ながら、アプローチをどんどん変えていって、どうかなと。	「今」は違う／気分のムラ／一回では決めつけられない／これだっという正解は言えん／状態／アプローチをどんどん変えて	本人の好きなもの／タイミング／確実な方法／試行錯誤／関わり方を変える	表出困難な意思／模索／関わり方の積み重ね	関わるときの本人の気分によっても変わる／確実な方法はない／試行錯誤しながら関わり方を変える
21	A	家族、まあ、各家庭によって、特にこの障害者支援施設に預けている家族って、あり方がもう多様化してって、一概に言えんところもあるけどまあ、なかなか、まあでも、自分の家族が来たら、まず利用者の方は、半ば興奮に近いような喜びを感じる、言葉にならん方であっても。	障害者支援施設／預けている家族／多様化／一概に言えん／自分の家族／半ば興奮に近いような喜び／言葉にならん方であっても	家族の在り方／家庭の事情／家族の面会／大きな喜び／言葉にできない人	家族の存在／代えがたい喜び／明らかに様子が違う	家族の在り方が多様化／一概に言えない／家族の時間は代えがたい喜びである
26	A	うん、意思表示の部分でいったら、僕の担当さんのなかには、こう手を握って、この人は「今、なににがこうして」って、こまかく伝える人、お母さんがおるけど、僕がその彼と付き合ってる中で、「今けしてそうじゃないよね。」って思うときも。	意思表示／手を握って／こまかく伝える／お母さん／今けしてそうじゃない	繊細さ／母親の代弁／専門職の視点／感じ方が違う	母親の思い込み／疑い／本人の意思／視点の違い	微細な代弁／表出困難な意思／捉え方をめぐって違いを感じる
39	A	ただ、やっぱり、人と人やけん、知識以上に、もちろんこちらはサービス提供側やけん、お客様として接する訳やけど、なんか、まあ、人とか。もちろん相性はあれど、愛情があったり、色んな条件がある中での関わりになるけん、一番大事なものは、そこでめげないこと。	人と人／知識以上／サービス提供側／お客様／相性／愛情／色んな条件／関わり／一番大事なものは／めげないこと	適切な距離感／様々な条件／人と人の関係／くじけないこと／関わり続ける	愛情と冷静さの両立／めげそうになる関わり	お客様として関わりや様々な条件が求められる／人と人の営みである以上、愛情がある／根気強く自然な関係を蓄積する
41	A	相手は、まず支援者として認めてもらえること、相手のことを知るうえで、まず自分を知ってもらえるように、その人のところに、まあ時間が空いたら、話しかけに行くような人が求められると思う。まあ、その人っていったら、みんななんやけど。	支援者として／相手のことを知る／自分を知ってもらえるように／時間が空いたら／話しかけに行く／みんな	関わり続けること／許される／日常的に／少しでも関わる／すべての関係者	信頼関係づくり／時間をかけて	信頼関係を築く／日常的に時間をかけて関わる必要がある
42	A	まあ、とにかく人としての関係性をしっかり作っていくような人が、たぶん現場は一番欲しいかなと思う。じゃないと、やっぱり、知識だけであったら、やっぱり、性根の本当のところととれるわけがない。だからもう、しっかりまず、人としてしっかり関わる関係性がとれるように、しつとやらやっぱり、同じ時間をなるべく一緒に、楽しい時間を、らくに時間を過ごす。	人としての関係性を／しっかり作っていくような人／現場／一番欲しい／知識だけ／性根／同じ時間／なるべく一緒に／楽しい時間／らくに時間を過ごす	根気強く／本音／真心／本心／信頼関係／時間をかけて／楽しんで／リラックス／自然体	微細な代弁／表出困難な意思／捉え方をめぐって違いを感じる	信頼関係を築く／日常的に時間をかけて関わる必要がある／意思を最大限尊重
59	A	まあ、俺の経験では、高齢のユニットで動いたときは、高齢者に関してはお互い、もう、まず彼らは、今からそこで暮らしていく中で、まず彼らはもう「頑張る」という時期を過ぎてる方たちなんよ、障害があっても、たぶん色々苦勞してきて、たぶん残りの余生を静かにそこで、とんだけ自分たちらしく暮らせるかって言うことにかかってくるけん。	高齢のユニット／高齢者／今からそこで暮らしていく／頑張る／時期を過ぎてる／障害／色々苦勞してきて／残りの余生を静かに／自分たちらしく	頑張ること／得られる幸せ／未来／将来／とらえ方の違い／暮らしたの豊かさ／苦勞して生きてきた／穏やかな余生	頑張って生きてきた過去／今の価値を認める／本人の意思を最大限尊重	高齢者が頑張ることと得られる幸せ／本人らしく過ごすこと／意思を最大限尊重
63	A	もう、まあ、雑に言うとか、好きにやってもらう。なんか、「どうしたいですか？と」か、とにかかるとんだけ寄り添えるか。	雑に言う／好きにやってもらう／とにかかるとんだけ寄り添えるか	自分らしさ／認める	将来よりも重要なもの／年齢による価値の変化	本人らしく過ごすこと／意思を最大限尊重
70	A	まあ、昔してた趣味が、ただ認知の関係上、興味を示さないかなとか、まあ認知があるっていったら、昔の興味にも関心を示さなかったりするし、なんか、そういう認知的なケアで、たとえば、回想法というのかな。昔話したりとか、昔好きだったことの話とかをしたりもするし。	昔してた趣味／興味を示さない／認知的な人のケア／回想法／昔好きだったこと	昔好きだったこと／認知症／興味を示さないこともある	生の履歴	認知症で興味を示しにくいこともある／回想法を用いることが多い
141	A	だから、そこで絶対ってその、ズレとかは生じるかもしれないけどまあ、なんか、でもそれはもう、しかたがないのかなと。まあ、その、しつかり、お互いに気持ちがあれば、それがもう、いいんじゃない？ってても、俺は思うけど。	絶対／ズレ／しかたがない／お互いに気持ちがあれば／いいんじゃない？	家族と施設職員の捉え方の違い／あって当然／本人への愛情／共有するもの	本来あるべき視点の違い／協力／本人の幸せ	家族と施設職員の捉え方の違い／本来、ずれがあっても当然／本人の幸せを見据える気持ち

ストーリーライン

園芸療法や回想法など、馴染みのある体験が穏やかな気持ちを引き出すことは、表情の違いからもわかる。

表情は本人の意思を判断しやすい要素だが、表情が出にくい人や適切に出ない人もいる。また、関わるときの本人の気分によっても変わるなど、表情が心と一致しないこともある。表出困難な意思を知るための確実な方法はないため、総合的な視点が必要である。

データだけではなく、日常的に関わりの積み重ねて、試行錯誤しながら関わり方を変えるのは健康な人との関わりも同じである。

ただし、施設職員としては、表情や直感ばかりを過信せず、多面的に冷静な視点を持つことが求められる。そのため知識的な研鑽が重要であり、日々のケアの中で本当の専門性になってくる。また、ケアにおいて、本人の意思に反した対応が必要な場合もあるので、普段からの信頼関係が必要である。

お客様として関わりや様々な条件が求められるが、人と人の営みである以上、愛情がある。 本心で関わり、深く理解するなど、根気強く自然な関係を蓄積することが重要である。

家族の在り方が多様化しており、一概に言えないが、本人にとって家族の時間が代えがたい喜びであることは確かである。家族によっては、本人の思いについて微細な代弁を含む人もいて、表出困難な意思の捉え方をめぐって違いを感じることがある。しかし、家族と施設職員の捉え方の違いは、本来、ずれがあって当然であり、本人の幸せを見据える気持ちが共有できていれば尊重しあえる。

特に高齢者についていえば、頑張ることで得られる幸せが限られていることもあり、本人らしく過ごすことや意思を最大限尊重して過ごすことが重要である。老化や認知症で興味を示しにくいこともあるため、回想法などを用いることが多い。

理論記述

表情は本人の意思を判断する際に重要であるが、直感ばかりを過信もできない。

日常的に関わりの積み重ねや試行錯誤で表出困難な意思を捉える必要がある。

人と人の営みであり、愛情や本心で、根気強く関係を蓄積することが重要である。

施設職員としては、冷静な視点をもつ必要があり、知識的な研鑽が必要である。

家族と施設職員で、表出困難な意思の捉え方には違いがあるものの、本人の幸せを見据える気持ちが共有されていれば尊重し合うことができる。

高齢者などでは、頑張ることで得られる幸せが限られていることもあり、本人の意思を最大限尊重する。

(5) N氏の調査結果
分析過程

図5-6 SCATによる分析 1-N

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき箇所	<2>テキスト中の箇句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)
4	N	そういうから始めるしかないけんが、認知症になってしまったら、もう、本人にどう聞いても分からんけん、生活歴とか家族さんとかから情報を拾って、この人がどんなことが好きで、どんなものが苦手とか。距離感つめていて、この人は冗談が通じらんとか、通じるとか。その人はこういうことが好きだねとか、あとは、昔に比べてやっぱり興味がなかったり、こっちに入ってきて、新たなものを見つけてあったりとか。	始めるしかない／認知症になってしまったら／どう聞いても分からん／生活歴／家族の情報／この人／どんなこと／好き／苦手／距離感／冗談が通じらん／昔に比べて／興味がなかったり／新たなもの	認知症になってから／言語的な限界／生活歴／家族の情報／関係をつくる／本人らしさ／過去／今の本人らしさ／発見	言語的な理解／コミュニケーション／過去の情報／関係作りの糸口／今の個性	認知症になってから／言語的なコミュニケーションが難しくなる／生活歴や家族の情報／今の本人らしさを捉える
6	N	表情もあるし、作業してもらっても、興味が、なんというかな、興味がある雰囲気とか、なんかしたくなさそう感じとか、この人こういうの好きじゃないんだなとか。そういうから始めて、でも、興味がなくても、周りの人たちがいたら、興味を持ち出したりとか。そういうところから情報を集めていて。でも、その時に好きでもやっぱり認知症やから、もうその次の日忘れる。	表情もある／作業／興味がある雰囲気／したくなさそう感じ／周りの人たちがいたら／興味を持ち出したり／そういうところ／情報を集めて／やっぱり認知症やから／その次の日忘れる	表情から感じるとる／作業の関わり／興味がある雰囲気／興味ももてる環境／意思が日々違ってくる／認知症への理解	表情や振る舞い／他者との関わりの中での変化／表出困難な意思／本人らしさに関わる情報	作業や他者との関わり／表情や雰囲気／意思の変化／本人らしさに関わる情報／表出困難な意思／日々違う
10	N	だいたい分かりやすいのな。やっぱり表情に出てくるけん。顔に、興味なかったら、ツツンしている感じ。もう私しませんがみたいな感じ。あとは普通の人と変わらん表情をするけんが。	だいたい分かりやすい／やっぱり表情に出てくる／顔に／興味なかったら／ツツンしている感じ／普通の人と変わらん表情をする	興味／拒否／おおよそわかる／表情にでてる／態度／普通の人と変わらない	意志／おおよその内容／雰囲気／認知症があっても表情は残る	意思／おおよその内容は表情から感じ取れる／興味／拒否／普通の人と変わらない
19	N	長く接した分は、やっぱり違うかな。向こうも恐怖心じゃないけど、全く知らん人から話しかけられても一般の人と同じ感じがな。戸惑う。顔見知りになんてきたら、向こうからも話してくるし。	長く接した分／やっぱり違う／向こうも恐怖心／全く知らん人／一般の人と同じ／戸惑う／顔見知り／段々／向こうからも話してくる	長期的なかわり／恐怖／警戒心／初対面／不安の軽減／信頼関係	関係の蓄積／本人からの自然な表出／意思表出の環境	長期的な関わり／不安も軽減される／本人からの自然な表出／信頼関係
21	N	うーん、と思うけど、自分は。全然介護の仕事とかしたことない人は、普通に話すようにしゃべっても通じらんして。で、話がごちゃごちゃなったり、つじつまが合わないやうな。職員が利用者に合わせる、かな。それがたとえ話があっても。	介護の仕事／したことない人／普通に話す／通じらん／話がごちゃごちゃなったり／利用者／合わせる／たとえ話があっても	介護未経験の人／健康な人と同じように／意思をくみ取れない／本人を混乱させる／話が合わない／職員が合わせる	介護経験が浅い人／場当たりの／配慮のない関わり方／対等な感覚／うまくいかない／表出の促し	介護経験がない人／場当たりの／配慮に欠ける関わり方／対等な感覚／うまくいかない／本人を混乱させる／職員が合わせる
26	N	やっぱり認知症になって一日一日違ってくるし。自分がうまくいったけんがって、別の人が一瞬のことしたら違ったとか。また違うやり方でもよかったとか。どうしても、なんか、正解がないというかん。入ったときに言われるのが、否定をしないというかん。その人を受け入れて。賛同した言い方をして。	認知症になって／一日一日違ってくる／自分がうまくいったけんがって／別の人が一瞬のことしたら違ったとか／また違うやり方でもよかったとか／どうしても／なんか／正解がない／その人を受け入れて／賛同した言い方をして	日々違う／自分がうまくいった方法／ほかの人／別の方法／正解がない／受容／肯定	日々の変化／意思の内容／関わり方／柔軟な対応／個別的／ケアの心構え	認知症／日々違う／意思の内容／関わり方／関わる人によって／柔軟に対応／どうしても正解がない／個別的に受容
28	N	興奮した状態で話しても話は通じらんかな。いくらこうやろうって言っても。一旦、距離を置いたり、違う気分転換したり。ちょっと興奮したり、混乱が入ったときは、ちょっといつもの感じやないけん。それが夜中やったりあるけん。どうしなさいといううなあれはなかな。	興奮した状態／話を通じらん／一旦、距離を置いたり／気分転換したり／混乱／いつもの感じやないけん／夜中／どうしなさい／あれはなかな	興奮状態／対話できない／冷静になれるかかわり／普段の性格／違う／夜中の対応	普段のケアとは違う／関わり自体が困難／本当の意思ではない／少ない人数／多様な状況／柔軟に対応	興奮状態／関わり自体が困難／冷静になれる関わり／本当の意思ではない／柔軟に対応
29	N	関係を、人と人からね。関係をこう持っていくってのは大事だと思う。	関係を／人と人からね／関係を／持っていく／大事だと思う	人間として／良い関係／お互いに／重要	ケアの土台／人として	人として／信頼関係を築く
36	N	自分がされて嬉しいこと、されたら嫌なことを考えて、大事にするけれど、年齢差も考えるし。自分がレクリエーションしてる時に疑問に思うこともあるよな。ぬり絵とかしてもらってのけれど、実際ぬり絵とかしたかやろかって、やっぱり疑問に思うこともあるけど。	自分がされて嬉しいこと、されたら嫌なことを考えて、大事にする／年齢差も考えるし／自分がレクリエーション／疑問に思うこともある／実際ぬり絵／かしたかやろかって	相手の気持ちになる／ぬり絵／ケアの内容／納得していない	黄金律／実際のケアとのずれ	自分がされて嬉しいこと／嫌なこと／大事にする／ぬり絵などのケアの内容／本当に本人が望んでいるのか／疑問に思う
37	N	自分が入る前からしよったことやけん。疑問に思うことはある。机にソファーに座ってばーととっか、楽しかたやなからうかとか、布団に寝た方がねとか、思う時もある。自分でしてるときね。	自分が入る前からしよったこと／ソファーに座って／ばーととっか／寝た方がねとか／思う時もある／自分でしてるときね	ケアの慣習／ケア感覚とのずれ	意志の尊重／できない事情	ケアの慣習／感覚とのずれ／本当に本人が望んでいるのか／尊重できない事情
39	N	あるけれど、グループホームというのとはやっぱり、家庭的な雰囲気を出す…。一緒にご飯を作ったり、洗濯物を畳んだり。人間らしいじゃないけれど、寝てばっかりじゃというのと。どっかっていうソファーにしたいのかなって思う時もある。	グループホーム／家庭的な雰囲気／寝てばっかりじゃ／ソファーにしたいのかな／思う時もある	施設の役割／家族のように／日常生活／休んでほしい気持ち／尊重できない	意思の尊重／家庭的な雰囲気／ケアのあり方	家庭的な雰囲気／介護施設としての役割
40	N	まあ多少身体が、動かす体操とかは大事かとは思うけど、実際ぬり絵とかはばかにしとらん？みたいな。個人的にはね。もっとうたいことはあるやろうけれど、ちょっとこっちはしてもらって感じるやけど。せんならせんで、一日退屈して一日終わるみたいな感じになるけん。実際、ゲートボールに興味あるて言うけど、実際そういう時間も作れんしね。	身体／動かす体操／大事／実際ぬり絵とか／ばかにしとらん？／個人的には／もっとうたいこと／あるやろうけれど／ちょっとこっちは／してもらって／感じるやけど／せんならせんで／一日退屈して／一日終わるみたいな感じになるけん．．．／実際、ゲートボール／興味あるて言う／実際／時間も作れん	健康の維持／ぬり絵以外の方法／施設側の都合／意思に反して／何もしないまま終わる／一人一人の興味／尊重する余裕もない	意思の尊重／現実的な理解／業務のシナジー	ぬり絵／施設側の都合／健康の維持／現実的な代替案がない／業務のシナジー

ストーリーライン

認知症になってからは言語的なコミュニケーションが難しくなるので、生活歴や家族の情報が今の本人らしさを捉えるきっかけとして重要となる。普段の作業や他者との関わりから、表情や雰囲気の変化を見つけて意思の変化を感じ取り、本人らしさに関わる情報を集めながら表出困難な意思を捉える。興味を持ってきている、拒否しているなど、意思のおおよその内容は表情から感じ取れることは、普通の人と変わらない。さらに、長期的な関わりになると信頼関係ができ、不安も軽減されるため、本人からの自然な表出が出てくるため、より捉えやすくなる。

認知症のため、新しく覚えることには難しさがあるため、昔ながらの過ごし方を優先す

ることが多い。言葉での表出がないので、本当に楽しんでいるかの確信がもてないこともある。また、興奮状態など関わり自体が困難な場合、その時の意思が本当の意志ではないこともあるため、まずは冷静になれる関わりをするなど柔軟な対応が必要となる。

介護経験がない人は、場当たりの配慮に欠けた関わり方となりやすく、対等な感覚を優先しがちである。重要な感覚であり感情は理解できるが、施設職員が合わせる意識がなければ、本人を混乱させることとなり、ケアはうまくいかない。

認知症のため意思の内容や関わり方は日々違う、関わる人によっても違う。ケアや関わり方には、どうしても正解がない。決まった方法というものはなく、一日一日を個別的に受容するなど、柔軟に対応をする必要がある。そのためにも、自分がされて嬉しいこと、嫌なことという感覚を大事にして、人としての信頼関係を築くように努めている。

しかし、ケアの慣習と感覚とのずれを感じることもある。例えば、ぬり絵などのケアの内容は、本当に本人が望んでいるのか、楽しんでいるのか疑問に思う。施設側の都合や健康の維持など、本人の意思を尊重できない事情もあるが、一方、現実的な代替案がないため実務のジレンマを感じている。グループホームが求められている家庭的な雰囲気と、介護施設としての役割の間には意思の尊重のジレンマがある。

理論記述

普段の関わりから、表情や雰囲気を見て意思の変化を感じ取る。

関わりが長期的になると、信頼関係ができ、本人からの自然な表出が出てくるため、より表出困難な意思を捉えやすくなる。

本当に楽しんでいるかの確信がもてないこともある。

介護未経験の人の、人としての対等な感覚は理解はできるが、配慮に欠けた関わり方となりやすい。

認知症のため意思の内容や関わり方は日々違う、関わる人によっても違う。冷静に、柔軟な対応が必要となる。

自分がされて嬉しいこと、嫌なことという直感を大事にしている。

ケアの慣習と感覚とのずれを感じることもある。

3. 小括

(1) 事前の関係性の構築

施設職員の推察において、事前の関係性を構築しておくことが重要であることは、全てのインタビューが語っている。それは、表出困難であっても、基本的な信頼関係は自発的な表出を促し、施設職員による気づきや理解を深めるためでもある（J氏、K氏、N氏）。また、事前訪問などで以前の暮らしを垣間見ることや家族との対話から、自宅に近い生活環境や習慣を知りその再現に配慮することも、関係性の構築に有効である（J氏、K氏、L氏）。すなわち、事前の関係性の構築には、意思の存在や変化に対する関心や気づきを高めるの効果と、馴染みある生活環境への理解を深める効果が期待される。

こうしたケアに先立つ事前の関係性の構築について、グループホームなど、長期に生活を共にするという施設においては、本人と介護職の関係性は深くなりやすい（L氏）。と述べられるように、施設職員においても、業務形態上の関わり方の違いから、関係性のとり方には違いがあるようである。

それでも、関係性の構築についての考え方は一様に、究極的には人と人の営みであり、愛情や本心で根気強く関わることが重要であり（J氏、L氏、N氏）、日常的に関わりの積み重ねや試行錯誤（M氏）に支えられていることが語られるなど、インタビューに共通的な姿勢として述べられていた。これらは、表出困難となっても変わらず、人としての尊厳を尊重する倫理に通じるものである。

(2) 生の履歴からの気づき

表出困難な意思の推察においては、重度の認知症などによって、言語的表出が難しくなった高齢者ほど、仕草、目線、表情、雰囲気などに普段との変化を見つけて、直感的に感じ取ることが必要となる（J氏、L氏、N氏）。そうした微細な表出を直感的に捉えるため、日ごろの関りから表出困難な意思や生の履歴に関心を持って関わっている。

施設職員は共通して生の履歴など個別性への関心が高く、自宅への訪問、家族との対話、連携資料など、本人の周囲から得られる情報から、気づきの起点を得ていた。こうした広い視野で意思を推察する視点は信頼関係性の浅い期間には特に重要であり、衝突の回避にも有効である（J氏、K氏、M氏）。自宅に近い生活環境や生の履歴に沿った習慣の再現することも、安心して暮らせる場所への気づきとして取り組んでいた（J氏、M氏）。

長期的な関わりの中で信頼関係が構築されると、本人の警戒感も和らぎ、自然な表出が出てくる。また、施設職員も表出や変化に気づきやすくなるなど、より良い気づきへの土台となっている。

一方で、十分に信頼関係が構築されるまでには時間を要するが、施設職員は、落ち着いて関わるための十分な時間を設けにくいという課題もある（M、N氏）。

(3) 専門性による解釈の冷静さ

施設職員は立場や役割の違いによって、本人や家族との間で求められる関係性が異なることがある（J氏、M氏、N氏）。また、施設職員としては、冷静な視点も重要である。疾病や障がいに関する専門的な知識の研鑽も必要であり、本人の意思は、対面する人や場所によって多面性をもつため、家族介護者と施設職員、あるいは施設職員間でもとらえ方にはズレや違いが生じることがある（J氏、M氏）。

意思の推察のズレや違いは生じて然るべきものであり、捉えた意思に確信がもてないこともある。そのため、自分がされて嬉しいことや嫌なことという感覚や、本人の幸せを見据える気持ちが共有されていること重要である（M氏、N氏）。認知症などによる揺らぎもあるため、本人の健康状態などの多様な困難に配慮しながら、冷静、柔軟に対応をすることが必要とされる（J氏、M氏、N氏）。

一方で、介護経験の浅い人は感覚的なケアに偏りやすいこともあり、先入観にとらわれず意思を推察しようとする反面、配慮に欠けた関わり方になることもある（K氏、M氏）。

(4) 推察した意思の評価

表出困難さを抱える高齢者に対して、専門性に基づいて、頑張ってもらうことや規律正しさを得られる幸せは限られているという意識もあり、本人の状態や意思を尊重した時間の過ごし方が評価されやすい（M氏、N氏）。

また、懸命の推察であっても確信を得ることは困難であり、関わりの中には多くの試行錯誤を含んでいる。多様な状況や視点があり、ケアの慣習と気づいた感覚にズレが生じることもある。常に正しい方法などはなく、人と人の営みとして愛情や本心に回帰して関わるのが欠かせない（M氏、N氏）。その関わりの蓄積から体験的に理解することは、家族に代わることができないまでも、家庭的であろうとする際に不可欠となってくる（J氏、K氏、L氏）。

関係性の構築や個別性の収集などに高い専門性を必要とするものの、推察した意思の確からしさについては妥当性と不確実性をあわせもって捉えられている。推察の過程の多くは、誠実であろうという倫理感や理念に支えられながらも、個別性にもとづいて繰り返される点では、家族介護者との共通点が確認できた。

4. 施設職員の負担や葛藤に関する調査結果（第4調査）

(1) J氏の調査結果

分析過程

図5-7 SCATによる分析 2-J

発話者番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外 の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)
19 A	うん、どうやって介護すればいいんだろうって、その介護することが中心になって、この人たちを理解しようと、人と人を理解しようという、そういうところがちょっと分からなかったっていうか、でも、実際に触れ合ってみてね、そういう会を設けましたよね。出会って来て、ああ、自分たちは、あの、介護がこう、怖いとかね、こう、どんどん進んでいく過程の中でどう触れ合ったらいいかわからなかったと思う。本人たちはこんなに前向きにね、もう明日症状が進行するかも分からない、どうなるかわからない、でも、前を向いていこうっていう、そういう気持ちがあることが、自分たちがやれる、気持ちがあるのかというのを、支援者が感じました。	介護することが中心／人と人を理解しよう／分からなかった／実際に触れ合ってみて／出会って来て／本人たちは前向きに／どうなるかわからない／前を向いていこう／気持ちがある／自分たちが何なのか／支援者が感じた	介護の方法や、課題を解決することしか見ていない／認識／本人や家族／深く理解し、感じることで／重要／支援者自身／前向き／支援者としての向き合い方を知った	施設職員の介護への向き合い方の変化／本人や家族への深い理解／前向きと癒し	介護という課題の解決にとらわれている内は分からなかった／関わり方／本人や家族介護者の気持ち／表出困難な意思を深く理解し、感じることで／人として理解しようという姿勢／施設介護者の支援者としての向き合い方を知った
29 A	うん、ケアマネとしてとか、あの、介護職員としてとかではなくって、本当に若年認知症の本人や家族を、と、あの、向き合うためにどうすればいいかっていう、この横のつながりによって、私たちはこういうふうにしたほうが、あの、いいのかなとか、じゃあ、あの、地域の、その、民生委員さんたちは、じゃあ、自分たちは声掛けをこししようとかって、そういうふうな大きなう、1つのこ、枠組みができていった。しかも、強制でなく、人として自分たちを見てほしいという希望があったので。	ケアマネとして／介護職員として／とかではなく／本人や家族と向き合うため／どうすればいいか／私たちがこういうふうにしたほうが、いいの／地域の自分たち／声掛けをこししよう／枠組みができていった	施設職員という役割ではなく／同じ立場として／向き合う事／重視／地域にも同じ気持ち／芽生え／それぞれの出来ること／取り組んだ／枠組みになった	向き合い方を変えること／地域への意識の広がりが	施設職員や家族介護者という役割／人として対等な関係／向き合う姿勢／支え合いの関係
51 A	うん、やっぱりそういうことやと思う。対人関係って、介護する、されるとか置いて、同じ人間として考えたときに、あなたのその今の大変さとか、つらさ、私が完ぺきにそれを知ることではないけど、でも少しでも分かってくれればって思う気持ち、そこが、やっぱり通じる。やっぱり全てが分かるわけじゃないから。	介護する、されるとか置いて／同じ人間として考えたとき／大変さ／つらさ／完ぺきに／それを知ることではない／少しでも分かってくれれば／思う気持ちが通じる／全てが分かるわけじゃない／どんなに／同じ	同じ人間として関わること／大変さ、つらさ／少しでも分かってくれれば／全てが完ぺきに／分かるわけはない／通じるものがある。	同じ人として向き合う必要性／少しでも理解しようとする気持ち	専門職として／人として対等な関係／向き合う姿勢／介護者も支援者／心を開いて
53 A	うん、そうそうそうそう。対人関係っていうところが重要だと思ってる上ではね。どんなに重度になってもそれは同じだと思ってる。そこをやっぱ基本きっちり、あの、持っていれば、向こうの方もそうかなと思う。私が介護するから楽になつたっていうことって一切ないですよ。				
55 A	うん、だって、24時間介護だから。あの、あの、この前みたいに思い出したとき、この時間預けてでもしたいと思えるような、仲間と会いたいって思えるような、そういう会っていいのね。で、来てても本当に、自分が一番大変だと思ってる、話を聞いてあげると大変なんです。だから、あ、自分はそこでまず勇気を持って、で、それを聞いた支援者の人たちが、自分たちが思う以上に大変なのに、こんなに前向きに考える、この人たちは一体何なんだろう。	24時間介護／仲間と会いたい／思えるような会って／支援者の人たちが、自分たちが思う以上に大変／前向きに考える	常に介護と向き合う家族が／仲間と会って話せる機会／作りたい／仲間の話を聞き、前向きに向き合う／思いを知る	24時間日々介護と向き合い、孤軍奮闘する家族／一人じゃない	日々介護と向き合う家族が／家族介護者の仲間、一人じゃない／向き合おうとしている姿／前向きになっていく
60 A	ていうことが一番、あの、大事なのがやっぱり支援する人たちが、あの、変わる。だって、利用者さんたちは変わるわけじゃないから、自分たちが変わらない。そういう偏見はないけども、拘束とかそういうものをなくさない限り、その若年というのはどこも、こう、扉が開かないっていうことがあります。まあ、そういう意味で扉をちょっと、開けるための一手段です。それで、それ、支援者の人たちが、心が、本当に私、癒やされます、確かに。うん。だから、自分たちも癒やされる。で、本人たちも癒やされるっていう、相乗効果。	支援する人たちが、変わる／利用者さんたちは変わるわけじゃない／支援者の人たちが、心が、癒やされる／自分たちも癒やされる／本人たちも癒やされる／相乗効果。	出会うの場を通し／支援者が偏見なく関わり方が変わる／お互いに／癒し合える関係になる	支援者同士の支えあい方／相乗効果	支援者が先入観や壁を越えて／人として向き合うように変わることで／施設職員自身の心も癒やされていく／相乗効果がある
110 A	だから立場で、私の立場はこういう立場、その立場は必要なんです。例えば本当に走り回らうとした時、何のために行くんですかみたいなね。やっぱりそこで、「でも、どうして行きたいのか教えて」、そこで、あの、話を聞く。そして、何か代わってもらって、そこで話をさせて。	私の立場／例えば本当に走り回らうとした時、話を聞く／代わって	表出困難な意思／交代してメリハリ／支援者としての役割	施設職員と本人の間に閉塞感	施設職員と本人の間に閉塞感／交代してメリハリ／支援者としての役割
113 A	わかるよね、何か、今日は何かおかしんじゃない？のみたいな、やっぱり、あの、あそこにいると、空気を感じる。今日は利用者さん、元気ないと思ったら、職員誰かが、やっぱり元気がない。私が元気がない。私が元気ないと、職員に感化される。だから、私が元気にならない。だから空気がこう、変わるんです。	空気を感じる／今日／利用者さん、元気ない／職員の誰かが、元気がない／私が元気がない／私が元気にならない／空気が変わる	雰囲気／施設職員と利用者同士／Well-Being／気持ちを立て直し、向き合う	施設職員のつらさ／相互への影響	施設職員のつらさ／雰囲気／本人と施設職員のWell-Being／相互に影響あっている
125 A	家族会っていうよりね、あの、お電話があったり、おいでになったり。うん、やっぱり。だから今回の〇月〇日は、卒業した人たちも、今の来ている人たちもみんな三々五々来て、思い出話、語りましようっていうことなんです。	家族会／お電話があったり、おいでになったり／卒業した人たちも、今の来ている人たちもみんな／語りましようっていうこと	家族会という形／電話や対面での相談／話したいときは、いつでも受け入れる	介護から看取った後の関係もある	家族会はその場だけではなく／電話や対面、話したいときに、いつでも受け入れる関係。

ストーリーライン

施設職員は、本人や家族の気持ちや関わり方は介護という課題の解決にとらわれている内は分からなかった。本人の表出困難な意思を深く理解し、感じることで、人として理解しようという姿勢が生まれ、施設介護者の支援者としての向き合い方を知った。

本人や家族の気持ちは、専門職としてや施設職員や家族介護者という役割で知ろうとするものではなく、人として対等な関係から寄り添うことが重要である。そうした向き合う姿勢から、介護者も支援者に心を開いて対等でいられるようになり、支え合いの関係も広

がった。施設職員と本人の間に閉塞感が生じるようなときは、交代してメリハリをつけるのも、支援者としての役割である。そうした施設職員のつらさは雰囲気でわかる。本人と施設職員の Well-Being は相互に影響しあっている。

日々介護と向き合う家族が、同じように介護に向き合う家族介護者の仲間や施設職員と出会って、向き合おうとしている姿や一人じゃない事を知り、前向きになっていく。施設職員も、こうした本人や家族介護者の気持ちを知り、支援者として先入観や壁を越えて人として向き合うように変わることができた。壁を越えるにしたがって、施設職員自身の心も癒やされていくという相乗効果がある。

施設職員はこうした経験を踏まえ、本人と家族どちらが辛い顔をしているか、しっかりと見なければいけない。抱え込んでいる、苦しんでいる方を優先して、歩み寄っていく。やっとの思いで出会いに来た家族の思い、キチンと受けとめていく。家族会はその場だけではなく、電話や対面して、話したいときに、いつでも受け入れる関係が重要である。

理論記述

施設職員は、介護という課題の解決にとらわれず、人として理解しようという姿勢が必要である。

本人や家族の気持ちは、人として対等な関係で寄り添い、自然な関係の中から知ることが重要である。

家族会はその場だけではなく、電話や対面して、話したいときに、いつでも受け入れる関係が重要である。

施設職員と本人の間に閉塞感が生じるようなときは、交代してメリハリをつけることなど、支援者としての役割も必要である。

(2) K 氏の調査結果
分析過程

図 5-8 SCAT による分析 2-K

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明する ようなテキスト外 の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)
8	A	そうですね、そうですね、ここに来たらみんな悩みをわ一つと書いて。				
10	A	じゃないですね。朝来て申し送りで、家の申し送りもあるんで、してから、みんな入るっていう。働きやすいのかなど。ここに来れば子どもたちは褒めてくれるし、学校の先生だった利用者の方もいっしょなので、宿題してくれるし、会議に出ても何にも言われないし、お葬式も連れていくし、おじいちゃん、おばあちゃん、亡くなったよっていったら、ちゃんと連れていくし、そういう何か関係が。	ここに来たらみんな悩みをわ一つと書いて／朝来て申し送りで、家の申し送りもある／働きやすい／ここに来れば子どもたちは褒めてくれる／宿題見てくれる／お葬式も連れていく	仕事としての関係だけではなく／家庭の悩みを語りあう／子育ての場／仕事の魅力も高めていく／施設職員の暮らしまで関係をもっていく	幼老共生／働きやすい環境／施設職員のプライベートとの連続性	プライベートとの連続性／施設職員の暮らしや子育てまで関心をもつ／働きやすい環境
28	A	それこそこう、やっぱり私生活の部分もきちんと把握して書いて、さりげなく声を掛けるし、「どうですか、子どもさん」っていう声を掛けるながら、いや、実は「って言うことをやっぱり聞きとる。仕事じゃない部分のフォローをしよう」と書いてる。	私生活の部分もきちんと把握／さりげなく声を掛ける／「いや、実は」って言うことを聞きとる／仕事じゃない部分のフォローをしよう	施設職員のプライベートの課題／さりげなく声を掛ける／仕事じゃない部分のフォローまで	施設職員の気持ちの健康	さりげなく声を掛ける／仕事ではない部分もフォロー
34	A	あの、あの、何にでも、何の話でも、その、お年寄りが一番なので、利用者の方もそうなんです、一番だということの話をまずしておけば、その、絶対ぶれない、それだけまずはやってみる。あとはもう、書いておられるように、毎日スタッフの顔を見る。朝どくかなっていうのを、心のゆとりを自分にとっておかないと。	お年寄りが一番／一番だの話をまずしておけば、絶対ぶれない／毎日スタッフの顔を見る／朝どくかな／心のゆとりを自分にとっておかないと	利用者中心の理念をしっかりと共有し／施設職員の表情など／日々気を配る／施設職員自身のゆとり	理念の共有／心の疲労や葛藤／ゆとりを持つこと	本人中心の「理念」を共有／毎日の施設職員の表情を確認／心の疲労や葛藤に気を配る／施設職員自身のゆとり
68	A	難しいです。もう、私が外に出て、張り切って言えるのはやっぱりスタッフの皆さんが一番大事にしてくれているから。要介護5でも在宅で暮らせるように考えてくれています。グループホームに入居しても、その方が今でも外に探したい記憶で歩かれるのも、みんなもう毎日1日何回も歩いて、「どこでしたか」って言いながら、「疲れましたよ」って言って、足がもつれるまで一緒に歩いて、結局そういう期間は長くないと、みんなちゃんと分かっているから、今、この方と一緒に歩いていければ、いずれね。	難しいです／スタッフの皆さんが一番大事にしてくれている／今でも外に探したい記憶で歩かれる／毎日1日何回も歩いて、足がもつれるまで一緒に歩いて／期間は長くない／みんなちゃんと分かっている／今、この方と一緒に歩いていければ、いずれね	(尊敬を尊重することは)簡単ではない／施設職員が理解してくれている／本人が何か大切な思いを取り戻そうしている／探そうとしている気持ちを大切に／「今」の思いを大切にしたい／共有	「今」の思いを大切にしたい／人権・尊敬の尊重	長くはない本人の「今」の思いを大切にしたい／人権・尊敬の尊重／施設職員間で共有できている／外に出て、自信をもって話すことが出来る
163	A	そうですね。在宅はとにかくこう、今日は良くて明日、ご家族はもう、もう限界だ、と言われる、この繰り返しなので、連絡ノートはあんなに書く。だ、ご家族によっては大きなノートに書いて、とにかくありとあらゆる、不満、書いていただく。それをお互いに交換日記みたいにして。お疲れさまですねっていう、交換日記スタイルの方もあられるし、息子さんとかは特にすね。	在宅はとにかく／今日は良くて明日の／もう限界／この繰り返しなので、連絡ノート／あらゆる、不満、書いていただく	在宅でケアをしている家族／気持ちの揺らぎ／多様な葛藤や不満	家族介護者への支援	在宅でケアをしている家族／気持ちの揺らぎ／今日は良くて、次の日にはもう限界／繰り返し／連絡ノートなど／多様な葛藤や不満／ありとあらゆる事を書いてもらい
171	A	そんなところをダイレクトに在宅はね。「今日、母が着替えてきませんでした、やめてください」というのをやったスタッフが聞いて帰るので、かなりのストレスが、ここの部分のフォローを毎日やる／訪問でご家族と話や／そんなこと自分で分かってた／苦しかったんです	ダイレクトに／在宅は／スタッフが聞いて帰ってくる／かなりのストレス／ここの部分のフォローを毎日やる／訪問でご家族と話や／そんなこと自分で分かってた／苦しかったんです	本人の望む過ごし方を尊重／嫌がることはしない／家族介護者の希望／日々の支援／家族の言葉／受容的な支援	本人の思い／介護の規範的なイメージ／やり場のない気持ち	本人の望む過ごし方を尊重／嫌がることはしない／介護の規範的なイメージ／家族の言葉／やり場のない気持ち／受容的な支援
173	A	ね、こんな部分のフォローを毎日やる、訪問でご家族と話す。「そんなこと自分で分かってた」って言われる。「自分も体がリウマチで、苦しかった」、「苦しかったんです」って言いながら、最初は、面談のときっていうのは、結構やっぱり時間をかけてますね。ご家族によってはまた同じことを聞いて、また同じ質問で、病気が何ですか、それいっただけで、じゃあ、そうやって今までのサービス使っているか、入院はいつしたんですかっていう質問だけで、また同じかかっていう顔で、わけられるでしょう。	最初は、時間をかけます／同じことを聞いて、同じ質問で、病気が何ですか、それいっただけで、じゃあ、そうやって今までのサービス使っているか、入院はいつしたんですかっていう質問だけで、また同じかかっていう顔で、わけられるでしょう	家族が話したいことは違う／仕事として、同じ質問で繰り返された／専門職としての関係を見逃かし／専門職に失望している人／時には、もういいですという人もいます	専門職／繰り返し同じ質問を投げかけることに対する不信感、呆れ	仕事として、決まりきった同じ質問を繰り返されてきた／専門職の関わりを見逃かしている／呆れる／家族が話したいことに時間をかける
187	A	あの、もういいですっていう方もあられるし、そこはやっぱりこう、あの、気を付けているところかなど。じゃないと、病気になるって大変なことって当たり前のじゃないですか、ご本人も大変なんです。でも、その以前の暮らしをきちんとやっぱり聞き取って、本当に病気になるって、何がきっかけで、時間が難しくなったり、おっくうになってきたのかっていう。	病気になるって大変なことって当たり前のじゃないですか、ご本人も大変なんです。でも、その以前の暮らしをきちんとやっぱり聞き取って、本当に病気になるって、何がきっかけで、時間が難しくなったり、おっくうになってきたのかっていう	本人がどのように生きてこられたか、気を付けている／病気で難しくなったこと、本人も葛藤してきたこと／整理すると話し始めやすくなる、聞きやすい	本人中心で進められるスムーズな対話／体系的に話を聞く	以前の暮らしからの流れ／病気で難しくなってきたこと／本人がどう生きてきたか／家族はどういう気持ちで向き合ってきたか／その時の葛藤など／本人の存在を中心に対話
191	A	そのまわりはそこそこ聞き出すと、なん、「こんなに散らかす人じゃなかったんです」「几帳面だったんです。全然見えませんね」って言いながら、「で、しょう」って言いながら、あ、こんなものがここにあってっていう話をされ始めると、非常に聞きやすい。	そのまわりはそこそこ聞き出すと、なん、「こんなに散らかす人じゃなかったんです」「几帳面だったんです。全然見えませんね」って言いながら、「で、しょう」って言いながら、あ、こんなものがここにあってっていう話をされ始めると、非常に聞きやすい			
192	A	やっぱり素人で働く、経験もなく働くので、ものすごく自分に持った感情っていうのは、もう自分が悪い人間で、こんなに自分が性格悪かったら思ってしまうぐらい跳ね返りしてもすごい大きいんですね。	経験があるとも予測で全部動くので、どうせ外に行くだろう／先回りしてもう靴をおいておこう／すぐ考えが湧く／未経験の方で来ていただいたほうが／待つことが一番大事な	ケアを通した自己像／葛藤／未経験者の過剰な自責に警戒	施設職員の定着／ケアの負担／丁寧な支援の必要性	未経験の施設職員／自己像と葛藤／過剰な自責／ケアの負担
212	A	経験があるとも予測で全部動くので、どうせ外に行くだろう、どうせまた外に行くだろうとか、でも先回りしてもう靴をおいておこうとか、すぐそういう考えが湧くんです。だからやっぱり未経験の方で来ていただいたほうが。	経験があるとも予測で全部動くので、どうせ外に行くだろう／先回りしてもう靴をおいておこう／すぐ考えが湧く／未経験の方で来ていただいたほうが／待つことが一番大事な	経験があると、本人の気持ちを持たず／声を掛けたり、先回りして行動を制限したりする／未経験の方は、待つ姿勢となる／自然と本人の気持ちを尊重できる	専門性がかかって／本人の気持ちを持つことが出来ない	未経験の人／本人の行動をよく見て、よく聞こうとする／本人の思いを見つめようとする／経験者の人／先入観や予測で判断してしまう
215	A	はい、はい、関わりをされるだろうね、様子を見るでしょう。で、待つし。				
217	A	で、待つケアというのが一番大事な。で、待つし。				
219	A	予測もできないでしょう、やっぱり経験ないからさ、待つでしょう。その方の目的が見えてからじゃないと声掛けしきれないので、それが一番いいですね。				
221	A					

ストーリーライン

在宅でケアをしている家族は気持ちの揺らぎがあり、今日は良くて、次の日にはもう限界だと言われる、その繰り返しである。連絡ノートなどで、ありとあらゆる事を書いてもらい、それを交換日記のようにやり取りして支援している。しかし、家族介護者は介護

の規範的なイメージや多様な葛藤や不満から、やり場のない気持ちを抱えることがある。

施設職員は、こうした家族の言葉や本人の望む過ごし方を尊重したケアにおける自己像との葛藤などによって傷つき過剰な自責をすることがあるため、心の疲弊や葛藤に気を配る必要がある。そのため、施設職員の暮らしや子育てまで関心をもって、さりげなく声をかけるなど、仕事ではない部分もフォローし、施設職員自身のゆとりを大切にしている。

こうした、プライベートとの連続性は、施設職員の働きやすい環境を図るだけではなく、施設の有する本人中心の「理念」を共有し、実践するためにも重要である。これによって、本人の望む過ごし方を尊重し、嫌がることはしないという人間的なケアが実践できている。こうした、理念を施設職員間で共有できているので、管理職は外に出て、自信をもって話すことができる。

こうした理念は、家族介護者との面接でも必要である。家族は、「病気は何ですか」、「いつからですか」、「いつ頃入院して」・・・など、仕事として、決まりきった同じ質問を繰り返されてきたことで、同じ質問をしてくる専門職の関わり方を見透かしている。中には、もういいですと呆れる人もいる。

施設職員は、本人がどう生きてきたか、家族はどういう気持ちで向き合ってきたかなど、家族が話したいことに時間をかける聞き方が求められる。こうした関わりから、これは性格ですよ、前は几帳面だった、病気でこうなったなど、以前の暮らしからの流れや本人の存在を中心に対話をすることができる。

本人や家族の苦しみや息づかいを理解する、気付くことが重要である。一人ひとりの存在に寄り添う、かけがえのない愛情を大切にする。こうした、長くはない本人の「今」の思いを大切にすることが、認知症の人の人権・尊厳の尊重であり、視野を広げて関わらなければならない。

存在を尊重した関わりについて、未経験の施設職員は、本人の行動をよく見て、よく聞こうとする、慎重に声かけるので、かえって個別性をよく見ている時がある。経験者は、本人の行動に対して、コミュニケーション取っているようで、先入観や予測で動いている時がある。利用者のことを一番に、中心に考えるという本人中心の「理念」が重要で、待つケアの先に、本人の思いを見つけようとすることが可能になる。

理論記述

施設職員にとって、家族のやり場のない思いの打ち明けは、負担となる場合がある。

施設職員が抱える葛藤や不安は、暮らしや子育てまで関心をもって、心の疲弊や葛藤に気を配る必要がある。

本人との関わりでは、本人がどう生きてきたかを知り、「今」の思いを大切にすることによって、本人の思いを見つけようとする必要がある。

本人の存在を中心に対話することで、家族の思いがよく分かるようになる。

(3) M氏の調査結果
分析過程

図 59 SCAT による分析 2-M

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
86	A	まあ、本人との関係がうまくとれていないような場合も多い、そういう時は、うん。関係性だったり、本人とかかわり方だったり、色んなところがやっぱり。まず最初は、歯車が回らない時、ちょっとなんか、気持ちがあつてやっているけど、やっぱり、そういう気持ちに対する成果がなかなか、どうしても成果が見えにくい。	関係／とれていない／多い／色んなところ／歯車が回らない／気持ちがあつて／気持ちに対する成果／見えにくい	信頼関係／うまくいかない／懸命に／実感／確信が得られない	負担の原因／空回り	信頼関係ができるまでは空回りすることもある／気持ちだけではうまくいかないこともある／成果が見えにくい
89	A	やっぱりそこで、ちょっと行き詰ったりであったり、環境的に施設の中ということで、閉鎖的な空間の中での仕事になってくるけん、まあ、そういう場合、利用者を外に出してっていうのも大事な仕事なんやけど。やっぱりそこに入ってきた子たち2～3年たった時に、こう、毎日同じようなことを繰り返して、俺何やってんだろって思う子たちが多い、なかなか、うん。	行き詰ったり／施設／閉鎖的な空間／2～3年たった時／毎日同じ／何やってんだろ／思う子たちが多い	労働環境／閉そく感／同じことの繰り返し／成果の見えにくさ	関係性の築きにくさ／空回り／虚無感	同じことの繰り返し／空回りしているような虚無感
91	A	まあ、支え、まずやっぱり、そういうことが、まず出来るといえば、まわりの支援者たちよね。一緒に仕事をする人が、どっだけフォローしてくれるかに、たぶん、尽きちゃうけん。上司にしても、例えば、まあたぶんその上司は、失敗を許さんスタンスだと、その人は伸びないと思う、おそろくもう、失敗できないけん。失敗を、失敗してなんぼの世界やけん。	支え／一緒に仕事をする人／フォロー／上司／失敗を許さん／その人は伸びない／失敗してなんぼの世界	仕事仲間／支え合い／試行錯誤／上司の指導／失敗の繰り返し	リスク管理／失敗は見えやすい／成功は見えにくい	仲間同士の良好な関係／支え合いが重要／試行錯誤を許す上司の態度
94	A	まあ、とにかく、チームの中での関係が良好であればやっぱりやりやすいし、そこに頼ってばかりでも、社会人としてもどうかと思うし、その状態からどれだけ自分で勉強できるか。ずっとやって3年目くらいから、このままじゃダメだと思つて、がむしやらに自閉症とかの勉強をした時期があるけん。やっぱりそこで、どれだけ、深めれば深めるほど、専門分野やけん、この世界。そこに対して、どれだけ自分が。	チーム／関係が良好／やりやすい／頼ってばかり／自分で勉強／専門分野	専門職同士の関係／一人一人の主体性／自己研鑽／奥深さ	行き詰った経験／打開して開けた世界	仲間同士の良好な関係／専門性への主体的な努力
95	A	まあ、仕事やけん、会社出てしまえば、みんなそれぞれ家庭であったり、趣味の時間があるわけで、そこを割いても、なんとか、そこでは勉強しないと通用しなくなってくるけん。自己を高めるために、努力も必要やと思う。周りが支えてくれて、自分の努力、この二つが合わないと、やっぱり、支援ってなかなかうまく回っていかないと思う。そして、意識的にやっぱりまず、失敗ありきっていうのをしっかり分かっておかないと。	仕事／家庭／趣味／そこを割いて／勉強／努力／周りが支えてくれて／この二つ／支援／失敗ありき	プライベートな時間／犠牲にして／主体的に／支えに甘える／自己研鑽／失敗にめげない意識	線引き／主体性／信頼関係の構築のため働きかけ	仕事としての線引き／専門性への主体的な努力／プライベートな時間での学び／失敗にめげない意識
99	A	まあ、わかるわかる。まあ、あの、目に見えんやん、こういうことって、目に見えんけど、まあ、実際そういうことって、みんな見てるよ、あ、この人、よく利用者さんと話してるなあ、っていうのは、みんな。	目に見えん／実際／みんな見てる／よく利用者さんと話してる	懸命に関わる人／見えにくい／努力／みんな理解している	見えない／見てる／主体性	懸命に関わる努力は見えにくい／信頼関係の構築／努力／みんな理解している
105	A	ただやっぱり、知識とこういうのがリンクした時に、やっぱりちょっと、この仕事の面白さを感じる事ができるかなって、学んだこと。	知識／リンク／この仕事／面白さ	知識と関係性の一致／うまくいったとき／成功の実感	試行錯誤／努力が突った実感／表出困難な意思	知識と実践がうまくかみ合ったとき／表出困難な意思を捉えた実感／努力が突った喜び
111	A	俺たちは、知識を交えた俺たちの方があつて言うことは、もちろんそれはない、知識を越えたものもあるかもしれないし、ただ意見は間違いないと、同じ状況を見たときに意見が割れることは多々ある、現状でもそれは。	知識／俺たちの方があつて／それはない／知識を越えたもの／同じ状況／意見が割れる	専門性／確信はない／家族の視点／意見の相違	家族の意見の尊重	専門性に基づく施設職員の解釈／直感に基づく家族の解釈
114	A	思い詰めてもいい仕事はできないから。なんか、まじめな職員ほど、こっちは、気にかけてケアしてやらないと、根詰めすぎるなっていうブレーキがあるのなあって。その重みに耐えきれなくなるときに、早期退職とかにつながってしまうけん。まあ、ある程度、正直ある程度どころで気持ち切り替えようぜって、とか、早く帰ろうぜって、すばっと。	思い詰めていい仕事はできない／まじめな職員／気にかけてケア／ブレーキがある／重みに耐えきれない／早期退職／気持ち切り替えようぜ／早く帰ろうぜ	気にかかる職員／仲間のサポート	バーンアウト	真面目な職員ほど仲間の支えが必要／バーンアウトなどの早期退職
119	A	特にこの仕事、どうしても対ひとの話で、自分に余裕がなかったら伝わってしまふけん。しつかり、どっだけ切り替えるのか。家庭でやっている人も、家庭でやっている人は毎日逃げ場がないと思うけん、その中で、例えばもう、ヘルパーとか福祉サービを使って、とにかく心を逃がせる場所、作れるかが鍵やと思うけど、おれは。	特に／対ひとの話／余裕／伝わってしまふけん／毎日逃げ場がない／心を逃がせる場所／鍵	人と人／逃げ場がない／余裕のなさ／家族ケアの孤立／適切な支援	社会資源	ケアする人の心の余裕が伝わってしまふ／切り替えや支えを使って／逃げ場がない／余裕／重要
123	A	まあ、俺に関して言えば、顔や様子をみて「大丈夫や」っていう事によって、声掛けするかな、もつと、昔おれが余裕がないとき、なんでうまくいかんかって話で、まあ、正直、若い子たちよりも知識的なアドバンテージはだいぶもつとるけん、知識的なアプローチで、こうやってみたら？とか、もつと視野を広げてみたら？とか、って話を、よく若手職員にすることは多い。	顔／様子／大丈夫や／声掛け／若い子／知識的なアドバンテージ／視野を広げて	表情／振る舞い／自分の体験／助言	若手の葛藤への共感	表情や振る舞い／余裕のない仲間／葛藤した経験／共感して気づく
137	A	まあ、正直、やっぱり、家庭でそういう、言葉がない人として、本当もう、経験則やと思うたよね、いままで、経験則と、自分の願望がどんどんそこで絡まり合つて、気が付いたら自分の願望ばかりになつてる人もおると思う、きつと。自分がこうあつてほしいとか、例えば父ちゃん昔アレ好きやっつてけん、今こうやって過ごさせて、でもその人今身体きついけん嫌だつて思つてると思うし、こうではないという人もおるともれんけど、きつともう、そういう段階の人もおると思つたよね。	家庭／言葉がない人／経験則／自分の願望／絡まり合つて／願望ばかり／昔／今／そういう段階の人	家庭でのケア／経験を頼るしかない／知識的な支えがない／思いが流れやすい／価値観が変わる人	支え／知識／不安定な家族ケア／経験則の限界	知識や支えが少ない家族ケア／本人の意思と家族の願いが絡み合う／本人の価値観が変わる場合／昔の本人ならという経験則
141	A	だから、そこで絶対でその、ズレとかは生じるかもしれないけどまあ、なんか、でもそれはもう、しかたがないのかなと、まあ、その、しつかり、お互いに気持ちがあれば、それがもう、いいんじゃない？ってもう、俺は思うけど。	ズレとかは生じる／それはもう、しかたがない／お互いに気持ちがあれば／いいんじゃない？	施設職員の解釈／家族の解釈／当然生じるズレ／幸せを願う思い	表出困難な意思の尊重／多面性	違いがあつて当然／それぞれに表出困難な意思を尊重する思い
144	A	まあ、そういう時に、ちょっと助言ができる人があつた方が、まあ、だから福祉サービス側がその、家族との関係性づくりをしつかりすること、ちょっとした助言とかをできるような仕組みが、あるのかないのか、そこらへん詳しくわかんけど、たら、より、その言葉がない人の支援、が充実するんじゃないのかなと、思うけど。	そういう時／助言ができる人／福祉サービス側／家族との関係性づくり／仕組み／言葉がない人の支援／充実	社会資源／家族介護者／経験上の不足感	意思の表出が困難な人へのケア	専門職による家族介護者支援／家族によるケアの充実

ストーリーライン

意思の尊重をめぐつて、信頼関係ができるまでは空回りすることも多く、気持ちだけではうまくいかない。成果が見えにくいため、同じことの繰り返し、空回りしているような虚無感が生じることもある。

そのため、試行錯誤を許す上司の態度であったり、仲間同士の良好な関係など、施設職

員同士の支え合いが重要となる。また、プライベートな時間での学びや、信頼関係の構築のため働きかけなど、専門性への主体的な努力も欠かすことができない。

失敗にめげない意識をもって関わりつづける中、知識と実践がうまくかみ合ったときや、表出困難な意思を捉えた実感を得たときは、努力が実った喜びを感じる。こうした懸命に関わる努力は見えにくいだが、信頼関係の構築のための努力はみんな理解している。

真面目な職員ほど仲間の支えが必要で、仕事としての線引きや余裕のないままだと、バーンアウトなどの早期退職につながってしまう。余裕のない仲間は表情や振る舞いには、自身の葛藤した経験などから共感して気づくことが必要である。

知識や支えが少ない家族ケアでは、本人の意思と家族の願いも絡み合ってしまう。本人の価値観が変わる場合、昔の本人ならという経験則では対応できない。ただし、専門性に基づく施設職員の解釈と、直感に基づく家族の解釈では違いがあつて当然であり、それぞれに表出困難な意思を尊重する思いがあることが重要である。そういう点で、施設職員による家族介護者支援の余地があり、家族によるケアの充実に貢献できるだろう。表出困難な人には、ケアする人の心の余裕が伝わってしまう、特に家族介護者には逃げ場がないので、切り替えや支えを使って、余裕をつくることが重要だと思う。

理論記述

信頼関係ができるまでは、成果が見えにくく虚無的になりやすい。

試行錯誤を許す上司の態度や 仲間同士の良好な関係など、施設職員同士の支え合いが重要となる。

プライベートな時間での学びや信頼関係の構築のため働きかけなどの主体的な努力も欠かせない。表出困難な意思を捉えた実感は、努力が実った喜びとなる。

仲間同士の支え合いは、表情や振る舞いや自分の葛藤した経験を重ねた共感して気づき合うことが欠かせない。

専門職に基づく施設職員の解釈と、直感に基づく家族の解釈では違いがあつて当然であり、表出困難な意思を尊重する思いが重要である。

を交代することで支え合うことで、利用者にとっては関係性や関わり方で気分を変えてもらいながら対応している。状況は交代しても改善しないこともあるため、時間や距離を置いて、そっと見守る対応を取り入れている。介護経験が浅い人には、こうした距離の取り方が苦手な人もおり、トラブルになることがある。人として対等な関係を求めて、感情的になってしまう関わりも理解できるが、認知症であることや仕事としての配慮が不足しており、うまくいかない上、場合によっては虐待となる危険性がある。

時として感情的になるような近い距離間の関りについて、施設職員同士が普段から良好な関係を持って支え合い、時に交代しながらケアしていく施設の雰囲気はとても重要である。体制や環境が不安定な施設においては、施設職員間の支え合いがないため、施設職員は孤立しやすいなど、介護事故が生じやすい環境となるため、注意が必要である。

利用者の表出する帰宅願望などは、本当の家族や自宅に対しての特別な思いや寂しさの表れである。グループホームとして家庭的な雰囲気につとめ、できる限りの対応を行ってもなかなか解消できるものではない。家族にはそれぞれ多忙な事情があることも理解するが、利用者にとって家族の面会は大きな喜びであり、施設での暮らしもより良くなるため、わずかでも家族の時間をつくってほしい。特に、子供がいる世帯では面会の機会がなかなか作れないのに対し、夫婦のみの世帯が意思の尊重に熱心に努める機会に恵まれている。

理論記述

思いがうまく伝わらない、受け入れてもらえない時などに、つらい思いをする。

疲弊やつらさは、一緒に働いている仲間の施設職員と共有しており、支え合い、交代することで分散している。

施設職員は、本人の意思を捉えても尊重する時間や余裕が足りないため、対応できないこともある。

認知症であることへの配慮不足は、介護経験の浅い施設職員の、対等であろうとする感情的な関わりにおいて生じやすく、虐待となる危険性に注意が必要である。

施設職員同士の支え合いが機能しない施設の雰囲気において、施設職員は孤立しやすく、介護事故が生じやすい。

利用者は、本当の家族や自宅に対しての特別な思いや寂しさ有していることがあるが、グループホームとして家庭的な雰囲気につとめても、なかなか解消できるものではない。

家族にはそれぞれ多忙な事情があることも理解するが、わずかな機会でも時間をつくってほしい。

5. 小括

(1) 推察がもたらす感情的な負担

施設職員は日常の実務に加えて、推察をめぐる繊細な気づき、信頼関係の構築、専門性の獲得など、多忙な努力が求められる。また、施設職員は本人との関係において自責の念を抱えて苦しむことや、家族からのやり場のない思いの打ち明けへの受容を求められることもある（K氏、M氏、N氏）。

そのため、身体的に、精神的に、様々な負担や葛藤を抱えやすく、成果も見えにくいいため、虚無的に燃え尽きてしまう事がある。介護経験の浅い施設職員であるほど、大きな負担に耐えられず離職につながることもある（M氏）。

施設職員は介護経験の内に、身体介護の専門性だけではなく、推察をめぐる負担や葛藤の体験的な蓄積する。これによって、介護経験の浅い施設職員や家族介護者の有する負担を共感的に理解、受容するなどの支援が可能である（K氏、M氏）。

施設職員に推察の負担が生じる場合であっても、本人の意思を推察できた実感は喜びとなり、再びの関心へと循環的なが得られる機会へとつながることがある。

(2) 推察の負担に対する支援の関係性

施設職員において推察の負担は、一緒に働く施設職員同士によって共感され、交代や相談など、全てのインタビュー어가共通して、体制的な支え合いの重要性が示されていた。さらに、施設職員が抱える負担は私生活にも影響しあう可能性もあるため、仕事の内容以上の相談などにも応じ、良好な信頼関係を築くことが欠かせない（K氏、N氏）。

支え合いにおいて、施設職員は自らの推察の経験を重ねて共感することで、施設職員の抱え込みやすい負担や葛藤を感じ取り、相互に負担の軽減に努めている（J氏、K氏、M氏）。こうした推察の負担に対する支援の経験は、表出困難な高齢者の家族介護者が抱える推察の負担に対しても、体験的に寄り添うことを円滑にしている（J氏、K氏）。

施設職員同士の支え合いが機能しない場合、施設職員は孤立し、介護事故が生じることがある。また、特に介護経験の浅い人への支援は欠かせず、負担を抱えやすいだけではなく、認知症などへの配慮不足から、場合によっては虐待となる危険性もある（N氏）。

表出困難な意思を直感的捉えるため、微細な表出を見落とさないよう意識することは、感情的にも精神的にも疲労を伴うものである。緊張が続きすぎないように、適宜交代し、仲間と分かち合うことでメリハリをつけていることが分かった。

一方で、支援の方法については柔軟さや余裕のある態度が必要であるため、具体的な方法などやるべきことを作りすぎるよりも、人間として一人ひとりに関わっていく態度が求められる（J氏）。本当の家族や自宅に対する特別な思いや寂しさなど、施設として家庭的な雰囲気につとめても解消できないものもあるため、家族介護者のそれぞれ多忙な事情を理解しながらも、ケアの親身さを引き出す支援が望まれる（M氏、N氏）。

6. 第2研究の考察

(1) 直感的に捉えた意思と専門性の接点

施設職員においても、家族介護者と同様に、関心、気づき、解釈、観察・評価という、4つのサイクルから、表出困難な意思を捉えようとし、関心を蓄積していく循環が見られた。生の履歴を長期に捉えることができないものの、可能な限り家庭的であろうとする施設職員によるケアは、事前の関係性の構築の手續きが取られやすい。

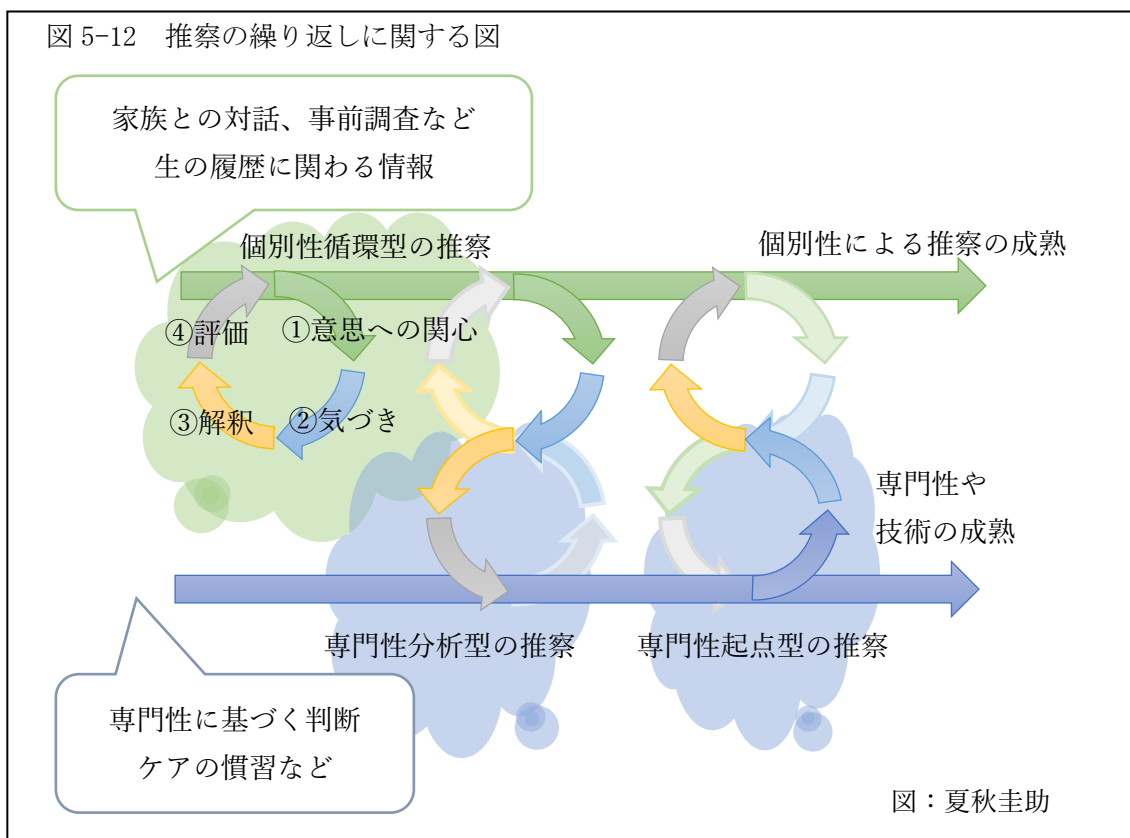
ただし、施設職員が直感的に捉えた意思やそのケアの判断は、専門性による判断との間において、しばしば葛藤が生じる。それらは、先行研究において触れた「治療・緩和の志向性」と「本人中心の志向性」の間のずれであり、施設職員は負担に向き合うこととなる。また、そうした主観と客観、治療と緩和、意思と必要などの間のずれは、関係性の違いによっても捉え方が異なるものである。

インタビューでは、施設職員同士で共有し、支え合うことことで、直感的に捉えた意思に可能な限りに応じたいという倫理の専門性として蓄積されていた。一方、施設内の関係が適切ではない場合は、介護の事故や離職につながる危険性として触れられていた。

図 5-11 推察をめぐる理論記述の整理

	J	K	L	M	N
関心・関係	重度の認知症など、表出困難になるほど、気付きや関心が重要となる。	施設職員の役割に応じて、異なる関係が求められる。	ケアが日常的な生活の側面を含むほどに、表情や仕草などの表出や変化を察する関係性が重要となる。	日常的な関係の積み重ねや試行錯誤で推察する必要がある。	普段の関わりから、表情や雰囲気の変化を見つけて意思の変化を感じ取る。
気づき	握った手の温もりや、静かさなどから、表出困難な意思を直感的に共有することも重要である。	生の履歴を共有することによって、自宅に近い生活環境や習慣の再現などへの配慮も行なわれる。	言葉にならない様な気持ちは、仕草や目線など、より繊細なやり取りになりやすい。	専門職としては、冷静な視点も重要であり、知識的な研鑽も必要である。	ケアの慣習と感覚にずれを感じることもある。
解釈	役割の違いによって、関係性が異なる。意志の表出も、対面する人や場所によって多面性をもつ。	生の履歴から得られる情報は、衝突の回避にも有効であり、両者の負担を軽減する。	本人の以前の生活や本人らしさをよく知り、興味を持って関わっていくことが重要となる。	本人の幸せを見据える気持ちが共有されていれば、捉え方の違いは重要ではない。	自分がされて嬉しいこと、嫌なことという感覚を大事にしている。
観察・評価 関心への循環	表出困難な意思を整理する技術が必要であり、寄り添いなどにおいては関係性が重要となる。	自宅への訪問や家族との対話など、本人らしさを垣間見ること、本人と介護者の関係性が深まる。	十分に信頼関係が築かれるまでには時間を要するため、安心して暮らせる場所であることも重要である。	人と人の営みであり、愛情や本心で、根気強く関わりを蓄積することが重要。	本当に楽しんでいるかの確信がもてないこともある。

図 5-12 推察の繰り返しに関する図



図：夏秋圭助

・ 個別性循環型

施設職員においても、表出困難な高齢者の個別性への関心から、気づきを得て、知りえた生の履歴などによる解釈を進めていく循環があり、家族介護者と同様に中核的な推察の循環の型である。N氏の「表情もあるし、作業してもらっても、興味が、なんというのかな、興味がある雰囲気とか、なんかしたくなさそうな感じとか、この人こういうの好きじゃないんだなとか。そういうところから始めて、でも、興味がなくなっても、周りの人たちがしてたら、興味を持ち出したりとか。そういうところから情報を集めていって。」など、複数の発言からも見受けられた。

・ 専門性分析型

施設職員は立場上、適切な距離感や冷静な判断が必要な場合があり、個別性への関心や気づきから意思の存在に気づきながらも、それが専門的な判断として妥当であるかを振り返って分析することがある。M氏の「結局、データだけじゃなくて、やっぱ目を見たもの。こういう時に喜んだよねとか、こういうの好きよねとか、そういうところの積み重ねから、きっとこういうことが言いたいのだろうなという感じで考えられたら。それも決めつけすぎたら、『支援者のエゴ』に発展してしまうけん、常になんか、本当にそれでいいのかなって言う。ちょっと離れた目線を持つようには心がけてる。」などの発言からも見受けられた。

・専門性起点型

施設職員は、専門職として関わり方やケアの理念や専門性から、意識的に関わり、表出困難な高齢者に意思の変化を事前に想定することがある。経験的に生じやすい意思の変化を想定して変化に気づきやすい専門性であり、個別性に応じることがある。J氏の「重度になっていく過程を、やっぱり見らないといけない。やっぱり、重度をよく知った人の方が、初期をするのもね、大事かなと思う。」という発言には、表出困難とになっていく過程や、その際に生じる様々な意思の変化について、専門性として理解しておくことで、本人の意思の変化や内容を捉える可能性がある。

こうした専門性による意思への関心や気づきは、必ずしも表出困難な高齢者が有している意思を気づいたものではないものの、結果となる解釈で一致する可能性を有しており、意思の推察の類型とした。

・専門性循環型

表出困難な本人の個別性に関わらない循環であり、推察とは呼べないため型としては例外であるが、K氏の「経験があるともう予測で全部動くので。どうせトイレだろう、どうせまた外に行くだろうとか、でも先回りしてもう靴なおしておこうとか、すぐそういう考えが湧くんです。」という発言から、見受けられた。

(2) 施設職員に蓄積される専門性

施設職員は、表出困難な高齢者に対する推察を経験的に蓄積し、何らかの専門性や技術を成熟させている可能性がある。J氏は「経験というか、本人の思いをどう受け止めるようになるかという、施設職員のスキル、の、あの、ものだと思うのよね。」と、経験のない人との対応に違いがあることを述べている。一方で、専門性循環型が推察として成立しないように、施設職員に蓄積される専門性とは、表出困難な高齢者の個別性への関心を高める効果のある蓄積であると考えられる。

すなわち、起点となりうる蓄積であり、専門性起点型としての専門性や技術である可能性が高い。専門性起点型としては、信頼関係を持てるような関わりや、施設職員自身が表出困難な高齢者への関心を高められるような考え方、人と人という関係性の中で、より良さを追求する姿勢であることが想定できる。

(3) 施設職員の推察の負担軽減

本調査では、施設職員の推察の負担は、主に職場内の支え合いによって解消されていた。K氏が「やっぱり私生活の部分もきちんと把握しておいて、さりげなく声を掛けるし、『どうですか、子どもさん』っていう声を掛けながら、『いや、実は』っていうことをやっぱり聞きとる、仕事じゃない部分のフォローをしようということですね。」と、職

務において感情的に関わる機会が多い分、職務外の日常で抱える負担もまた線引きなく情緒的なサポートを図っていく必要性を示していた。また、M氏が「顔や様子を見て『大丈夫や』っていう事によって、声掛けはするかな。もっと、昔おれが余裕がないとき、なんでもまくいかんって話で、まあ、正直、若い子たちよりも知識的なアドバンテージはだいぶもつとるけん」と、表情などから情緒的なサポートの必要性、情報的なサポートの必要性などを支援しているものと思われる。

このように、施設職員の推察は、職場内の上長が丁寧に配慮しながらサポートを行い、あるいは、施設職員同士の支え合いの中で解消されており、インタビュー自身の過酷な負担の体験などについては語りが少なかった。

第6章 総合考察

1. 研究目的への応答

本研究は、明確に表出することが困難な高齢者の意思を尊重するにあたって、家族介護者や施設職員による推察の特性を明らかにすることを目的として、第1研究では、家族介護者による推察の特性を、第2研究では、施設職員による推察の特性を調査した。

本調査から明らかになったこととして、まず、第1研究からは、家族介護者が表出困難な意思を推察するにあたって、関心、気づき、解釈、評価の循環があり、それぞれのつまづきにおいて、負担が生じやすいことが明らかとなった。また、個別性による解釈の試行において、専門性による解釈へと導かれるなど、ミスマッチな支援がかえって負担を生じさせる危険性があることが示唆された。

次に、第2研究からは、施設職員が表出困難な意思を推察するにあっても、同様に4段階の循環を有するものの、専門性に基づく循環と交互に行きかう様相が見受けられた。施設職員においても、繊細に個別性を捉えた推察になるほど、個別性に基づく循環へと向かう点では家族介護者と共通するものの、技術や知識などの専門性との両立や施設職員同士の支えあいの重要性が示唆された。

これらの調査結果は、第1研究、第2研究の各目的に応答しているが、総合考察では、さらに表出困難な意思の推察をめぐる全体像として捉えなおすことで、社会福祉研究への示唆として整理し、総合的に考察を行う。

本章の「2. 表出困難な意思の推察の特性」においては、先行研究で「気づきに関する特性」や「解釈に関する特性」と操作定義した2つの特性について、意思の推察の循環の4つの段階の一部に位置づけて整理した。これにより、推察の2つの特性は、家族介護者と施設職員という立場、関係性、または専門性等を必ずしも前提としないこと、そして、推察は基本的な構造を同一としていることを考察する。

次に、本章の「3. 推察の循環の類型に関する専門性」では、推察の循環が専門性を経由することがあり、これらを4つの類型として整理した。これによって、家族介護者と施設職員が立場、関係性、専門性等によって、時に異なる推察の循環をたどることについて、特に社会福祉の専門性の視点から考察する。

本章の「4. 推察の負担に対する示唆」では、家族介護者の負担について得られた示唆から、関連領域からへの示唆を整理し、推察の今後の展望を考察する。

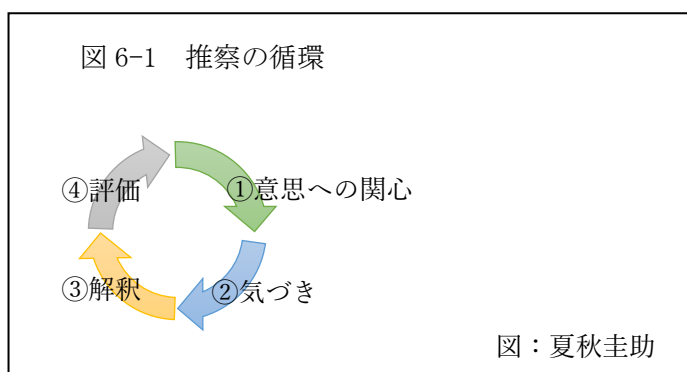
2. 表出困難な意思の推察の特性

(1) 推察の循環

表出困難な意思の推察は後述するいくつかの類型があるものの、家族介護者、施設職員ともに基本となる4つの循環に整理することが出来る。

第1に、表出困難な意思に対する関心を高い状態を保っていること、第2に、微細な表出や変化から意思の存在や変化に気づくこと、第3に、その意思の強さや内容などについて、対話や具体的な解釈を試みること、第4に、その解釈が妥当であったかを確認しようと評価し再び関心を高めること、の4つの段階である。

4つの段階は、さらに個別的次元における精度を高めようと繰り返され、成熟し、蓄積される。この視点について、4章と5章の考察において、それぞれインタビューの理論記述から関係する記述から次の図の通り整理した。



① 意思への関心

推察の循環における「意思への関心」とは、表出困難な高齢者が意思を有し、変化が生じることを期待して関心を払う特性をさしている。意思の推察において起点となる気づきであるが、日ごろより洞察し注意を払い続けて微細な変化を見張るものではなく、関心の中で直感的に捉える必要がある。

意思への関心は、表出困難な高齢者との関係性に蓄積し、導かれる。ただし、高齢者自身は表出困難な状況にあつて、非言語的コミュニケーションを含め、関係性というほど双方向性が得られない場合など、初対面の施設職員にとっては事前調査などの専門性に基づく関心が先行する場合もある。すなわち、施設職員においては、他の表出困難な高齢者に対する推察の経験、仲間の施設職員からの情報など、施設職員の個人の中に蓄積され、関心が起点となる可能性がある。

本研究では、関心の起点が個別性と専門性のどちらにも基づきうることを踏まえ、意思への関心の特性として「表出困難な意思の変化に関心を向ける特性」と定義する。

② 気づき

本研究では、気づきに関する特性を「主観に基づく洞察など、根拠なく直感的に捉える特性」と操作的に定義して用いてきた。家族介護者による推察の調査では、表出困難な高齢者本人との深い関係性に基づいて、根拠なく直感的、間主観的に気づく過程が確認できた。施設職員による推察の調査でも、同様に、表出困難な利用者との関係性が深くなるほどに、また長期日常的に関わる立場であるほどに同様の特性を有することが確認できた。

しかしながら、施設職員による推察の調査では、経験の蓄積などを含む専門性に基づいて気づきを得ることもある。この場合、必ずしも主観的という操作的定義はそぐわないため、総合考察において、気づきに関する特性を「表出困難な意思の変化に、根拠を前提とせず直感的に気づく特性」と修正して定義する。

気づきに関する特性は、意思の内容までは推察できない段階であっても、何らかの意思の変化が生じたことを捉えている。そのため、対話的に具体化を試みたり、生の履歴や支援者への相談など、解釈の段階へと推察を進めることが試行されやすい。

③ 解釈

本研究では、解釈に関する特性を「過去の個別性などから妥当に類推し、意思の内容を捉える特性」と操作的に定義して用いてきた。家族介護者による推察の調査では、表出困難な高齢者本人との生の履歴に基づいて、過去の出来事を想起したり本人らしさを想定するなど、意思への気づきを可能な限り妥当に解釈する過程が確認できた。施設職員による推察の調査でも、同様に、表出困難な利用者との関係性が深くなるほどに個別性を捉えて解釈するなど、同様の特性を有することが確認できた。

しかしながら、施設職員による推察の調査では、経験の蓄積などを含む専門性に基づいて解釈を得ることもある。この場合、必ずしも個別性などに限定した操作的定義はそぐわないため、総合考察において、解釈に関する特性を「表出困難な意思について、最も妥当な解釈を得ようとする特性」と修正して定義する。

④ 評価

推察の循環における「評価」とは、表出困難な意思について気づき、解釈した内容が、本人の意思と妥当であるかを確認しようとする特性である。本人の表出困難な状態によって、対話的に解釈を確認し、追認と捉えられる反応が得られることもあるが、ほとんど根拠や確信のないままとなることもある。根拠や確信のないまま推察を続けることについては、長期に推察を繰り返してきた家族介護者や施設職員であっても不安を抱くが、こうした不安は推察の評価としては恣意性のない判断であると考えられる。確信を得られないまま、本人の意思を最大限尊重することによって、不安や負担とともに関心を深め、循環的に推察を深めていくことがある。こうした循環は、より微細な表出や情報を模索を促し、評価が得られた際は充実をもって、より深い循環へと向かっていた。

一方、表出困難な高齢者の生の履歴など、個別性に意思との妥当性を図る評価に対し、施設職員においては、他の表出困難な高齢者に対する推察の経験の蓄積や仲間の施設職員からの情報など、施設職員個人の中に蓄積される専門性からも判断しうる可能性がある。

本研究では、評価が個別性と専門性のどちらにも基づきうることを踏まえ、意思への評価の特性を「推察した意思が表出困難な意思と妥当することを、可能な限りの方法によって評価しようとする特性」と定義する。

評価は、表出困難の程度が深く、循環の繰り返しにおいてもほとんど追認を確認できない場合において、介護者自身が間主観的に評価することとなるため、介護者の価値観の影響を受ける可能性がある。ただし、表出困難になる過程において無数に繰り返された推察の循環の延長上においては、他の方法による意思の尊重に比して最も妥当と言わざるをえない。

一方、施設職員は家族介護者に比して推察の循環を繰り返す時間や機械が少なく、間主観的な評価にいたることが難しいため、「自分だったなら」という黄金律、施設の理念、社会福祉の倫理などと合わせ、誠意にしたがって評価していた。

(3) 意思の尊重をめぐる推察の特性

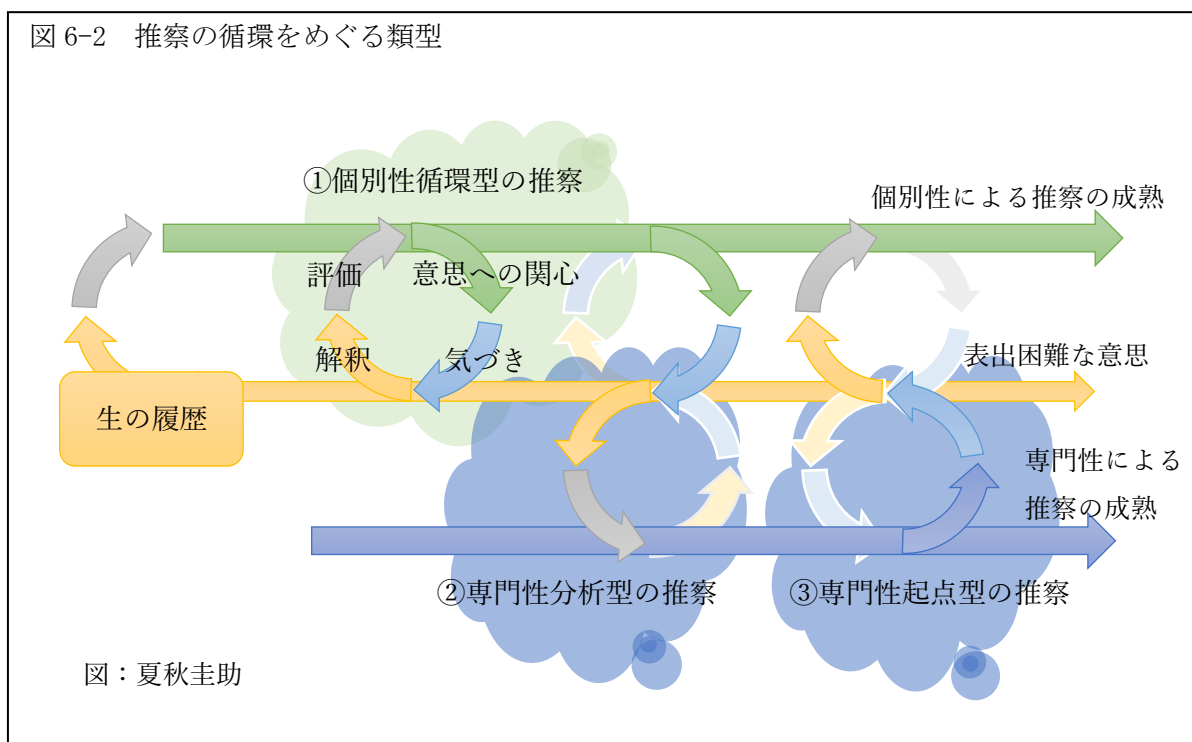
第1研究と第2研究において共通し、表出困難な意思は、関心を起点として、気づき、解釈、評価という循環によって、推察され尊重がなされていた。表出困難な意思は特定の要因から明確にできることではなく、また、実感された推察も確認する方法はないという限界を有している。限界があることは認識されながらも、可能な限り妥当な推察とすべく繰り返されていた。

家族介護者は、表出困難な高齢者と生の履歴を共有することによって、意思に関心を持ち、繊細な表出に気づいていた。その気づきの意味を対話的に模索し、あるいは生の履歴から解釈を加えながら、推察の妥当性を評価していた。こうした循環から、その時々に変化する意思を柔軟に推察し、ときに専門的な判断と推察した内容との相違に負担を感じながらも、意思を尊重できるよう努めていた。

施設職員は、連携情報、家族との対話、事前調査などから生の履歴に関する情報を集め、個別性への関心を高め、気づき、解釈、評価の循環を図っていた。しかし、専門職としての立場上、時に冷静な判断が求められることもあり、専門性、経験、知識上の解釈をし、評価を行うこともある。また、ケアの経験などから関心をもつ仕草や気づき、個別性に照らした解釈によって推察を行うこともある。

第4章、第5章では、これらの循環の違いについて、個別性循環型、専門性分析型、専門性起点型と類型し、調査結果のデータに基づいて整理を行った。ここでは、家族介護者と施設職員との共通点や相違の比較とともに、次の図6-2の整理について再検討する。

図 6-2 推察の循環をめぐる類型



① 個別性循環型

個別性循環型は、表出困難な意思を個別性に基づいて推察する循環であり、家族介護者、施設介護者が共に基本とする類型である。家族介護者においては、一般に専門性を前提としないため、個別性循環型の推察を円滑に循環させることが、負担の少ない推察であるといえる。

家族介護者においても、専門職の助言等において専門性を解釈や起点とすることがあるが、専門性の蓄積は容易ではなく、個別性循環型によって得た推察の内容との違いに負担を感じることもある。助言においては、個別性循環型による推察を十分尊重したうえで、両面の意義の違いを丁寧に説明して支援することが期待される。

施設職員においても、家族介護者と同様に中核的な推察の循環の類型であるが、表出困難な高齢者の意思を解釈する過程で、別途に意識的に個別性を捉える過程が必要となる。調査では、自宅への訪問、家族との対話、連携資料など、本人の周囲から得られる様々な情報を積極的に活用していた。生の履歴は明文化できる情報ばかりではなく、K氏は方角、光、匂いなども重要な情報と捉えていた。

このような、表出困難な高齢者にとって馴染みのある生活と、その違いの受け入れがたさについて理解するためには、未だ多くの直感的な理解を必要とする。家族介護者に代わって推察する施設職員は、こうしたケア経験に蓄積される専門性から表出困難な高齢者の個別性に対する不足を補って推察しているものと思われる。

② 専門性分析型

専門性分析型は主に施設職員による推察の類型であり、表出困難な意思の変化に対する気づきを、専門性から分析して解釈する循環の類型である。施設職員は、表出困難な意思への気づきに対し、個別性や対話的な解釈を深めることに制約や限界が生じることがあり、以前の推察の経験や他の職員から得た情報を活用して、すなわち、専門性によって分析して解釈し、評価することがある。

M氏は、専門性によって推察した意思が表出困難な意思と妥当であるかの確認を怠れば、施設職員のエゴとなってしまうと述べ、K氏は、先入観が優先されれば意思を推察する前から枠にはめてしまう危険性があると述べていた。一方で、J氏は、表出困難な高齢者自身が何に困っているのか、意思の形成に苦しんでいる場合、施設職員が経験から整理することを例に、施設職員の専門性の重要性を述べていた。

こうした、意思の形成自体に迷いがある意思の推察については、個別性循環型よりも当事者に負担の少ない類型として適当である可能性があり、家族介護者の負担に対する支援としても検討できる。

③ 専門性起点型

専門性起点型は主に施設職員による推察の類型であり、表出困難な意思の存在や変化を予見して関心、気づきを得ようとする専門性を起点とした循環の類型である。

施設職員は、専門職として関わり方やケアの理念や専門性から、あるいは、経験的に生じやすい意思の変化を予見することがある。J氏が、重度の認知症になっていく過程を経験的によく知っていることが、認知症の初期の葛藤をケアする際に重要になると述べている。すなわち、認知症の進行などの表出困難となっていく過程や、その際に生じる様々な意思の変化について、寄り添って推察を重ねた経験は、これから同じように表出困難となっていく高齢者に寄り添うにあたって、重要な専門性となることが示唆されている。こうした専門性は、表出困難な高齢者が有している未整理な意思について、事前に関心を向け、いち早く気づき、内容の傾向を事前に予見できる可能性がある。

こうした専門性による意思への関心や気づきは、必ずしも対象の表出困難な高齢者が有している意思から気づいたものではないものの、結果として意思の解釈から推察できる可能性があり、家族介護者の負担に対する支援としても検討できる。

④ 専門性循環型

表出困難な本人の個別性に関わらない循環であり、本研究のテーマとするところの意思の推察としては例外的な専門性となってしまう。専門性によって意思のありようを予見するものの、その解釈を専門性の内に分析してしまうことについて、K氏は本人を見ようとする関り、M氏はエゴと称していることなどから、推察の危険性として例外に類型とした。

3. 推察の循環の類型に関する専門性

(1) 施設職員による推察の起点

先行研究の中で示された「生の履歴」は、個別性にかかわる様々な要因を含んだ重要な概念として、本調査でも重要な示唆を与えていた。本研究において、新たな意味の広がりも示されていたため、調査に基づいて整理する。

先行研究では、生の履歴という概念について、本人や家族がそれぞれにもつ歴史性であり、生活空間の歴史性を介して共有されるものとして示され、主に家族介護者を想定した基底的概念として重要性を示していた（清水 2007:98-99）。

施設職員による推察においても、情報化された生の履歴が、推察の起点となりうることも分かった。例えば、表出困難な高齢者について知りえた情報から、地域で暮らしてきた姿に関心を寄せる場面があった。施設職員が、田んぼを見つめる視線などに「生きてきた風景への感慨」を得ていると気づき、何気ない普通の姿に解釈を得ることは、個別性への関心を深める上でも重要な推察として確認できた。このような情報化された生の履歴は、施設職員にも共有しやすく、生の履歴の共有の起点として重要な意味を有している。

L氏は「その方がそのグループホームに入られる前に、生まれてどういう時代を生きてこられたとか、どういう生活環境だったとか、どの辺に住んでとか、そういう、その方への興味を持つと、もっと聞きたいなあとか、なんか思えてきたり。」と、利用者への関心の起点を述べていた。

さらに、専門性や技術として、入所時から生の履歴を収集する慣例が設けられ、施設職員が負担なく意思を推察できるよう配慮されている。K氏は「家の中に入れば家のおいしがして、しゃべらなくても、あ、今から仏様お参りするんだなっていう足の動きだったり。もう、特にタッチしないです。その、家事援助もしないし身体介護もしない。おひとりの暮らしを見れるので、ジーンと黙っていても、あ、次こういうことするんだな、なるほど、ここが冷蔵庫が棚になってるんだなとか。棚っていう思うのはなんだろうって思うので。面白さもあるのかな。だからこそ、ここ（小規模多機能型居宅介護）に来たときに、そういう習慣だったり手つきだったり、方向を、あ、こっちの方向に行くんだから家の方向と一緒にああって。」と、自宅での暮らしから生の履歴を体験的に捉え、職員と共有することで、意思の推察を促す起点として工夫がなされていた。

このように、生の履歴をめぐっては、特定の要因に還元して明文化しがたく、感覚的な共有にこそ、表出困難な意思の推察における重要な意義あると思われる。しかし、より深く推察しようという関心の高まりは、こうした感覚的な共有するを深くすることとなる。すなわち、表出困難な本人が抱える葛藤、不安、怒り、表出困難な存在となりゆく老い、死にゆく過程における不安を、直感的に推察するため、推察した者にとっても感情的、情緒的に大きな負担となることに警戒が必要である。

こうした、当事者間のみで共有される感覚は、第三者への説明のしがたさ、理解の得られにくさによって、孤立し、閉塞的な環境となりやすい。そのため、先行研究でも示され

たよう、過度な負担とともに、結果として介護関係の悪化や虐待などに陥る可能性があり、配慮が必要であると思われる。本研究では、親密な関係において推察が繰り返されること自体の意義を踏まえ、親密性や推察の放棄ではなく、適切な支援を検討すべきであると考ええる。

(2) 推察に関する専門性の位置づけ

表出困難な高齢者本人への関心が高まるほどに意思の推察が深くなるが、専門職においては、職務としての立場や専門職としての冷静な判断を両立することが求められる。こうした課題については、感情労働として先行研究の中でも扱われてきた。久保は、情緒的消耗感を「他人の立場を思いやり、誰かと信頼関係を築くには多大な情緒的エネルギーが必要とされる。この職務特性が、バーンアウトへのリスクを高めているものと考えられている。」と述べ、脱人格化「クライアントとの間に距離をおき、彼らとの関係を仕事上の関係として割り切り、サービスのやり取りを客観視することにより、情緒的資源を守ることができる。」や個人的達成感の低下「有能感、達成感の低下は、離職や強い自己否定などの行動と結びつくことも少なくない。」を、バーンアウトの主症状としている（久保 2007:56）。

田中は、寄り添って理解しケアすることを評価したうえで、適切な報酬や労働環境の必要性を述べ、その原因を明文化された形式知が専門性として評価されるのに対し、明文化しがたい暗黙知が軽視されることに課題を示している（上野 2008:102-113）。

感情労働におけるバーンアウトの対処として、「専門援助者は『共感する他者』なのであり、そのようではなければならない」（窪田 2013:56）と感情コントロール技術の必要性や、適切な距離を保つこと、および、「本人の自覚がない場合は、まわりの人たち、上司や同僚、家族や友人が、バランスを回復させるためのきっかけを与えてやらなければならない。」（久保 2007:63）と周囲の相互の支えあいからコントロールすることが求めている。

本調査においても、K氏は「介護の質とかがっていうのを保つ手前に人の確保が今、福祉業界にあるでしょう。もう、なかなかこう、確保ができないし、もちろん皆さん無資格で未経験の方がよく来られる。余計にこのフォローを、その、しておかないと、介護は誰でもできるんですけど、やっぱり素人で働く、経験もなく働くので、ものすごく自分に持った感情っていうのは、もう自分が悪い人間で、こんなに自分が性格悪かったんだって思ってしまうぐらい跳ね返りってものすごい大きいんですね。」と、感情労働の重要性を認めたとうえで、感情コントロールの難しさや職場内での感情の支えあいが重要であることについて述べられていた。

一方、吉田は「感情労働に必要な感情コントロール技術は、介護労働者のキャリアではなく、年齢の高さに関連していることが明らかになった」（吉田 2015:226）と述べ、「『誰でもができる仕事』といった、介護労働への皮相的な評価を追認してしまうことになる」

(吉田 2015:226) と、感情労働の専門性について課題を示している。この専門性の課題について、本研究の推察の循環を例にすることで専門性に示唆を得ることが出来る。すなわち、推察の循環に照らして考察すれば、感情的な負担が生じる主な類型は間主観的な気づきや解釈が必要となる個別性循環型の推察である。家族介護者と同じ次元の愛情や情緒ですべての表出困難な高齢者に関わろうとすることが、施設職員にとって負担の大きいものであることは想像に難くない。

感情労働の一面を個別性循環型の推察として、その感情的な負担の肥大化については、専門性分析型、専門性起点型の推察を併せ持つことで軽減でき、これは施設職員の専門性の一つであると考えられる。また、施設職員同士が支え合いの関係性を重視していることから、仲間の施設職員の状況を見て、専門性分析型、専門性起点型の推察を提供することによって、一時的に個別性循環型の推察に注力する施設職員に対し自分自身の推察のコンディションを冷静に客観視するよう促すことも同様に専門性の一端である。ただし、この専門性分析型や専門性起点型との両立の促しは、脱人格化を促すものではなく、個別性循環型を施設職員自身との関係性まで含むより広い視野から俯瞰した推察を可能とするものである。

(3) 推察が Well-Being に資する専門性の構造

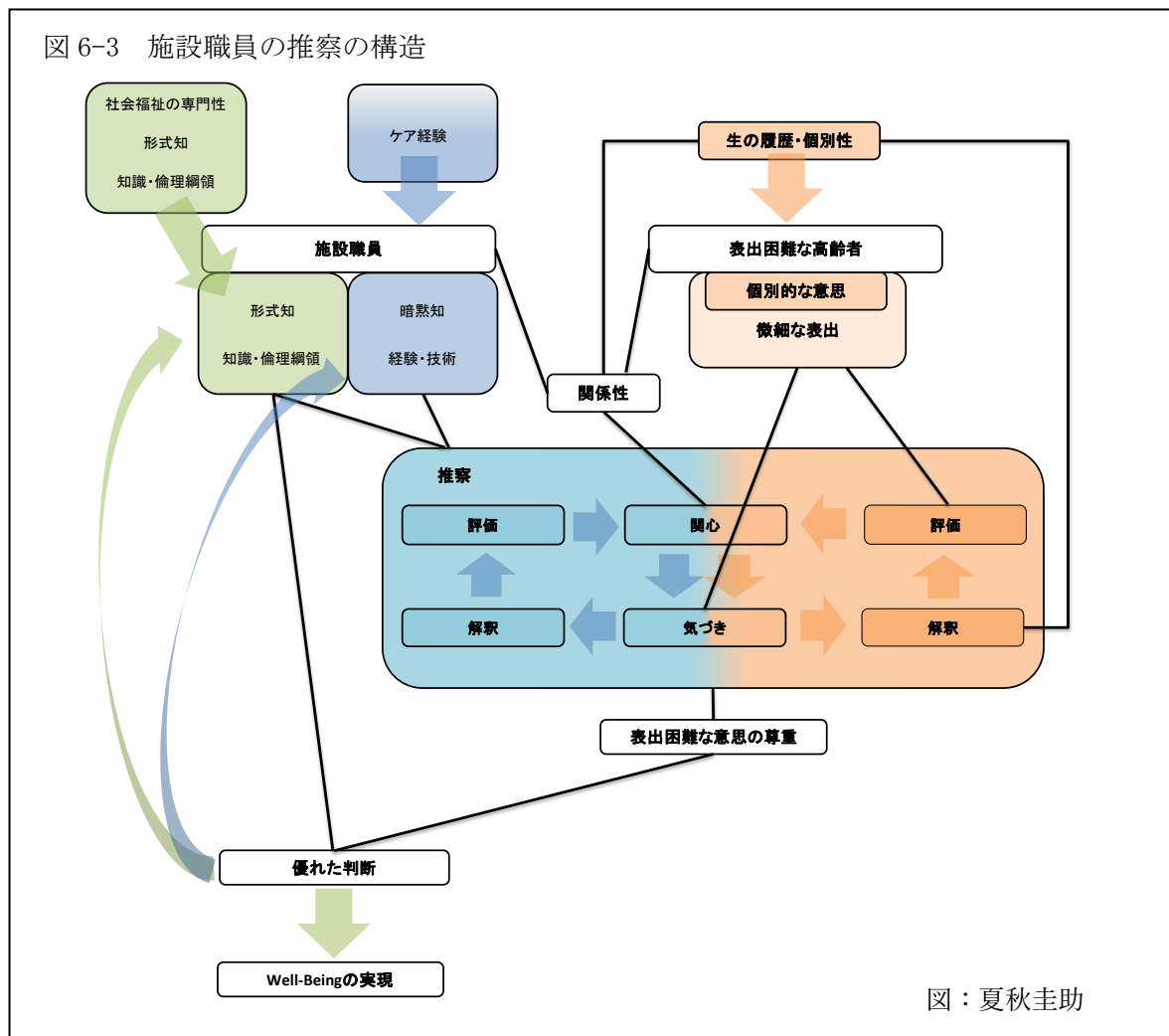
表出困難な意思の存在や内容を推察することによって、到達すべき目標は、表出困難な高齢者の Well-Being の実現であった。すなわち、施設職員の専門性においては、表出困難な高齢者の意思の内容をいかに体験的に共感できるかだけでなく、推察した意思の尊重と Well-Being の実現に道筋を用意して、優れた判断を導く必要がある。

表出困難な意思を推察することは、表出困難な高齢者が今の瞬間に何を求めているかを直感的に理解することばかりではなく、人生という文脈において求めてきた暮らしの在り方をなど、根底に有するニーズを模索することでもある。専門職の専門性として、推察によって捉えた表出困難な意思を直ちに尊重するのではなく、常に形式知、暗黙知に照らして、判断することが必要となる。こうした優れた判断や推察の経験が、形式知として暗黙知として蓄積され、それが同僚や上司との分かち合いの過程で、施設の理念や社会福祉の倫理綱領と照らされて専門性として蓄積されている。

施設職員においても、M氏が「ただやっぱり、知識とこういうのがリンクした時に、やっぱりちょっと、この仕事の面白さを感じることができかなって。学んだことと。」と、推察を専門性に照らして判断することの重要性を示している。ただ、J氏が「夫婦が阿吽の呼吸とか言うじゃない。…阿吽の呼吸の中で、あの、動くケアって言うのかな。出来るようになると良いなって思う。」と、K氏は「もう、ほぼ勘です。ほぼ勘と、もうその方の身になって言葉が家族に伝えられるか、スタッフに伝えられるかっていうのが、日々私のテーマなので。」と述べるように、推察が自然な関わりの中に織り込まれるほどに、理念や倫理綱領に照らした判断は自明の内に行われるものとなり、専門性の到達点は直感と評され

るようになる。すなわち、理論や理念などの形式知の暗黙知化であり、意識せずに適用できることによって、個別性循環型の中に専門性を取り込むことが可能となっている。

図 6-3 施設職員の推察の構造



こうした意味で、施設職員は、意思を尊重するという過程において、施設職員の専門性、社会福祉の倫理綱領、価値観が、推察における解釈や尊重に影響を与えていることの責任を自覚して、本人の個性や根底に有するニーズを丁寧に推察して尊重することに努めなければならない。これは、表出困難な高齢者の「尊厳の保証」に通じ、『自己決定の尊重』によるもの以外の『尊厳の保障の論理』を、暗黙知・経験知として内包しているのか」(衣笠 2018:176) という社会福祉研究上の問いに、一端の示唆を与えるものである。

4. 推察の負担に関する考察

(1) 家族介護者による推察の特徴

推察によって捉えた表出困難な意思は、究極的には追認を得ることができないため、考えうる限りに妥当であっても、施設職員や家族介護者の解釈、すなわち、推察する者の思いや価値が少なからず反映することがありえる。調査では、家族介護者が「もう少し一緒にいたいから」、事前に「言っていたこととは少し違うけど、許してくれていると思う」など、家族介護者の今の思いとの対話的な解釈を得ることもあり、悪く言えば都合よく解釈しているという批判に耐えることは難しい。こうした意味では、推察によって捉えた意思は、表出困難な高齢者本人の純粋な意思ではない場合がある。

しかし、逆に、家族介護者の願いや思いをさえぎってまで事前の意思を突き通すことが、今現在の意思であると追認をえることもできない。生きている限り意思を有することを尊重し、その内容に向き合うことが確証の無い営みであることについて、家族介護者はすでに自覚し、不安を抱えながら推察を繰り返していた。この不安や負担について、支援者が容易に払しょくすることは相応に困難であるため、表出困難な現在の意思への推察が最大限の尊重であることと、純粋な意思に最も近い可能性と意義があることを認めて、丁寧な受容を求めていく必要がある。

これらのことから、家族介護者による推察は住み慣れた暮らしの延長線上、生の履歴の延長上において、表出困難な本人とより高度な対話が成立している可能性がある。施設職員であれば、エゴや先入観と言われる解釈であっても、社会福祉の倫理に反しない程度において認めて受容すべきであるかもしれない。

(2) 推察において生じやすい負担

家族介護者においては、B氏が「昨日、私も、ああと思って涙が出たんですけどね。ああ、やっぱり、全然分からないんじゃないかと、本人は言えないけど、誰かにやっぱ大丈夫だとかなんかこう、寄り添ってもらったら嬉しいっていう気持ちは十分あるんだっていう感じは、横にいてずっと感じたり」と、D氏が「あの、笑顔を見たときからね、私なんです、その笑顔を見たら、幸せな気持ちになる。今までにあったことのない幸せ。ああ、これ、こういうことが本当の幸せなんだっていう事が、思い立ったんですよ。」と述べるなど、表出困難な高齢者本人の Well-Being を介護者自身のものと共感していることが、継続の重要な要因となっていることが分かった。

一方、ケアの初期においては、家族介護者は葛藤や負担の内容があいまいなまま支援を求め、そのミスマッチから一層孤立を強める事例が多くみられた。この負担の内容には、「家族介護者にとって、周囲の者が介護を直接的に支援する手段的サポートや、介護に関連した情報を提供する情報サポート、そして思いやりや理解、悩みを聞くといった情緒的サポートを提供することは、介護負担感の緩和につながるとても重要な要素となる」（涌井 2021:39）という整理を用いれば、表出困難な高齢者本人の個別性や家族介護者自身の

情緒的な葛藤について、納得いくまで丁寧に聞いてほしいというニーズが強いと言える。また、手段的支持や情報支持を必要としていることもあり、それらのニーズが的確に捉えられ提供されることが重要である。ニーズと違う回答がなされた時を例に挙げ、誠意のない表面的な対応をされたと、支援に対する不信感が述べられていた。

家族介護者の推察の負担に対する支援としては、推察の循環を捉えながら、何につまづき、どのようなサポートを求めているのかを、丁寧に捉えて支援する必要がある。家族会においても同様であり、支援を求める家族介護者のニーズ、表出困難な高齢者の意思やニーズを丁寧に見極める運営者の手腕が求められる。

一方で、N氏が「園、施設でももちろんね、寂しくないように、こっちからね、時々しとったら話しかけるとかするけど、やっぱり家族ってまた別って思う、現実はね。話さない人でも家族やったら話すやろうし、やっぱり面会の際に『帰りたい。』とか言いんさ。やっぱり家がいいのかな。家族との時間も、ちょっとの時間でもいいけん。そしたら、またちょっと違ってくるのかな。多分心の中では、やっぱり家がいいと思ってると思うけどね。」と語るように、施設職員の努力では応じがたい意思を推察し、表出困難な高齢者の孤独やニーズを丁寧に捉えて、家族側へ支援を求めたいこともあるようだ。

(3) 推察を促す環境への示唆

意思の尊重における推察を支援する目的は、表出困難な高齢者の Well-Being を前提に、推察において負担が生じることでケアの関係性が断絶することを防ぐとともに、より良い循環から推察の関係性を高めていくためでもある。家族介護者や施設職員の推察力を、エンパワメントすると言い換えることもできる。本調査から、推察の循環が得られた家族介護者や施設職員は、とても力強くケアに向き合っている様相がみられた反面、ケアの初期において、壮絶に苦しんだ経験が多く語られていた。

推察への支援ニーズは、このケアの初期の葛藤において最も高いものの、手段的ニーズ、情報ニーズ、情緒的ニーズとともに混在し、家族介護者自身も整理できていない状態で支援を要している。このミスマッチを回避するためにも、本調査のインタビューたちには支援に先立って「とことん聞く」ことの重要性を示していた。それは、家族介護者のニーズの内容を曖昧なままの表出から整理するためでもあり、語ってもらうちに整理してもらうためでもあり、対話の中で信頼関係を気づくためでもあった。

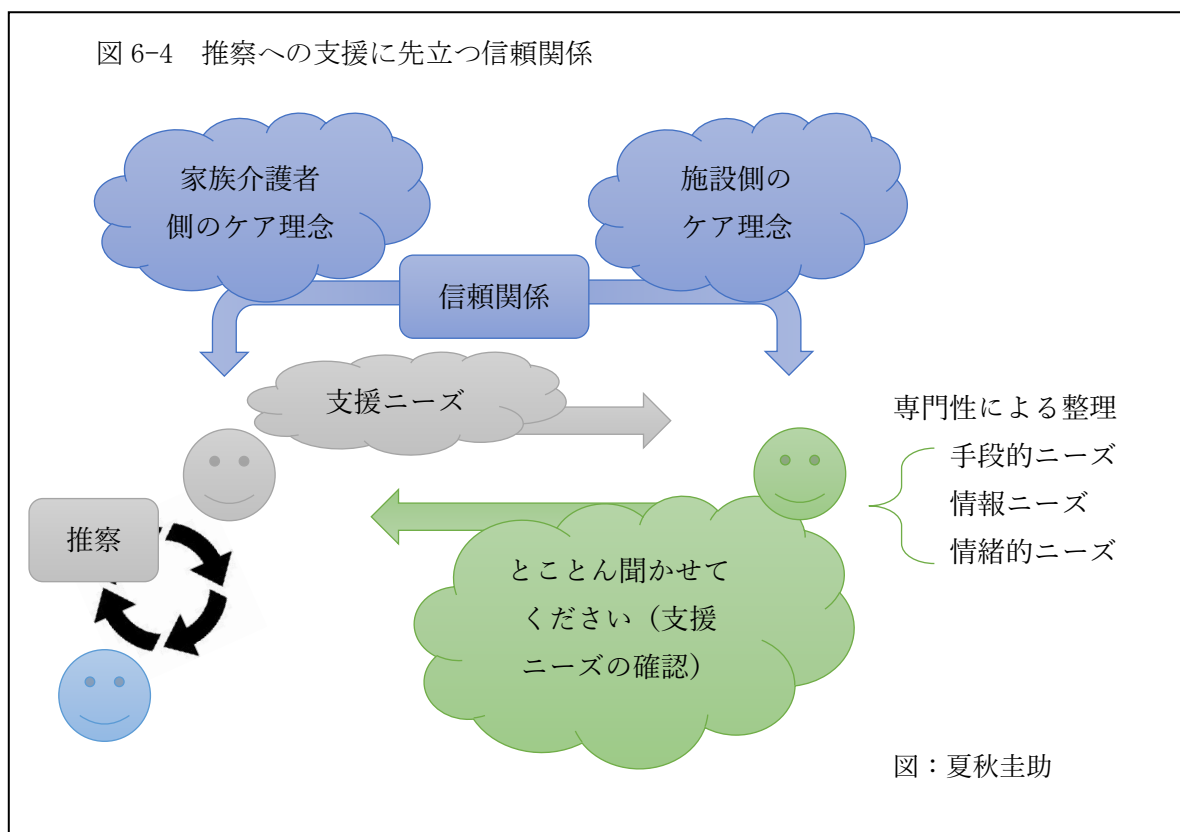
こうした態度は、鏡のように映り合うものであり、逆に、「とことん聞く」態度を示さない支援者の言葉は、形式上同じ言葉であっても、家族介護者の心に響かず、誠意のない対応をされたと受け止められていた。こうした支援の態度が、家族介護者の印象に響く関係について、「事業者や職員が抱くサービス利用者に対する対象観やサービスに対する価値観は、直接的にサービス利用者に向いて、そして、サービスの中身に反映するものとなります」(倉田 2017:7) と誰しもが敏感に察し、感じとると述べられている。

態度や価値観について、施設職員のインタビューは、負担や葛藤に対する相互支援に

において「表出困難な本人の幸せを一番に考える」という理念を職員間で共有していた。K氏は「お年寄りが一番なので、利用者の方もそうですけど、一番だっていうことの話をまずしておけば、その、絶対ぶれない。それだけまずはやってみる。」と述べ、施設の理念を説明して職員の負担に向き合っていた。L氏もまた、「施設の方針じゃないんですけど、やっぱりそういうこう、表情をくみ取ったりとか、あの、ま、動作とか仕草もそうですけど、そういうことで、あの、お年寄りの生活を支えていこうっていうのがもう、やっぱ土台にあるので。」と、同じく職員間で共有する理念をもって関わっていた。必ずしも明文化して研修されているかは読み取ることができないが、職員間で理念が深く共有されていることが、推察にあたる施設職員の柔軟な推察を支援し、負担が生じにくくなる要因ではないかと思われた。

すなわち、家族側の期待するケアのイメージや理念を聞く態度を示し、施設側のケアの理念を伝えあうことで、家族側が抱える推察のニーズを円滑に聞き出し、孤立感を与えることなく助言を伝えられるのではないかと思われる。家族のニーズの混乱を解決し、必要に応じて推察の循環を確認しながら情緒的ニーズにも応える必要があると思われる。

図 6-4 推察への支援に先立つ信頼関係



第7章 結論

本研究は、明確に表出することが困難な高齢者の意思を尊重するにあたって、家族介護者や施設職員による推察の特性を明らかにすることを目的とした。表出困難であっても、すべての人が意思を有することを尊重し、その内容を諸状況から推しはかることが、Well-Beingの実現において重要であるとの思いに導かれている。第7章の結論では、第1～6章の各要点を端的に述べる。その上で、テーマや目的に対する著者の見解を整理して、本研究の結論とする。

1. 各章の結論

第1章では、はじめに、在宅死や地域包括ケアシステムなどの政策の動向を起点として、表出困難となりゆく高齢者の意思をめぐる位置づけが、政策上で重視されるに至った背景を整理した。2018年の「認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン」では、「本人の意思の尊重」が「尊厳をもって暮らしていく」ため重要であることを基本原則に掲げ、意思表出の困難さへの対応を求めている。なお、ガイドラインにおいて、認知症の人という対象の定義を「認知症と診断された場合に限らず、認知機能の低下が疑われ、意思決定能力が不十分な人を含む。」(厚生労働省 2019:2)とするように、本研究も原因となる疾患に関わらず、表出困難な高齢者を対象とした。

ガイドラインでは意思表出の困難さへの対応として、(1)本人が意思を形成することの支援(意思形成支援)、(2)本人が意思を表明することの支援(意思表明支援)、(3)本人が意思を実現するための支援(意思実現支援)の3つのプロセスを掲げている。しかし、重度に表出困難な高齢者にとって「意思」とはどのようなものであるか、その意思を「尊重」するにあたって、どのように「把握」する方法があるかなど、実践上の課題がうかがわれた。

第2章では、意思の尊重に関する課題に対して、「意志」と「意思」の異同などを参考に、「意思」や「推察」の操作的定義とともに、先行研究の示唆を整理した。表出困難な高齢者を想定する本研究においては、意思を「すべての人が有する、取りまとめられないままの様々な思い。その一まとまり」として、その意思を「関係の浅い他者が明確に捉えられる程度の表出が困難な状態」をさして、意思の表出困難な高齢者と操作的に定義して扱うこととした。さらに、この表出困難な意思について、確信に至らないまでも、「意思の存在を察し、その内容を諸状況から推しはかること」を推察として、操作的に定義して扱うこととした。

意思の推察について、応答しうる社会福祉の専門性は信頼ある関係性の構築に紐づけられやすく、そうした専門性は明文化された形式知や倫理綱領に対し、経験の蓄積など暗黙知として位置づけられていた。一方で、専門性を前提としない家族介護者が、内容の解釈にも至るほど推察しうることへの示唆もあり、これらの特性が推察に重要な示唆を有する

とことがわかった。また、特に家族介護者において、関係性から負担が生じやすいという先行研究の示唆を踏まえるため、意思の推察における負担の内容、推察の負担に対する支援の傾向についても、明らかにする必要がある。

以上のことから、重度に表出困難な高齢者の「意思」を「推察」という実践が、どのような特性を有し、負担を抱えているのか、より具体的な実情を整理すべき課題があることがうかがわれた。

第3章では、こうした研究上の課題に対し、本研究は「明確に表出することが困難な高齢者の意思を尊重するにあたって、家族介護者や施設職員による推察の特性を明らかにすること」を目的とし、その研究上の構造や方法について明らかにした。

先行研究をうけて、「微細な表出への気づき」、「意思の内容の理解や解釈」、さらに、前提となる「意思の推察における関係性」、「推察した意思の評価」の4つを視点として第1調査、第3調査の必要性を整理した。また、意思の推察における負担の内容、推察の負担に対する支援の傾向の2つを視点として、第2調査、第4調査の必要性を整理した。

調査方法については、表出困難な人の意思の推察について、明言化しがたい特性を有していることを念頭に、調査対象者の説明困難さを踏まえた研究方法を検討する必要がある、質的研究が適当であると判断した。また、より研究対象者の表現の意味を丁寧に捉える分析方法を検討する必要がある。SCATは質的研究の諸分析方法と同様に口頭データの脱文脈化を経るものの、ストーリーラインとして再文脈化して分析する手続きをとっている。これによって、調査対象者の説明困難さや、意思や推察に関する諸概念について、インタビューのあいまいな表現や文脈の意図を、より柔軟に捉えることができ、本研究の分析方法として適当であると判断した。

第4章では、家族介護者による意思の尊重について、5名のインタビューに対して質的研究を行った。なお、推察の特性に関する第1調査、推察の負担に関する第2調査として、あわせて第1研究としている。

推察の特性については、想定していた「気づき」や「解釈」は、気づきを生む「関心」や、解釈した意思が妥当であるかを見つめなおす「評価」とともに、その4つの特性が循環的に繰り返されていることが明らかとなった。家族介護者は、表出困難な高齢者をかけがえのない存在として、絶えず意思のありように関心を払うことによって、微細な表出から意思の変化を捉え、気づきを得ていた。さらに、意思の内容を暮らしの文脈や生の履歴から解釈し、その解釈が妥当であるか対話的に模索し、尊重の糸口を探っていた。本人のWell-Beingな様子が評価できるときは、家族介護者自身の喜びとして実感され、次の推察に向かう関心へとつながっていた。

負担の特性については、推察が明言しがたい直感的な経験であり、それを思い悩む家族介護者自身の葛藤や不安も相談しにくい内容であることが多い。そのため、不安の強い介

護初期から、精神的に孤立しやすく、孤独として負担が生じやすいことがわかった。また、かけがえのない存在を失いゆく過程は、二人称の死として家族介護者の不安となっていた。これはグリーフケアと同様に、体験的な負担や悲嘆を理解してくれる対等な支援者が求められていた。

第5章では、施設職員による意思の尊重について、5名のインタビューに対して質的研究を行った。なお、推察の特性に関する第2調査、推察の負担に関する第4調査として、あわせて第2研究としている。

推察の特性については、第1研究で見られた4つの循環を有していることが、施設職員においても同様に確認することが出来た。ただし、生の履歴などを事前に知りえないため、個別性を丁寧に捉える事前の調査や関係づくりなどが図られていた。また、施設の理念や倫理などの専門性を起点として気づきを得たり、推察の経験を専門性に照らして解釈するなど、家族介護者よりも幅広い循環の型が見られた。

1つめは、個別性循環型であり、家族介護者同様に基本的な推察の型である。施設職員においても、表出困難な高齢者と長期、長時間関わる立場であるほどに、この型と思われる推察事例が増えていた。2つ目は、客観分析型であり、直感的に捉えた表出困難な意思について、専門性に照らしたおおよその内容を解釈し、反応を確認するとともに妥当であるかを評価していた。ただし、先入観の影響を受けるため、傲慢な解釈とならないよう注意が図られるべきであることも示唆されていた。3つ目は、専門性起点型であり、専門性として研鑽を積んだ内容や支援を起点として、その方が好むまたは嫌うであろうことを個別性から解釈し、評価を行う型である。意思表出が困難な型であるほど、個別性を知るすべが限定され、支援の試行錯誤の中で個別性を捉えていく必要があるため、特に初期に行われやすい。4つ目の型は、専門性を起点として専門性として分析するため、個別性を尊重する関わりが少なく、本研究の主題とする意思の尊重からずれてしまう場合がある。施設職員からは、うまくいかない事例先入観で決めてかかる場合など、課題の残る語りも見られた。

施設職員という立場で、専門性に対する研鑽と冷静さを欠かさず、同時に、可能な限り個別性を捉えて尊重しようというインタビューが多かった。施設職員も同様に、本人の Well-Being な様子を、施設職員自身の喜びとして実感し、次の推察に向かう関心へと向かう循環が関係性を深めていた。

第6章では、第1研究と第2研究の考察を、研究の枠組みで整理して考察した。まず、推察の特性と負担について振り返り、推察の循環と類型について整理した。そのうえで、施設職員による推察が感情労働としての負担が、バーンアウトを誘発する危険性を有していることに触れた。ただし、感情労働の負担は、主に個別性循環型の推察において生じるものであり、その感情的な負担の肥大化については、専門性分析型、専門性起点型の推察を併せ持つことで、施設職員の専門性として軽減できる可能性があることを示唆した。これは、ただちに「クライアントとの間に距離をおき、彼らとの関係を仕事上の関係として割り切り、サービスのやり取りを客観視することにより、情緒的資源を守ることができる。」という脱人格化を促すしきではなく、専門性分析型や専門性起点型との両立によって、個別性循環型において、施設職員自身との関係性まで含むより広い視野から俯瞰した推察を可能とするためでもある。

これによって、表出困難な意思を推察することは、表出困難な高齢者が今の瞬間に何を求めているかを直感的に理解することばかりではなく、人生という文脈において求めてきた暮らしの在り方をなど、根底に有するニーズの模索が円滑になる。さらに、専門職の専門性として、推察によって捉えた表出困難な意思を直ちに尊重するのではなく、常に施設の理念、社会福祉の倫理綱領、これまでの経験と照らして専門性として蓄積することが可能となるのである。

調査では、家族介護者が「もう少し一緒にいたいから」、事前に「言ってたこととは少し違うけど、許してくれていると思う」など、解釈的に承諾を得ることもあり、悪く言えば都合よく解釈しているという批判に耐えることは難しい。しかし、逆に承諾していないと確認をとることも困難であり、介護者の願いや思いをさえぎってまで事前の意思を突き通すことが、今現在の意思であるとも追認をえることはできない。各家庭内の倫理や愛情に反しない程度の拡大解釈が許されているのは、家族介護者による推察が住み慣れた暮らしの延長線上であることに由来する。施設職員であれば、エゴや先入観と言われる解釈であっても、家族介護者は、生の履歴の文脈上の本人と対話が可能であるという点において許容されるという特徴を有している。

2. 本研究の結論

家族介護者や施設職員による推察は、表出困難な高齢者の意思の存在や変化を察し、その内容をあらゆる視点から推しはかり、絶えず尊重を試みる循環的な特性を有していた。その気づきや解釈は、現在の意思やその内容に真に迫るべく、主観や客観の別をいとわず、個別的な暮らしや人生の文脈に至るまで、親身な心づかいで向き合うものであった。

3. テーマに対する見解

以上の結論を経て、著者の見解を述べる。

(1) 意思を推察し続ける親身性

本研究は、明確に表出することが困難な高齢者の意思を尊重するにあたって、家族介護者や施設職員による推察の特性を明らかにすることを目的とする。それは、たとえ表出困難であっても、すべての人が意思を有することを尊重し、その内容を諸状況から推しはかることは、尊厳の尊重において欠かすことが出来ない。

家族介護者や施設職員による推察が、意思への関心、気づき、解釈、評価の4つの特性の循環によって繰り返されることが明らかになった。施設職員においては専門性をともなって3つの類型に整理することができた。

こうした特性への理解や類型化によって、推察の負担が生じる場合の支援も整理が可能となり、調査で負担として挙げられていた支援ニーズとのミスマッチにも、軽減に向けた示唆を得ることができた。一方で、関心をともなった個別性による推察の成熟も、推察に関する専門性への研鑽も、家族介護者や施設職員が当然に課せられた責任ではなく、内発的に取り組まれている高度なケアである。

感情的にも実務的にも多忙な家族介護者や施設職員が、多様な課題に優先して推察を繰り返す最も重要な動機は、内発的な理由に他ならない。表出困難さにあえぐ人に関心を傾け、愛情をもって、敬意をもって、ひたすらに親身であろうとする精神は、もっとも直接的に重要な要因であると考えられる。本研究では、このように推察に通底する性質について、「親しみをもって関わり、意思を尊重し続ける心づかい」として「親身性」と定義したい。

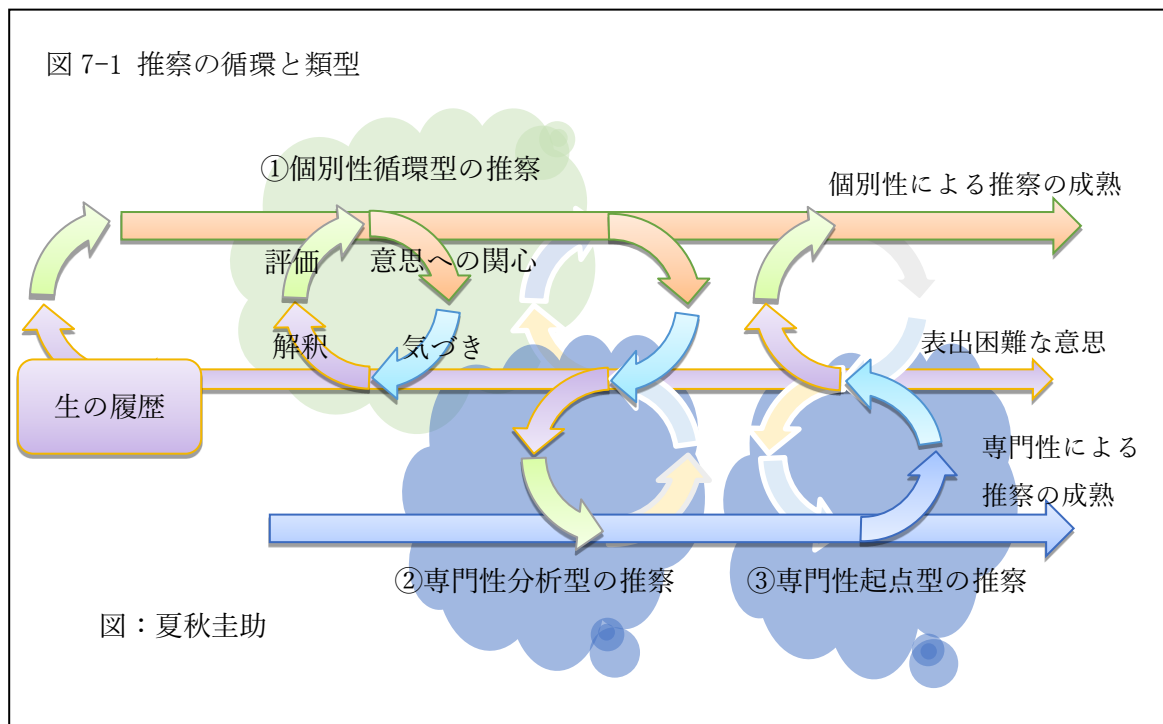
(2) 社会福祉の専門性として

家族介護者が生の履歴の共有など、個別性への理解から推察を行うのに対し、施設職員は専門性を活かし、それぞれの立場から推察を行っていた。特に、図7-1の「②専門性分析型の推察」、「③専門性起点型の推察」においては、表出困難な高齢者の個別性への理解が十分ではない中の推察、施設におけるその他のケアと推察の両立などにおいて、専門性を要していた。

調査において見られた専門性の多くは、ケア経験の蓄積による直感や勘として説明されていたが、さらに施設の理念や社会福祉の倫理、技術なども挙げられていた。これらは、

推察が自然な関わりの中に織り込まれるほどに、理念や倫理綱領に照らした判断は自明の内に行われ、専門性の到達点は直感と評されるほどであった。すなわち、理論や理念などの形式知の暗黙知化であり、意識せずに適用できることによって、個別性循環型の中に専門性を取り込むことが可能となっている。

社会福祉学が学問として導いた知見や理論が、実践上に用いられるにあたって、ケア経験に照らされながら理解され、暗黙知化してされている可能性があることがわかった。



(3) 推察における個別性と専門性の相互理解

家族介護者と施設職員は、表出困難な意思をそれぞれの立場から推察する過程で、高齢者本人との関係性を接近させ、時に間主観的に意思を推察していた。このような、表出困難な意思の推察において、その瞬間の微細な表出に耳を澄ませる関わりは、かけがえのない人間として尊厳を尊重するという倫理綱領にも沿った関わりである。しかし、推察が家族介護者との共通点を有する以上、倫理綱領を形式知として理解して実践されているというよりも、親身性もとづく実践と捉えるべきであり、表出困難な高齢者の Well-Being の実現という目的を共通する体験は、推察の差異を尊重し合えるほどに相互理解を生む可能性がある。これは、高齢者が表出困難となっても地域で暮らし続けるために有すべき、地域が共生する最小単位の核となりうるのではないかと考える。

すなわち、推察を必要とする高齢者本人の意思を中心として、ケアに関わる施設職員、家族介護者、地域住民一人ひとりが推察の経験を暗黙知として蓄積する。これによって、推察を必要とする別の他者、あるいは推察に負担を有している者に対しても理解を深める

ことができる。社会福祉の専門職は、形式知と他の倫理綱領をあわせ持つことにより、これらの核を構造的に地域福祉へと導くことが可能ではないかと考えられる。ただし、その最小単位として、わずかであっても、住民一人ひとりに何らかの推察の経験が蓄積されていくことが必要となる。

第8章 残された課題

1. 質的研究としての課題

本研究は、表出困難な人の意思の尊重における「推察」を明らかにするため、質的研究による調査をおこなった。質的研究とは、調査対象となる母集団に一般化して「適用」できる知見・理論を導くというよりは、調査対象となった人々に対する「理解」に資する知見・理論を導く立場である（大谷 2019:87）。そのため、本研究による示唆が、必ずしも調査対象以外の一般に対し、同様に「適用」できると主張できるものではない。

対象となった人々に対する「理解」を求める立場としての質的研究において、調査規模の大小が直接的に課題とまではいえないが、得られた知見を理論として理解できる範囲が限定的であることは課題である。本研究の調査対象者が、研究目的に沿って紹介され、適当と判断した家族介護者5名、施設介護者5名の計10名を対象とした調査である。

例えば、本研究の調査を引き受けてくださった方々の背景には、調査を引き受けることが出来なかった方々がいる。調査の依頼にあたって、家族会への参加において繰り返し対面するなど、また、信頼の厚い仲介者が丁寧に紹介してくれたにも関わらず、面接の協力依頼は約半数が断られることとなった。面接を断った方々の中には、そもそも打ち明けがたいテーマであるという要因だけではなく、受容しがたい体験を抱えるなど、深刻な負担や疲弊を有している人がいた可能性もある。

この点を鑑みれば、今回面接に協力してくれた方々は、苦闘を抱えながらも納得を得られた人々という属性が秘められている可能性もあり、反対により深刻な状況にある家族介護者や施設職員の実情を反映できていない。これは、調査上、倫理的にアプローチできない方々がいるという限界でもあった。質的研究という立場上の限界であり、一般化にあたっては、今後の量的研究の立場から明らかにされていくことが期待される。

2. 職務として理解できる範囲の課題

家族介護者は家族としての愛情によって、施設職員は理念、倫理、誠意などによって、それぞれが内発的に思いを寄せて推察している実情を語っていた。推察自体は、職務として、あるいは家族であるというだけで責任が課されるものではなく、容易に評価できるものでもない。感情的にも実務的にも多忙な家族介護者や施設職員に対し、より良さとして提案するためには、超えるべき課題がいくつもある。

例えば、インタビューの語りの中でも、職員が慢性的に不足している施設、運営上の課題からインタビュー後に解散となった施設があった。それぞれが、多様な課題に優先して、表出困難な高齢者を含む、一人ひとりの利用者の尊厳を大切にしたい人々であった。

自身の振る舞いに矛盾なく向き合うこと、他者の幸せを間主観的に共有すること、精神的充実という報酬として得られる可能性もあるが、それは職務として求める範囲を超えているという課題もある。

謝辞

本研究の遂行にあたり、指導教官として終始多大なご指導を賜った、西南学院大学大学院人間科学研究科教授安部計彦先生に深謝致します。同大学院教授倉田康路先生、並びに同大学院教授河谷はるみ先生には、本論文の作成にあたり、副査として適切なお助言を賜りました。ここに深謝の意を表します。また、西南学院大学大学院人間科学研究科元教授賀戸一郎先生には、公私にご指導を頂きましたこと、深謝いたします。

調査協力をいただいた家族介護者、施設職員の方々に感謝いたします。最後に、安部研究室、賀戸研究室の皆様には、本研究の遂行にあたり多大なお助言、ご協力頂きました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 天田城介(2003)「<古い衰えゆくこと>の社会学」多賀出版
- 天田城介(2011)「古い衰えゆくことの発見」角川学芸出版
- 荒木正平(2014)「派生的暴力としての認知症高齢者のカテゴリー化—介護者の「語り」を手がかりに」『文化環境研究』7, 30-38
- Banks, S. (2012) *Ethics and Values in Social Work*, Palgrave Macmillan. (石倉康次・児島亜希子・伊藤文人監訳(1999)『ソーシャルワークの倫理と価値』法律文化社)
- Canda, Edward R. and Furman, Leola Dyrud(2010) *Spiritual Diversity in Social Work Practice : The Heart of Helping*, 2nd Ed., Oxford University Press. (=2014, 木原活信・中川吉晴・藤井美和翻訳『ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か』ミネルヴァ書房)
- 陳麗娜(2016)「認知症高齢者ケアにおけるアセスメントに関する研究」東北福祉大学大学院 博士論文
- ジャーナル・S・ブレイク(2014)『ホスピスの母 マザー・エイケンヘッド』春秋社
- 渕野勝弘(2019)『成年後見制度と意思決定支援に関する現状と課題』精神神経学雑誌 121(4)、282-288
- 藤井美和(2010)「スピリチュアルケアの本質—死生学の視点から」『老年社会学』31(4)、522-528
- 後藤みゆき、小川全夫(2009)「在宅終末期がん患者の家族介護者支援をめぐる研究動向と課題—インフォーマル・レスパイトケアの提起—」『山口県立大学学術情報』(2)
- 長谷川和夫(2011)「認知症の人の看取りに関する世界の課題と展望」『日本の看取り、世界の看取り』
- 橋本直子(2014)「精神保健福祉におけるスピリチュアリティへのアプローチ：欧米の文献からの一考察」『Human Welfare』6(1)
- 春名苗(2006)「在宅介護支援センターを活用した地域包括支援センターの方向性」『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』(5)
- 廣瀬真理子(2009)「オランダにおける終末期ケアの現状と課題」『海外社会保障研究』Autumn(168)、48-57
- 本田美和子、イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ(2014)『ユマニチュード入門』医学書院
- 藤井美和(2018)「社会福祉における価値—いのちの視点から—」人間福祉学研究 11(1)
- 藤本健太郎(2009)「ドイツにおける終末期ケア ネットワークによる在宅高齢者のサポート」『海外社会保障研究』Autumn(168)、36-47
- 林 由貴子(2016)「ショーペンハウアー共苦倫理学の超越論哲学的基礎づけ」関西学院大学博士論文
- 飯田史彦(2007)『生きがいの創造Ⅲ』PHP 研究所

- 池田心豪(2021)『介護サービスの供給制約と短時間勤務の必要性：介護の再家族化と自立重視的介護』社会保障研究 6(1)、45-58
- 板橋勇仁(2016)『底無き意志の系譜 ショーペンハウアーと意思の否定の思想』法政大学出版社
- 伊東香純(2017)『支援された意思決定と代理意思決定の違い—国連障害者権利条約採択までの過程から—』「Core Ethics」(13)立命館大学大学院先端総合学術研究科紀要
- 岩本喜久子(2012)「ホスピス・緩和ケアにおけるグリーフサポートとソーシャルワーカーの役割」『ソーシャルワーク研究』37(4)、17-24
- J-P・サルトル(1996)『実存主義とは何か』人文書院
- 神居文彰、田宮仁、長谷川匡俊、藤腹明子(1993)『臨終行儀 日本のターミナル・ケアの原点』公和美術
- Kant, Immanuel (1785)Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, (=2012, 中山元訳『道徳形而上学の基礎づけ』光文社.)
- 川越雅弘(2021)『地域在住要支援・要介護高齢者に対する家族介護の実態：全国調査を中心に』社会保障研究 6(1)、4-17
- 金圓景(2021)『認知症の人の意思決定支援をめぐる動向』明治学院大学社会学・社会福祉学研究 157、225-237
- 木原活信(2003)『対人援助の福祉エートス ソーシャルワークの原理とスピリチュアリティ』ミネルヴァ書房
- 木下康仁(1999)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』弘文社
- 小畑万里(2012)『地域・施設で死を看取るとき いのちと死に向き合う支援』明石書店
- 川崎富夫(2012)「法学的意思と意志の異同と患者の自己決定権」生命倫理 22(1)
- 小林隆児・西研・竹田青嗣・ほか(2015)『人間科学におけるエヴィデンスとは何か—現象学と実践をつなぐ』新曜社
- 児玉理紗(2015)『保育者養成課程におけるエピソード記述の実践—保育実践の言語化の意味を考える』比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究
- 厚生労働省(2019)『認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン』
- 厚生労働省(2019)『成年後見制度利用促進基本計画』
- 厚生労働省(2017)『第19回緩和ケア推進検討会資料 資料5 今後の緩和ケアのあり方について(案)』<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000116614.pdf> (最終検索日：2017年10月16日)
- 厚生労働省(2015)『高齢者虐待対応状況調査結果概要』
<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyakutaiboushitaisakusuishinshitsu/0000155596.pdf> (最終検索日：2017年10月16日)

厚生労働省(2013)『地域包括ケアシステムの5つの構成要素と「自助・互助・共助・公助」』
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link1-3.pdf (最終検索日: 2017年10月16日)

厚生労働省社会保障審議会介護給付費分科会(2014)『平成27年度介護報酬改定に向けて(介護福祉施設サービスについて)』

厚生労働省雇用均等・児童家庭局雇用均等政策課(2013)『平成23年度雇用均等基本調査』

厚生労働省社会保障審議会介護保険部会(2013)『認知症施策の推進について』

厚生労働省医政局地域医療計画課(2016)『人生の最終段階の医療における厚生労働省の取組』<http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/wg1/281027/shiryou1-1.pdf>

厚生労働省人口動態・保健統計課(2017)『人口動態統計 平成27年』厚生労働統計協会

厚生労働省政策統括官付参事官付人口動態・保健社会統計室(2017)『平成28年(2016)人口動態統計(確定数)の概況』
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei16/index.html> (最終検索日: 2017年10月16日)

厚生労働省老健局総務課認知症施策推進室『認知症施策推進総合戦略について』
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12301000-Roukenkyoku-Soumuka/04.pdf>

幸福度に関する研究会(2011)『幸福度に関する研究会報告 幸福度指標試案』

小山泰代(2021)『家族介護者の介護負担の経時変化』社会保障研究 6(1)、18-32

久保真人(2007)『バーンアウト(燃え尽き症候群)-ヒューマンサービス職のストレス』日本労働研究雑誌 49(1)、54-64

窪田暁子(2013)『福祉援助の臨床-共感する他者として』誠信書房

窪寺俊之(2008)『スピリチュアルケア学概説』三輪書店

窪寺俊之(2004)『スピリチュアルケア学序説』三輪書店

倉田 康路(2017)『クオリティを高める福祉サービス:「苦情」から学ぶクオリティマネジメント』学文社

倉田 康路(2014)『介護保険サービス苦情の構造:苦情を活かせばサービスが変わる』学文社

鯨岡峻(2005)『エピソード記述入門-実践と質的研究のために』東京大学出版会

黒崎宏(1983)「科学的アプローチと哲学的アプローチ」『認知科学の哲学』(16)、35-48

マイケル・ポランニー、高橋勇夫訳(2003)『暗黙知の次元』筑摩書房

増田樹郎(2018)『障害者の「意思決定支援」の臨界をめぐる考察(Ⅰ)~臨床倫理「4分割法」をとおして~』障害者教育・福祉学研究(14)、1-8

松葉祥一・西村ユミ(2014)『現象学的看護研究-理論と分析の実際』医学書院

箕岡真子(2011)「認知症の看取りに関する倫理的問題と展望」『日本の看取り、世界の看取り』

- 三好春樹(2009)『認知症論集 介護現場の深みから』雲母書房
- 三好春樹(2015)『野生の介護—認知症老人のコミュニケーション覚え書き』雲母書房
- 武藤正樹(2014)『2025年へのロードマップ ～地域包括ケアシステムと保険者の役割～』
<http://masaki.muto.net/lecture/201501281.pdf> (最終検索日：2017年10月16日)
- 村上信(2008)「ソーシャルワークとスピリチュアリティに関する欧米と日本の文献の動向
 2002年までの比較」『実践女子短期大学紀要』(29)、95-108
- 村瀬孝生(2011)『宅老所よりあいの仕事 看取りケアの作法』雲母書房
- 村田久行(2011)「終末期がん患者のスピリチュアルペインとそのケア」『千葉看護誌』16(2)
- 長尾 和宏、丸尾 多重子(2015)『親の「老い」を受け入れる』ブックマン社
- 中村陽子、宮原伸二、人見裕江(2000)「都市における在宅死と医療福祉の課題」『川崎医療
 福祉学会誌』10(2)、195-204
- 中沢卓実、結城康博(2012)『孤独死を防ぐ 支援の実際と政策の動向』ミネルヴァ書房
- 内閣府(2019)『令和元年版 高齢社会白書』日経印刷
- 内閣府(2017)『平成29年 高齢者の健康に関する調査』日経印刷
- 日本福祉大学大学院質的研究会編(2013)『社会福祉・介護福祉の質的研究法—実践者のための
 の現場研究』太洋社
- N. K. Denzin and Y. S. Lincoln(2000) Handbook of Qualitative Research 2nd edition.,
 Sage. (=2006, 平山満義・岡野一郎・古賀正義訳『質的研究ハンドブック 1巻—質的研究
 のパラダイムと眺望』北大路書房.)
- 日本弁護士連合会(2015)『『成年後見制度』から『意思決定支援制度』へ ～認知症や障害の
 ある人の自己決定権の実現を目指して～』第58回人権擁護大会シンポジウム 第2分科会
 基調報告書
- 日本ホスピス緩和ケア協会『WHO(世界保健機関)の緩和ケアの定義(2002年)』
<http://www.hpcj.org/what/definition.html> (最終検索日：2017年10月16日)
- 日本医師会医療政策会議(2014)『日本における社会保障のあり方～欧州の社会保障の比較・
 検証から～(平成26年3月)』http://dl.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20140402_5.pdf
 (最終検索日：2017年10月16日)
- 野尻雅美(2013)「高齢者のQOLプロモーションとスピリチュアリティ」『日本健康医学会雑
 誌』22(2)、78-83
- 大谷京子(2014)『ソーシャルワークにおけるアセスメント—ワーカーの認識とスキル—』日
 本社会福祉大学社会福祉論集 130
- 太田匡洋(2018)「ショーペンハウアーにおける共苦と想像力」倫理学研究 48, 90-100
- シシリー・ソンドラス他(2006)『ホスピス—その理念と運動』雲母書房
- 岡本宣雄(2010)「スピリチュアリティを焦点としたケアのアプローチモデルに関する研究
 パストラルケアにおけるアセスメントの研究史から」『川崎医療福祉学会誌』20(1)、9-97
- 奥村由美子(2012)「認知症高齢者への医療福祉」『川崎医療福祉学会誌』(増刊)、353-369

- 岡野守也(2000)『トランスパーソナル心理学』青土社
- 大岩孝司、鈴木喜代子(2009)「末期がんのケア／在宅緩和ケア」『治療』91(5)
- 大下大圓(2014)『「実践的スピリチュアルケア ナースの生き方を変える”自利利他”のころ』日本看護協会出版会
- 大谷尚(2007)「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』54(2)
- 大谷尚(2011)「SCAT: Steps for Coding and Theorization 明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』10(3)
- 大谷尚(2019)「質的研究の考え方—研究方法論から SCAT による分析まで」名古屋大学出版会
- 小澤竹俊(2008)『苦しむ患者さんから逃げない！医療者のための実践スピリチュアルケア』日本医事新報社
- Peter Singer (1993) Practical Ethics, Second edition. Cambridge University Press
(山内友三郎・塚崎智監訳(1999)『実践の倫理』[新版] 昭和堂).
- 阪本恭子(2012)「これからの家族と介護の関わり ドイツ家族介護期間法」『医療・生命と倫理・社会』(11)、102-110
- 志真泰夫(2007)「これからのホスピス緩和ケア—専門性の確立と地域への普及」『ホスピス緩和ケア白書』2007、10-16
- 志真泰夫(2007)「がん対策基本法とホスピス緩和ケア—包括的がん医療と地域における緩和ケア提供体制」『ホスピス緩和ケア白書』2011、1-5
- 世界保健機関 編、武田文和 訳(1993)「がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア がん患者の生命へのよき支援のために」金原出版
- 柴田博(2015)「学際的な学問としての死生学」『医療と社会』医療と社会 25(1)、9-20
- 柴田純子、佐藤禮子(2007)「在宅終末期がん患者を介護している家族員の体験」『千葉看護誌』13(1)
- 清水哲朗(2015)『事前指示を人生の最終段階に関する意思決定プロセスに活かすために』日本老年医学会雑誌 52(3)
- 下村恵美子(2011)『宅老所よりあいの仕事 生と死をつなぐケア』雲母書房
- 清水哲朗(2007)『高齢社会を生きる—老いる人／看取るシステム』東信堂
- 新村拓(2001)『在宅死の時代 近代日本のターミナルケア』法政大学出版局
- 白石真澄(2021)『高齢者介護の質に関する予備的調査』政策創造研究(15)、153-176
- 杉野美和、奥山真由美、道繁祐紀恵(2015)「高齢者への事前指示書の普及に関する文献的考察」『山陽論叢』22
- 末田啓二(2021)『在宅介護ストレスへの新たな視点:-ストレスの二面性に着目して-』甲子園短期大学紀要 39(0)、15-21

- 諏訪免典子(2012)『看取りケアの基本スキルがよくわかる本』ぱる出版
- 終末期医療に関する意識調査等検討会(2014)『人生の最終段階における医療に関する意識調査 報告書』<http://www.mhlw.go.jp/bunya/iryuu/zaitaku/dl/h260425-02.pdf> (最終検索日：2017年10月16日)
- 橘尚美(2004)「医療を支える死生観 医師へのインタビュー調査を通じて」『関西学院大学社会学部紀要』97、161-179
- 高草木光一(2016)『岡村昭彦と死の思想 ―「いのち」を語り継ぐ場としてのホスピス―』岩波書店
- 陀安広二(2004)「パーソン論とはどのような倫理か：シンガーを中心に」『医療・生命と倫理・社会』3(2)152-159
- 筒井孝子(2013)「地域包括ケアシステムの基本的考え方」『2025年に向けた新しい地域づくり―地域包括ケアシステムの構築を目指して―』
http://www.murc.jp/docs/care/care_04.pdf (最終検索日：2017年10月16日)
- 塚本恵里香(2021)『通所介護事業所における介護職員の感情労働と健康状態および職場満足度との関連』『人間科学研究』33・34(2・1)、215-224
- 塚本恵里香(2013)『高齢者通所介護事業所における介護職員の感情労働と介護業務に関する一考察』『人間科学研究』26(1)、81-81
- 打本弘祐(2011)「スピリチュアルケアの諸相(1)窪寺理論をめぐって」『桃山学院大学社会学論集』44(2)、247-279
- 打本弘祐(2011)「スピリチュアルケアの諸相(2)大下理論をめぐって」『桃山学院大学社会学論集』45(1)、83-112
- 打本弘祐(2012)「スピリチュアルケアの諸相(3)キッペス理論をめぐって」『桃山学院大学社会学論集』45(2)、119-147
- Flick, Uwe(2011) *An introduction to qualitative research 4th edition.*, Sage. (=2012, 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子翻訳『新版 質的研究入門―<人間の科学>のための方法論』春秋社.)
- 上野千鶴子、大熊由紀子、大沢真理他(2008)『ケアすること』岩波書店
- ウォルデマール・キッペス(2009)『スピリチュアルな痛み 薬物や手術でとれない苦痛・叫びへのケア』弓箭書院
- 涌井智子(2021)『在宅介護における家族介護者の負担感規定要因』『社会保障研究』6(1)、33-44
- World Health Organization(1990)『Cancer Pain Relief and Palliative Care』
http://apps.who.int/iris/bitstream/10665/39524/1/WHO_TRS_804.pdf (最終検索日：2017年10月16日)
- World Health Organization(2002)『National Cancer Control Programmes: policies and Managerial Guidelines. -2nd ed.』
<http://www.who.int/cancer/media/en/408.pdf> (最終

検索日：2017年10月16日)

山本幾生(2008)「意志について：ショーペンハウアーとニーチェ」關西大學文學論集
57(4)A1-A37

山浦晴男(2012)『質的統合法入門－考え方と手順』医学書院

山崎章郎、二ノ坂保喜(2012)『病院で死ぬのはもったいない〈いのち〉を受けとめる新しい町へ』萩原印刷

山崎康仕(2011)「英国における終末期医療への取り組み」『神戸大学国際文化学部紀要』36)、
23-60

安田真知子、恩幣宏美、他(2010)「在宅療養を望む終末期がん患者の看護 主介護者に焦点をあてた支援の検討」『透析会誌』43(5)、467-472

淀川キリスト教病院ホスピス(1997)『ターミナルケアマニュアル 3版』最新医学社

吉田輝美(2014)『感情労働としての介護労働-介護サービス従事者の感情コントロール技術と精神的支援の方法』旬報社

吉本隆明、河合隼雄、押田成人、山折哲朗(1993)『思想としての死の準備』三輪書店

好井裕明(2006)『「あたりまえ」を疑う社会学 質的研究のセンス』光文社